

ХРАНИЗ ПОКРОВА ПРѢСВЫА  
БЦЫ ВЪ Г. ООСАКА.

大阪生神女庇護聖堂

明治四十四年七月刊行東京

寫真画五十面附祝頌餘音

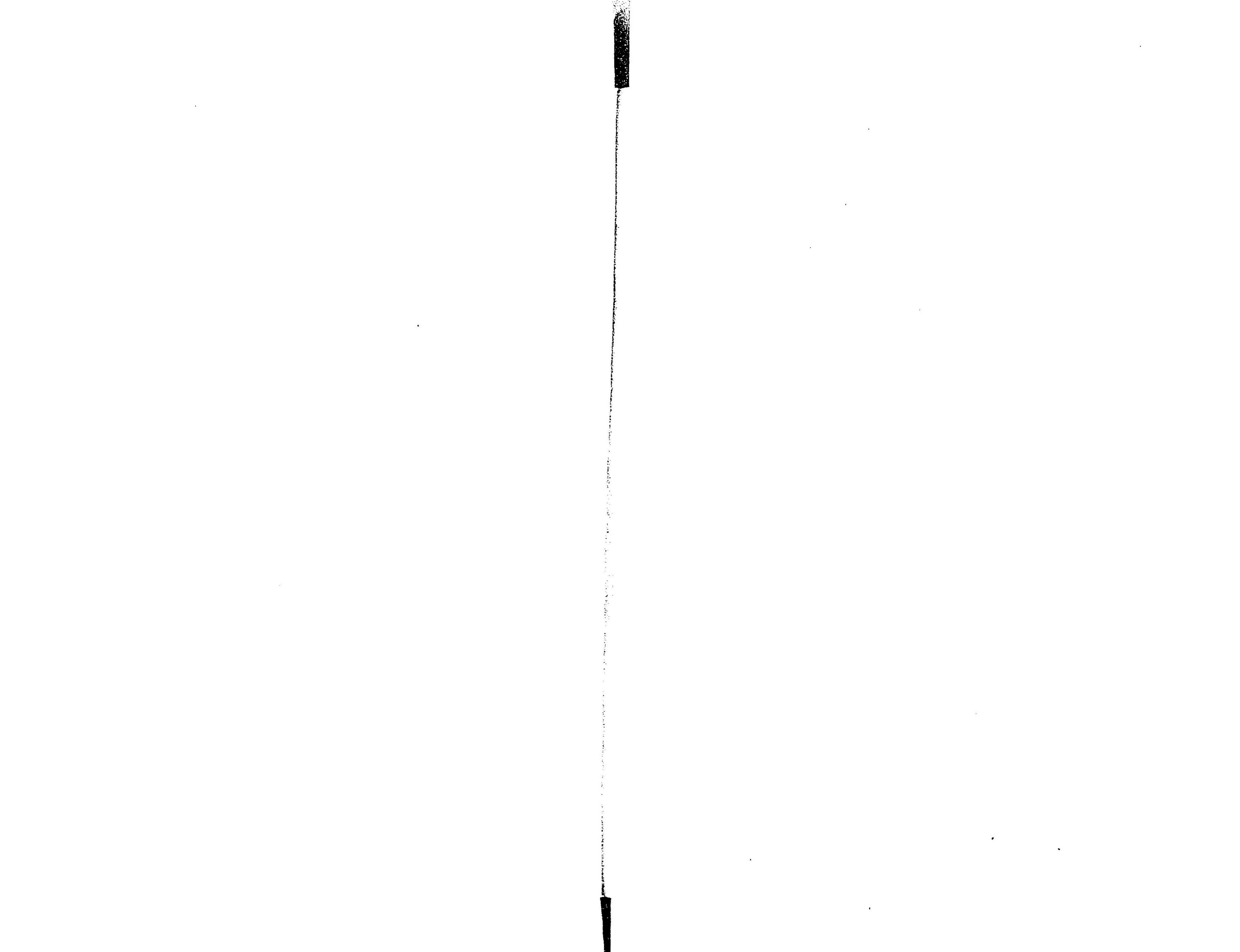
267  
186

1911.

全

TOKIO.







特49  
310



聖生神女庇護聖堂

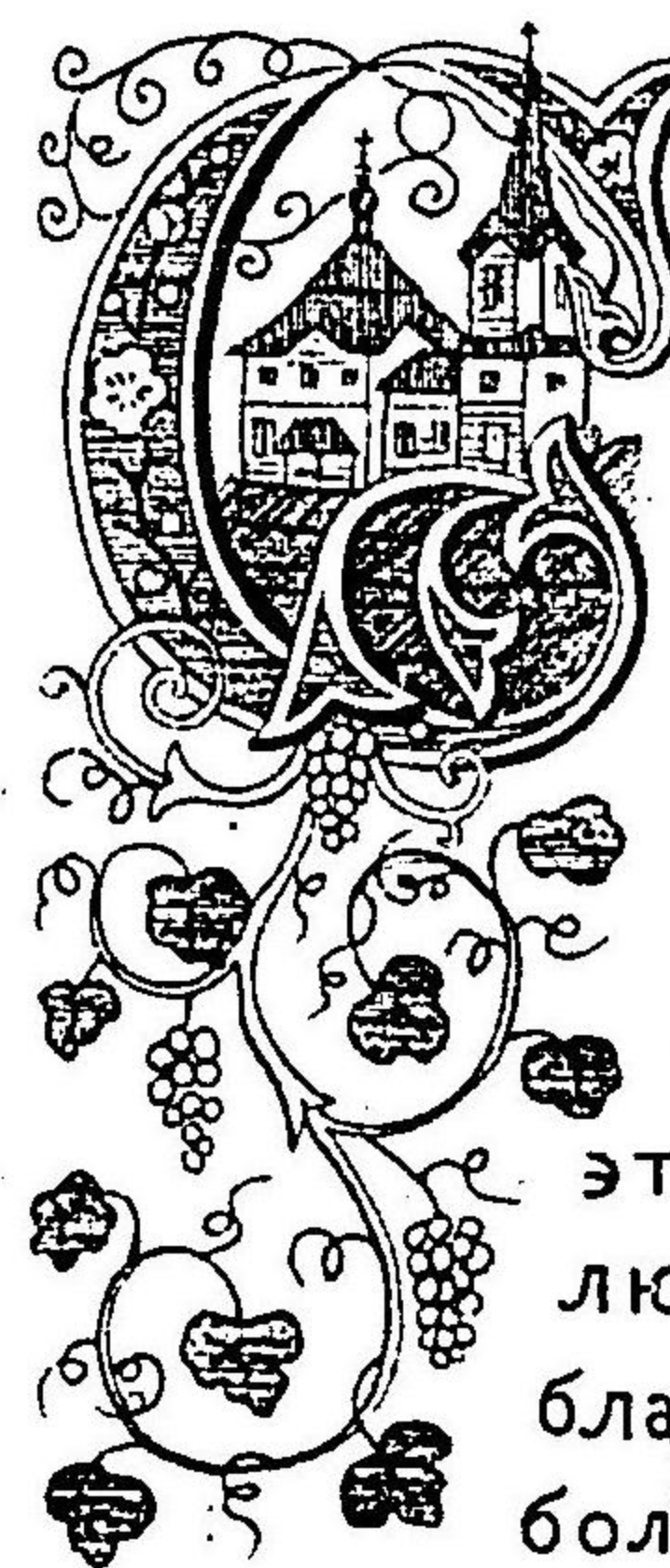
寫真畫  
五十面

明治

44.8.18  
丙交







ВЯТОЙ ХРАМЪ во имя ПОКРОВА  
ПРЕСВЯТОЙ БОГОРОДИЦЫ въ  
ООСАКА воздвигнуть для мо-  
литвы о спасеніи погребенныхъ  
близъ Оосака русскихъ воиновъ,  
но также и для явленія славы  
Божіей среди языческаго  
народа. Глубоко вѣримъ, что  
по милости всемогущаго Бога  
это устроилось, но также и по  
любви и благочестію русскихъ  
благотворителей, жертвовавшихъ  
большими и малыми суммами на  
это дѣло. Издавая нынѣ Альбомъ храма,  
пользуемся симъ случаемъ, чтобы выра-  
зить благотворителямъ чувства нашей  
благодарности. Да помянетъ ихъ Господь  
въ царствіи Своемъ! А ихъ святыми  
молитвами да возраститъ вскорѣ  
юную японскую церковь, чтобъ она  
могла воздать за глубокую любовь  
своей матери церкви!

*1911 г. Июль.*

*ТОКІО. Составитель Альбома.*





## 凡 例

- 一、斯ノ畫帖ハ、大阪生神女庇護聖堂ノ建立ニ因テ彰ハレタル聖恩及ビ露國上下ノ援助者ニ對シテ感謝記念ノ爲、并ニ我方同胞中未ダ斯ノ美善ナル上帝ノ家ニ參拜スルヲ得ザル人々ノ爲ニ、聊カナリトモ其意望ヲ滿足スルヲ得シメンガ爲ニ刊行シタルモノナリ。
- 二、本畫帖ノ刊行準備ニ付テ、特ニ大主教ニコライ尊父ノ祝福ハ申スニ及バズ、又大阪聖堂ノ司祭セルギイ鈴木師父ノ優秀ナル厚意芳情、及ビ輔祭ペトル内田教兄ノ盡力ヲ辱ウシタルコトヲ深謝ス。又殊ニ敬虔ナル寫眞師イアコフ廣田稔君ガ多大ノ勞ヲ以テ斯ノ聖堂内外ト聖像ト聖物一切ヲ採寫シテ、斯ノ事業ノ惟一原材料ヲ供給サレタル其熱心ト献身的性行ニ對シテ厚ク感銘大謝セザルヲ得ズ。
- 三、帖末ニ附録スル所ノ『祝頌餘音』ハ、大阪教會ニ於テ諸方ヨリノ祝詞ヲ採



輯シテ一大帖ニ調製シタル者ノ寫シニシテ(原帖ハ縦一尺三寸五分、横九寸二分、厚二寸二分アリ)最初別ニ一卷ト爲サント欲シタル者ナレドモ、出版ノ都合上、特ニ本畫帖ニ添附シタル者ナリ。其作中或ハ更ニ文ヲ成サザル者アリ、文字亦誤謬少カラズト雖モ、今一々訂正スルヲ得ズ、大抵其儘ニ採録セリ、特ニ諸君ノ御諒察ヲ願フ。

四、編者ハ日夜非常多端ニシテ年中寸暇ナキ孤立奮闘ノ中ニ之ヲ編著刊行シタル者ナレバ、或ハ多少ノ誤脱不完備ノ所ナキヲ保セズ、偏ヘニ大方ノ諒察ヲ仰グ。

大主教閣下御  
來朝ノ五十周年  
明治四十四年(千九百一十一年)六月十五日

東京ノ場末ニ於テ 編 者 識

# 目 録

圖の番號	枚數	圖の番號	枚數
一、新聖堂の外景……………	(1)	十一、神現……………	(10)
二、門外よりの眺望……………	(2)	十二、ハリストス降誕……………	(11)
三、内景其一……………	(3)	十三、ハリストス復活……………	(12)
四、内景其二……………	(4)	十四、晩餐……………	(13)
五、王門……………	(5)	十五、生神女誕生……………	(14)
六、救世主……………	(6)	十六、同進堂……………	(15)
七、生神女……………	(7)	十七、主の迎接……………	(16)
八、天使長ミハイル……………	(8)	十八、顯榮……………	(15)
九、天使長ガウリイル……………	(8)	十九、昇天……………	(16)
十、庇護……………	(9)	二十、五旬節……………	(16)



三一、生神女就寝……………(17)  
 三二、十字架の擧示……………(18)  
 三三、ハリストス王……………(19)  
 三四、使徒ペトル及びアンドレイ……………(20)  
 三五、神學者イオアン及び使徒バ  
 エル……………(21)  
 三六、使徒ファッデイ及び主の兄イ  
 アコフ……………(22)  
 三七、使徒アルフェイの子イアコフ  
 及びシモンジロト……………(23)  
 三八、使徒ゼベデイの子イアコ  
 フ及びワルフオロメイ……………(24)  
 三九、使徒フオマ及びフィリップ……………(25)  
 四十、太后エレナ及び致命者アレ  
 キサンドル……………(26)  
 三一、義婦エリサヘタ及び預言者  
 ザハリヤ……………(27)  
 三二、至聖所……………(28)  
 三三、聖三者……………(29)  
 三四、生神女……………(30)  
 三五、南方の凱旋旗……………(31)  
 三六、同裏面……………(32)  
 三七、北方の凱旋旗……………(33)  
 三八、同裏面……………(34)  
 三九、パニカヂロ……………(35)  
 四十、諸聖器物一式……………(36)

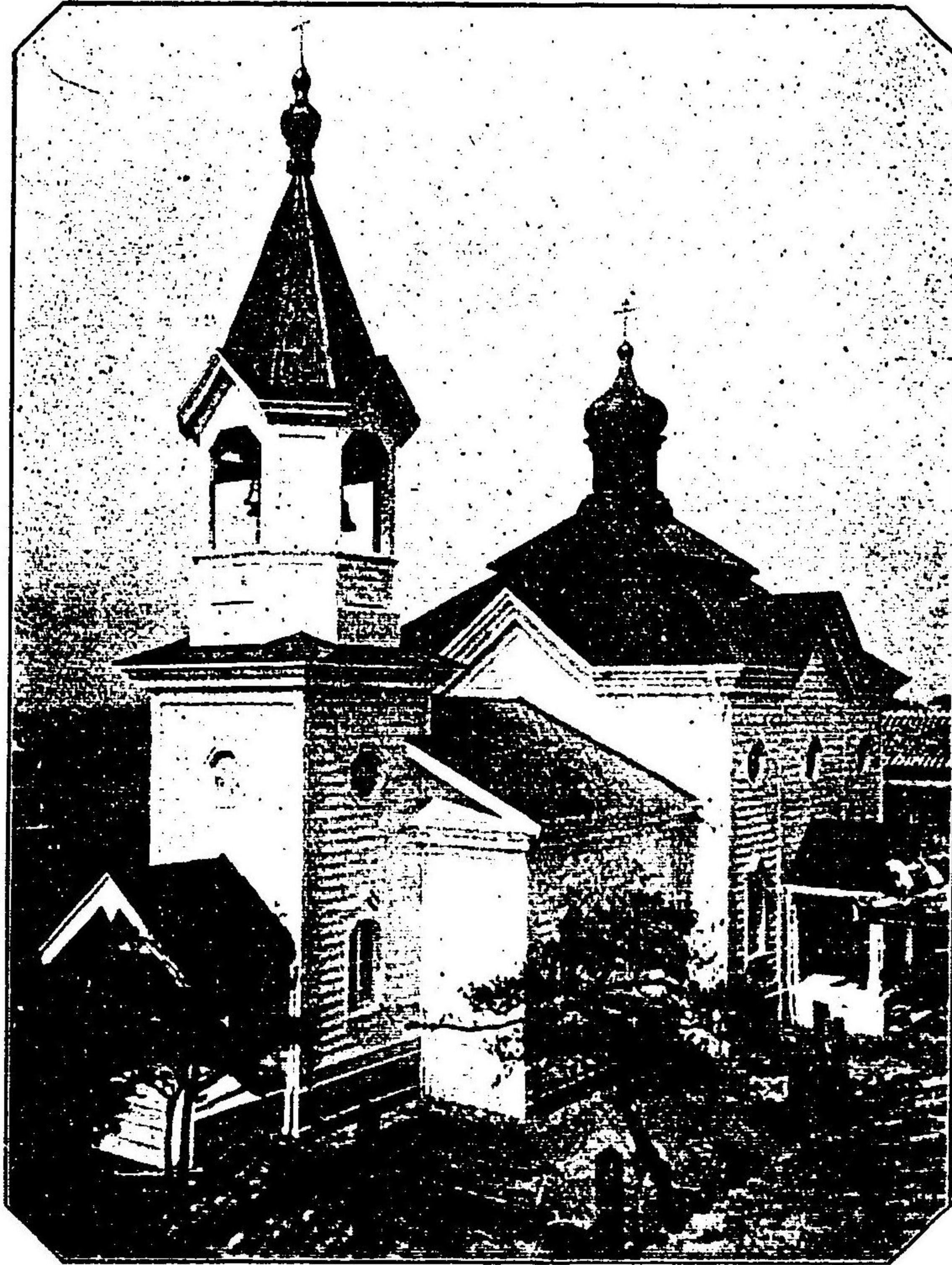
四十一、聖十字架……………(37)  
 四十二、福音經……………(38)  
 四十三、聖龕……………(39)  
 四十四、七燭……………(40)  
 四十五、教役者の居宅其一……………(41)  
 四十六、其二……………(42)  
 四十七、信徒の扣所……………(43)  
 四十八、濱寺に於る露軍死者の墓……………(44)  
 四十九、同上に參集の神品と其他  
 の衆員……………(45)  
 五十、淀川を隔て、新聖堂を望  
 む……………(46)

説明の部

第一章 大阪に聖堂建立の一般の由來……………一  
 第二章 同上特別の由來、及び献金者献納者其他の事……………三  
 第三章 圖説(上)——聖堂の構造、内外詳解、鐘樓及び其他  
 の事……………七



第一圖



大坂生女神庇護聖堂の景外  
Храмъ Покрова Пресвятой Богородицы въ г. Осака.

大阪聖堂

第四章

圖說(中)——イコノスタスの各聖像、至聖所及び聖

八

所の聖像、并に、諸聖器物の事……………一五

第五章

圖說(下)——附屬館、及び濱寺墓地等の事……………二七

第六章

補記……………三〇

附錄

祝頌餘音……………自三三  
至五一

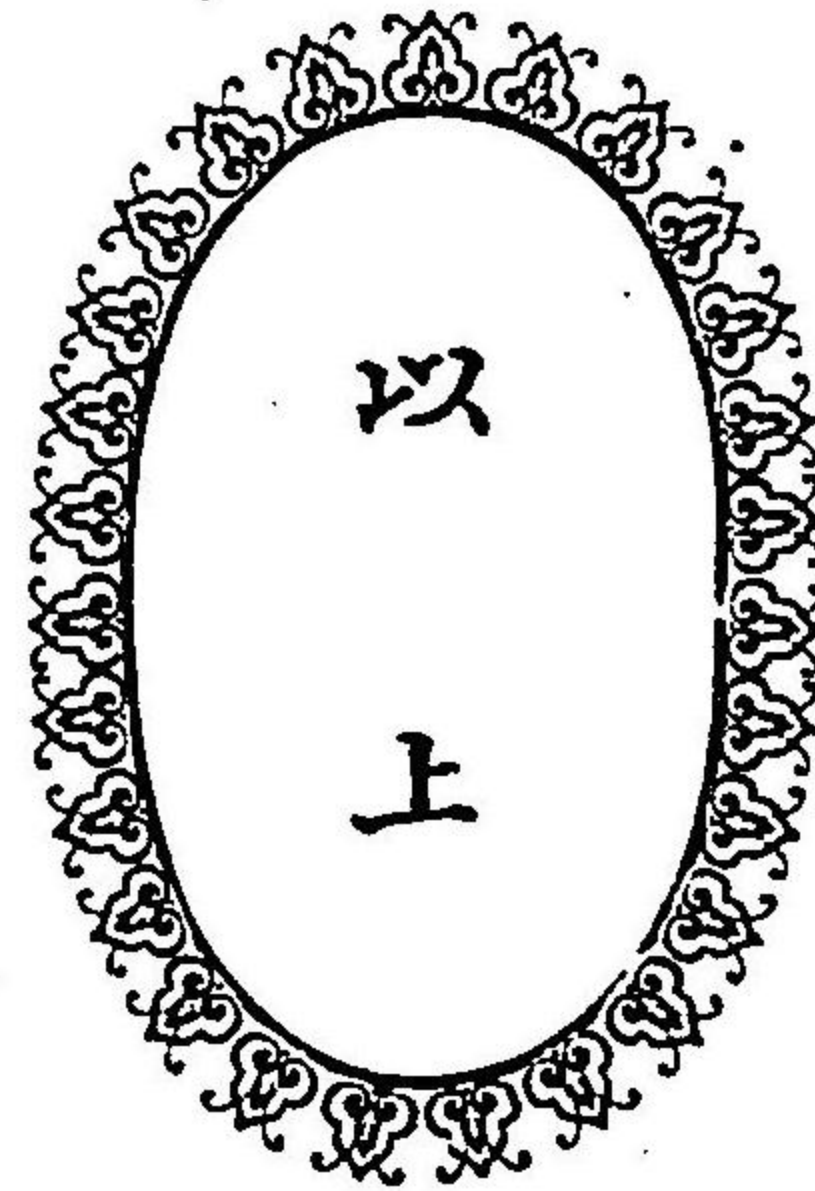
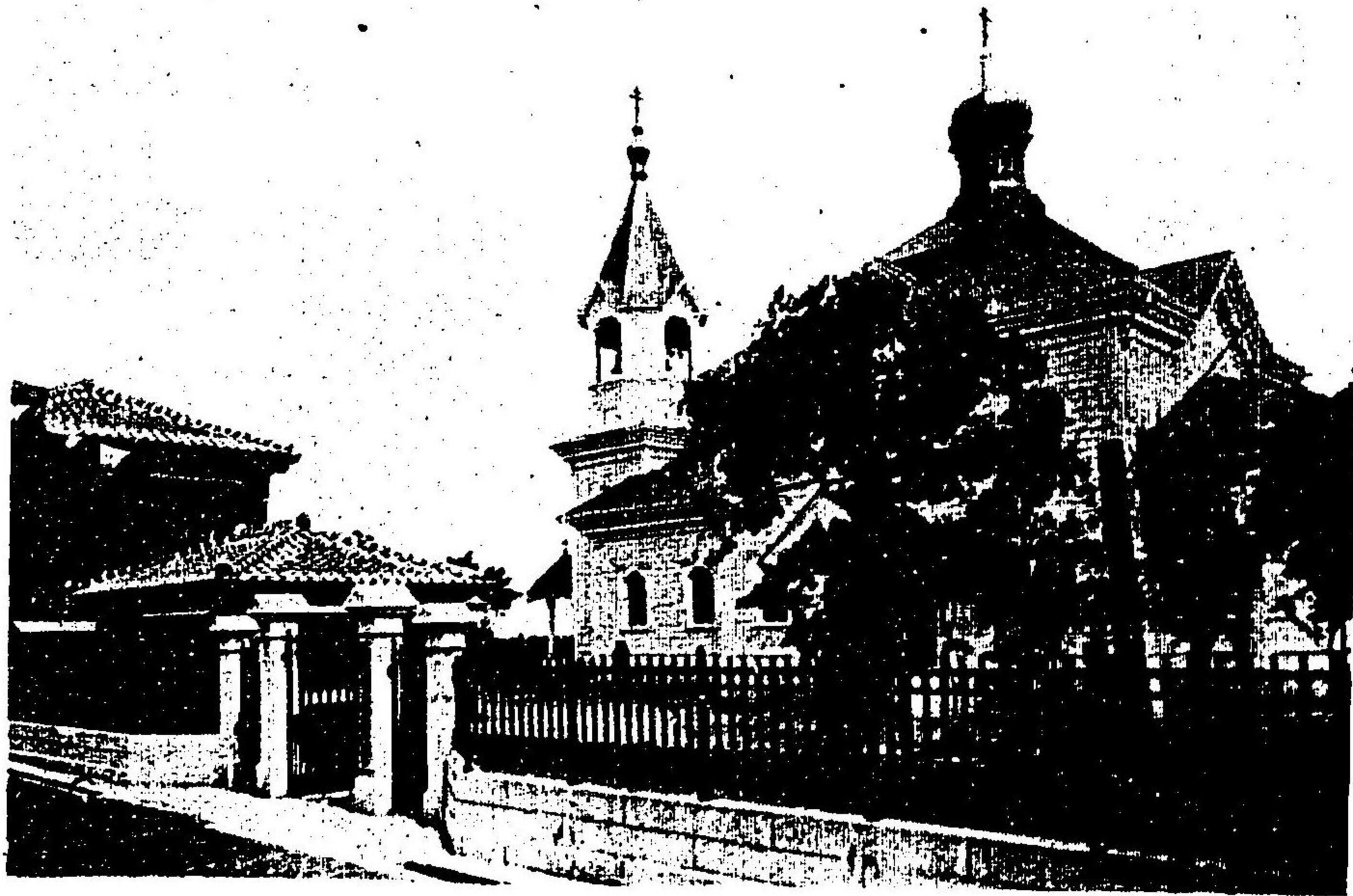


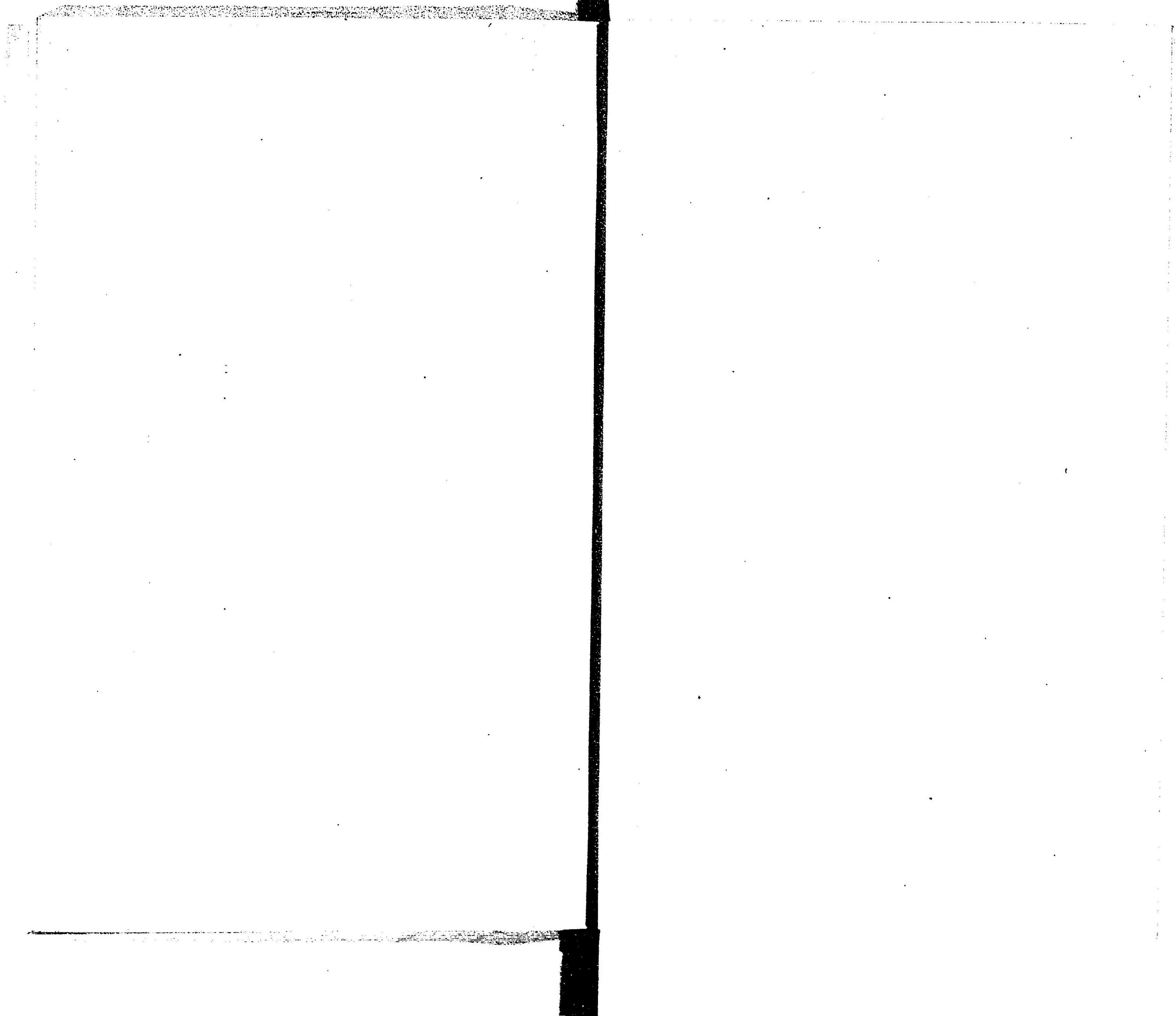


圖 二 第



(二 共) 景外の堂聖新阪大



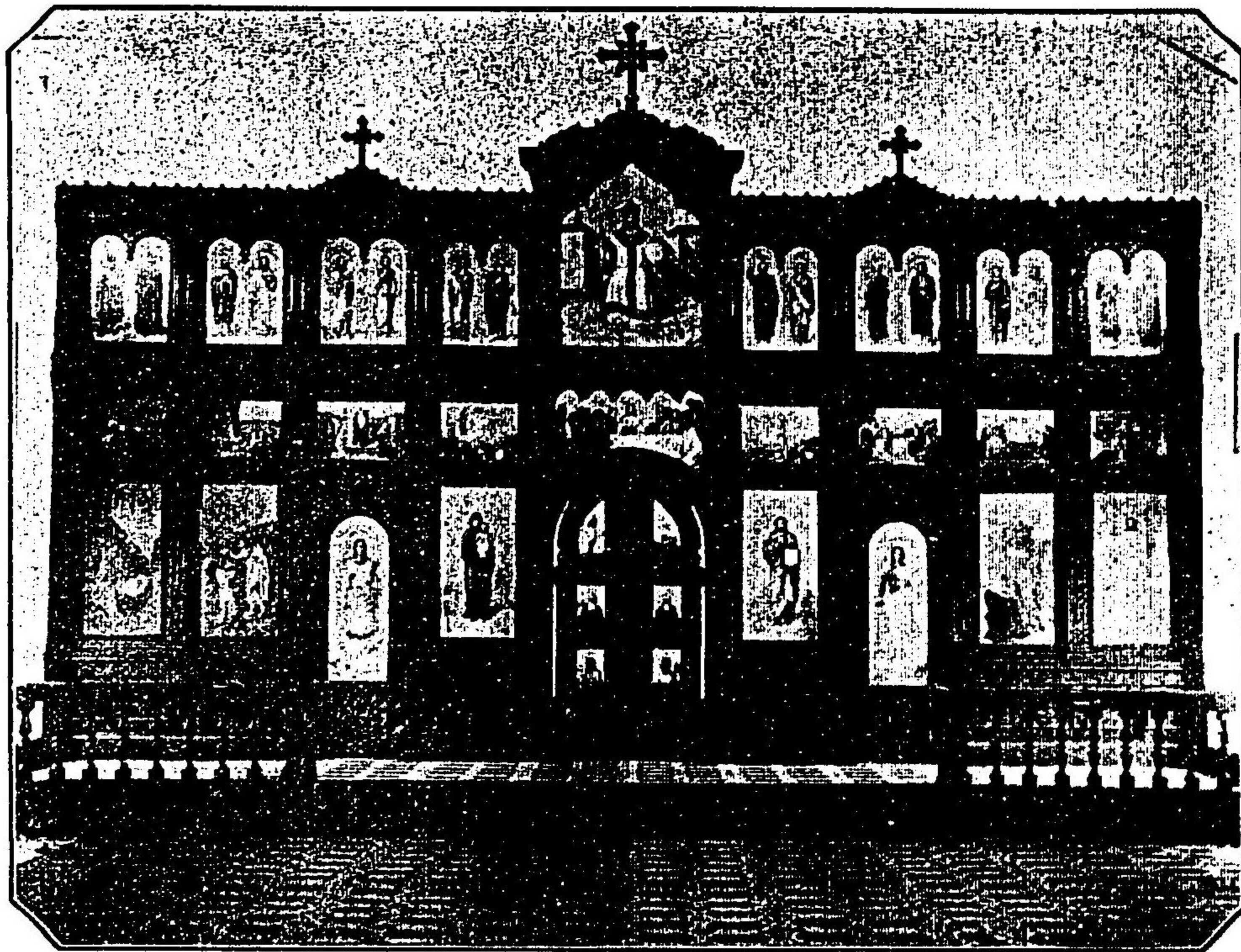




致命者 アレキサンドル	太后 エレナ	使徒 セベテイノ子 ワルホロメイ	使徒 ハツテイ 主ノ兄ヤコフ	使徒 ベト アンドレイ	王 ハリストス	使徒 イオアン パエ エル	使徒 アルヘイノ子 シロト	使徒 フオ フリッ マ	預、義、 ザハリヤ エリサベタ
生誕	進堂	接迎	榮顯	瞻	瞻	天昇	句五	寢	示舉
ハリストス降誕	神現	天使ガウリイル	生神女	音 イオアン ルカ	福 マトフエイ マルコ	救世主	天使ミハイル	生神女庇護	ハリストス復活

目圖の像聖諸スタスノコイ

圖三第



景内の堂聖護庇阪大  
Внутренний видъ Храма Покрова Пр. Бдцы. въ г. Осака.



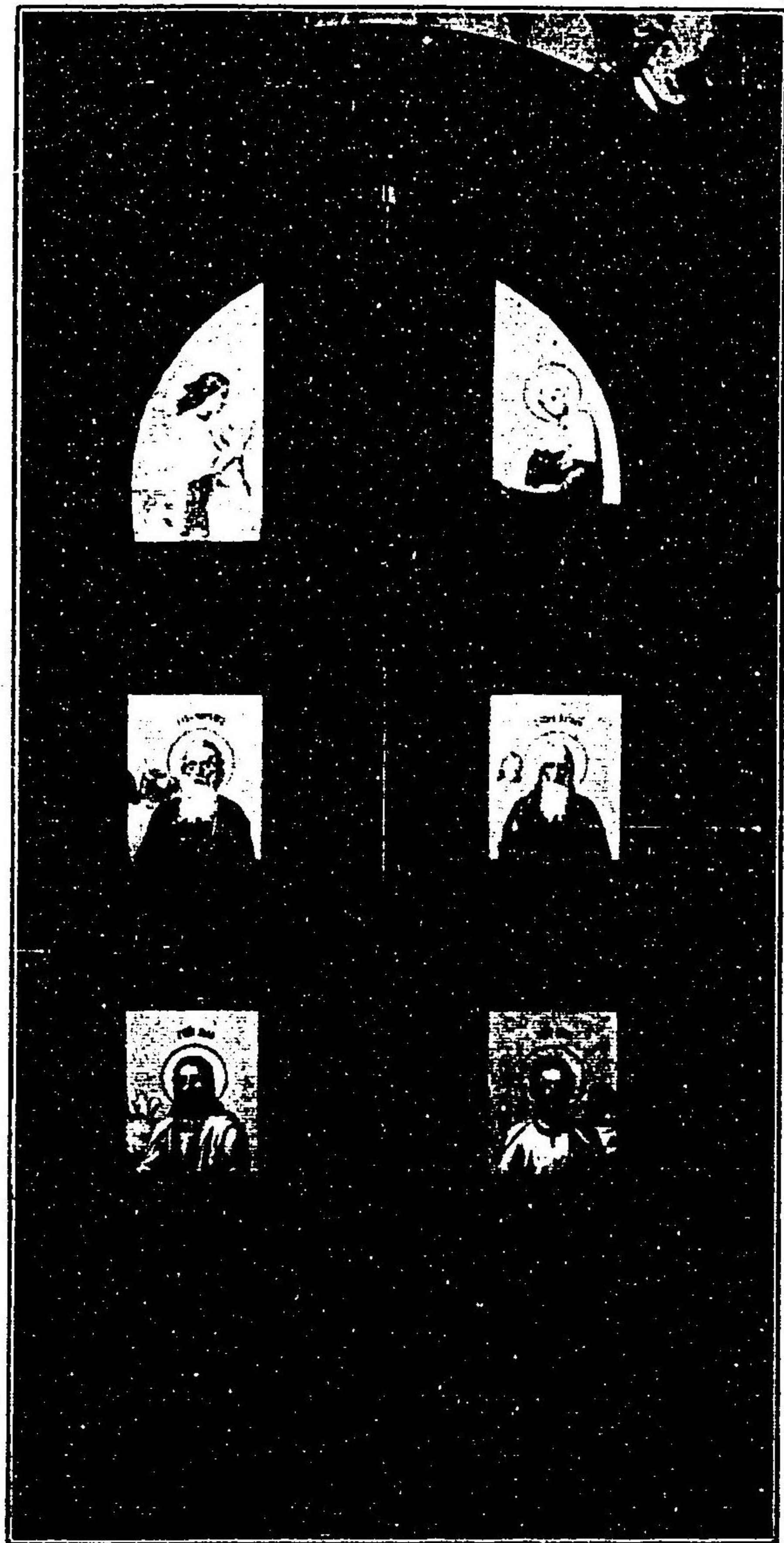
圖 四 第



(二 共) 景内の堂聖新阪大



王  
門

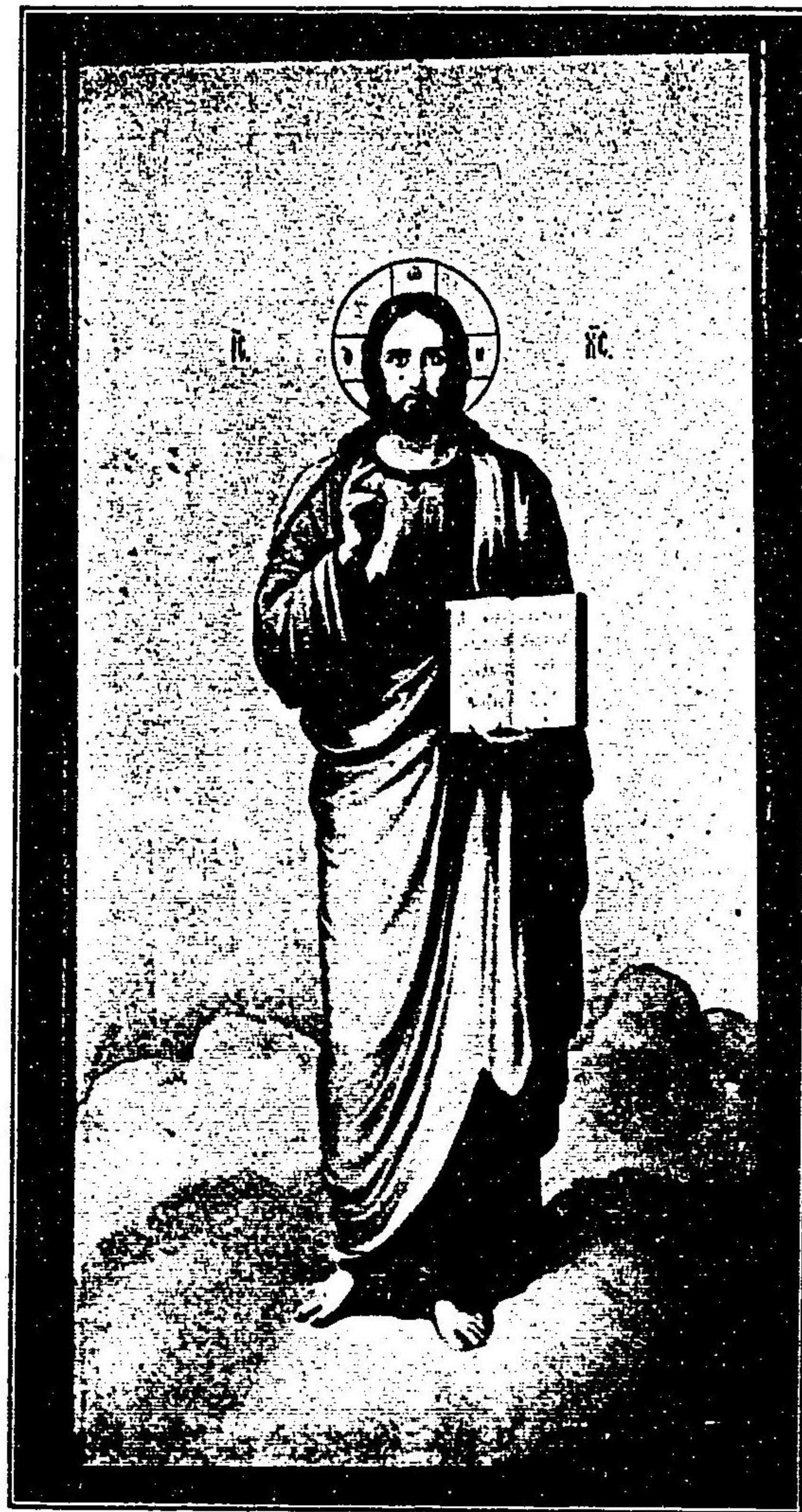


第  
五  
圖

(5)



救世主



第六圖

(6)



生  
神  
女



第  
七  
圖

(7)



圖 九 第



ルイリウガ長使天

圖 八 第



ルイハミ長使天



至聖生神女の庇護



第十圖



神  
現



第十一圖



ハリストス降誕



第十二圖

(11)



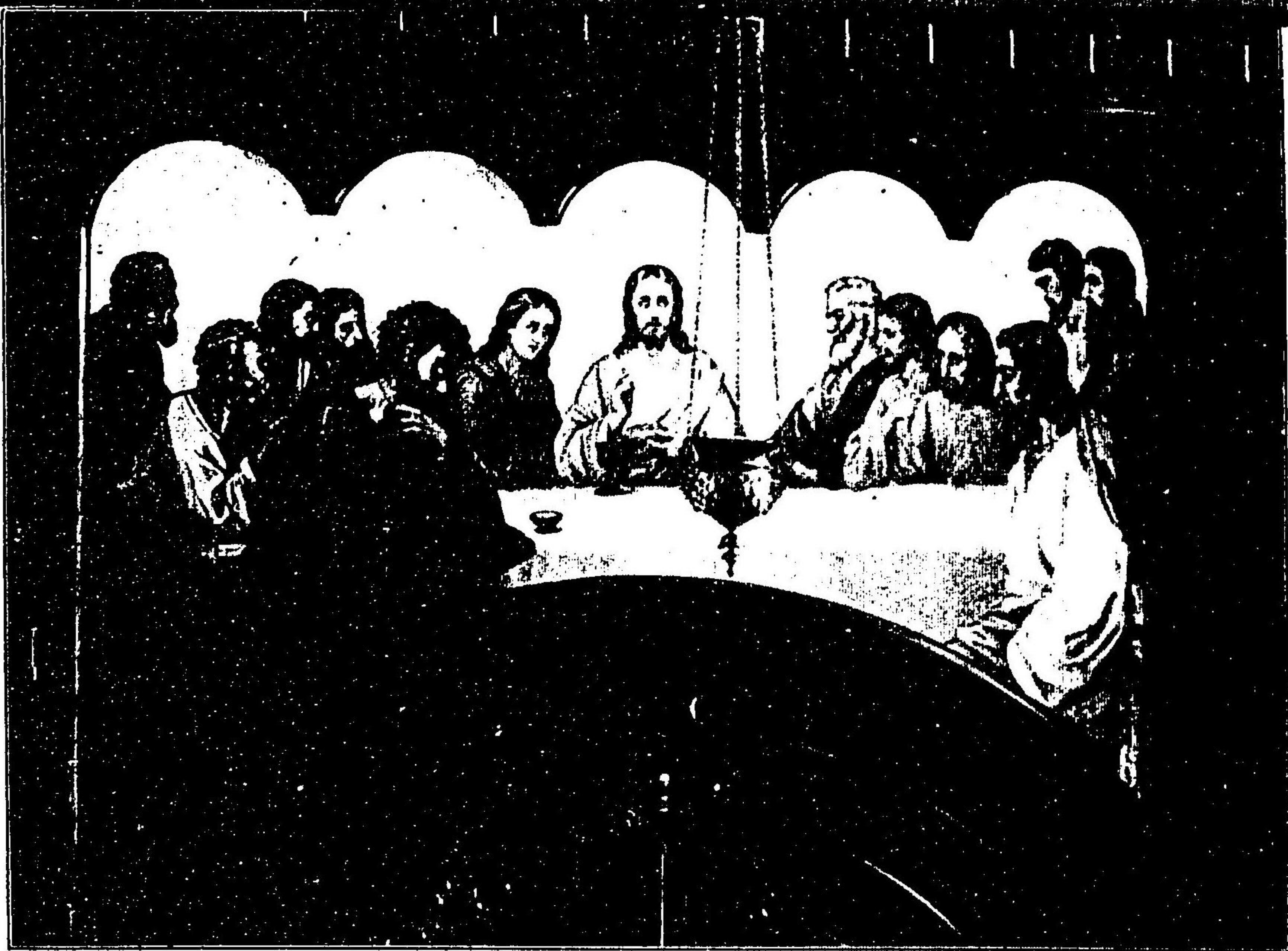
ハリストス復活



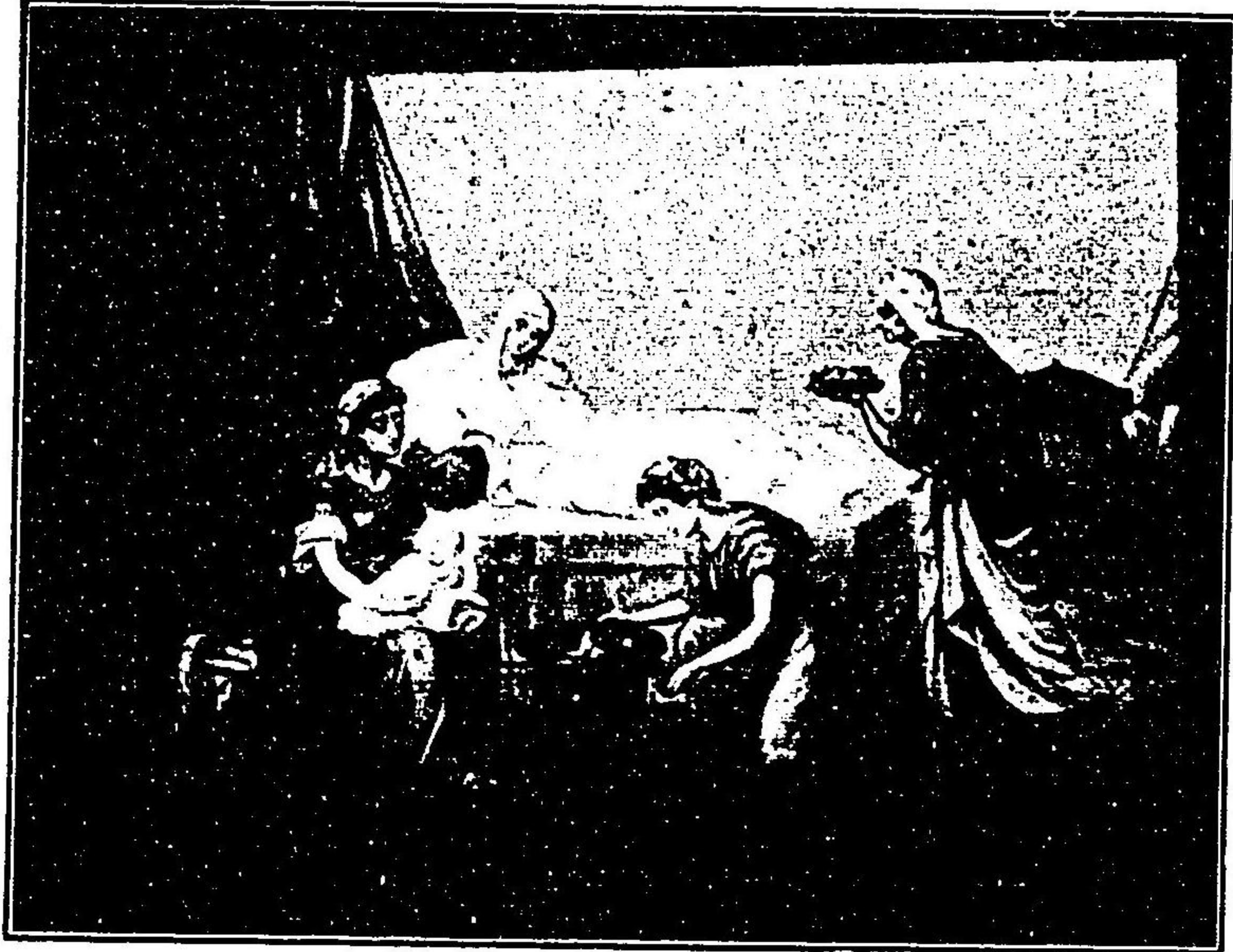
第十三圖



第十四圖 機密の晩餐

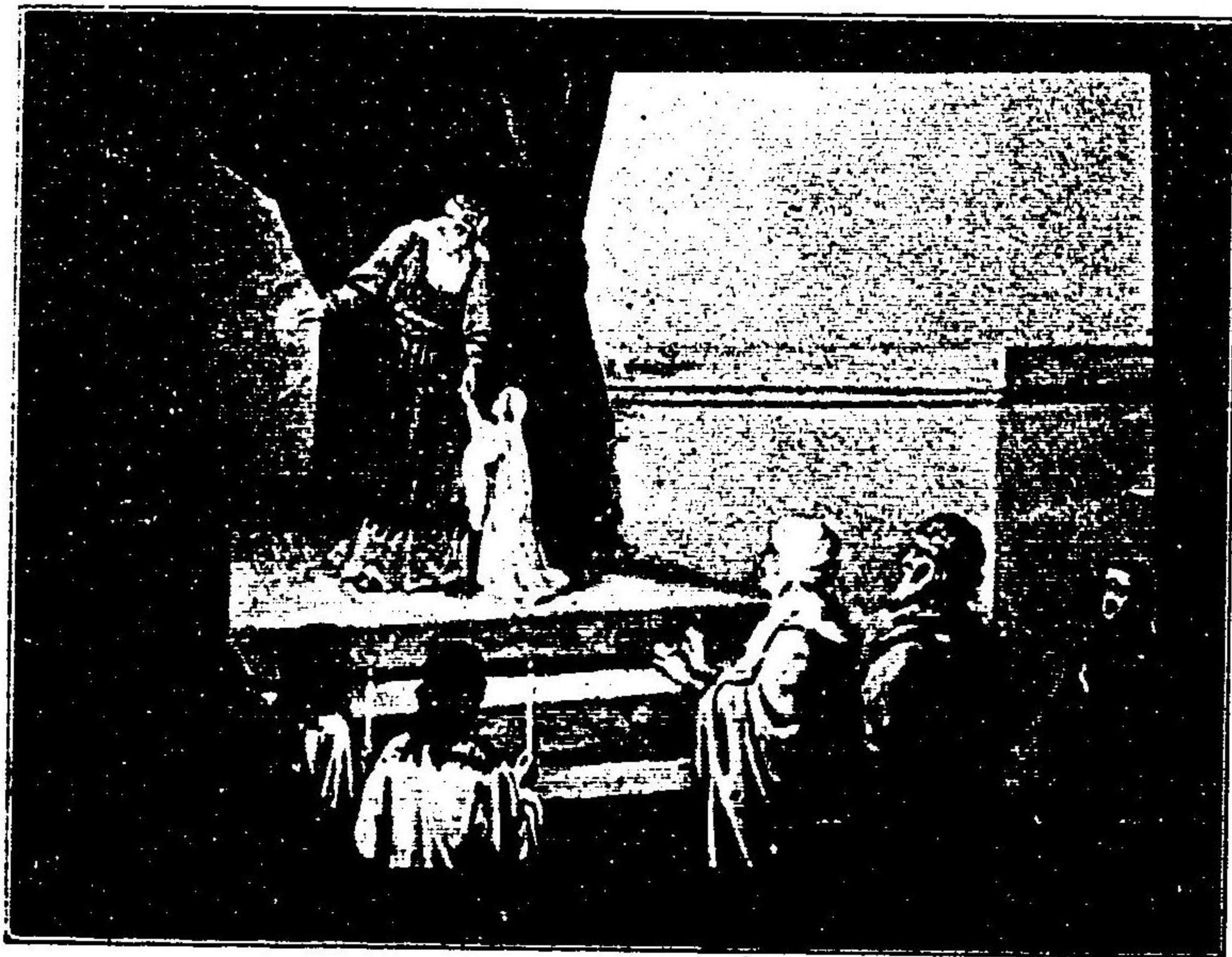






第十五圖

生神女の誕生



第十六圖

生神女の進堂





第十七圖 主の迎接



第十八圖 主の顯榮



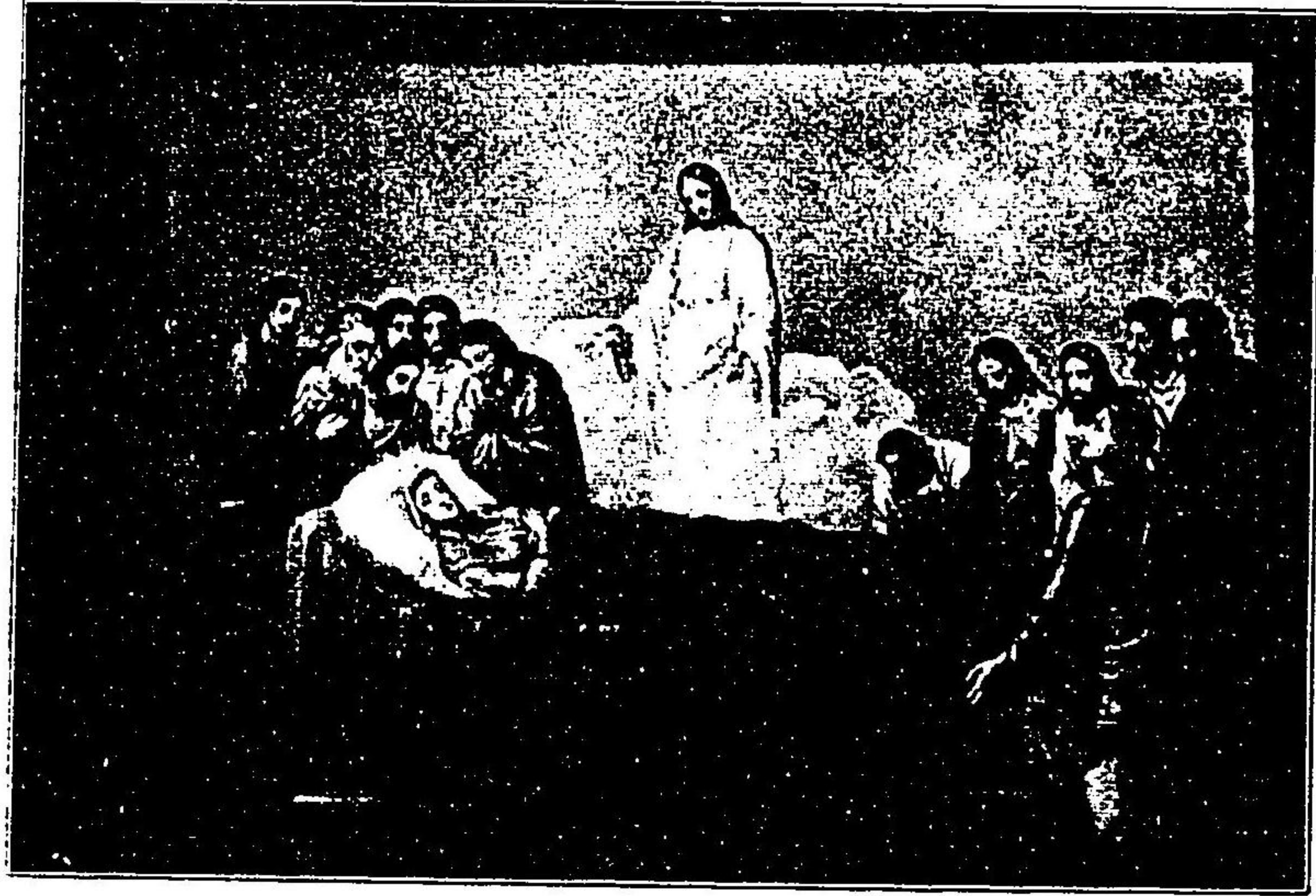


第十九圖 主の昇天

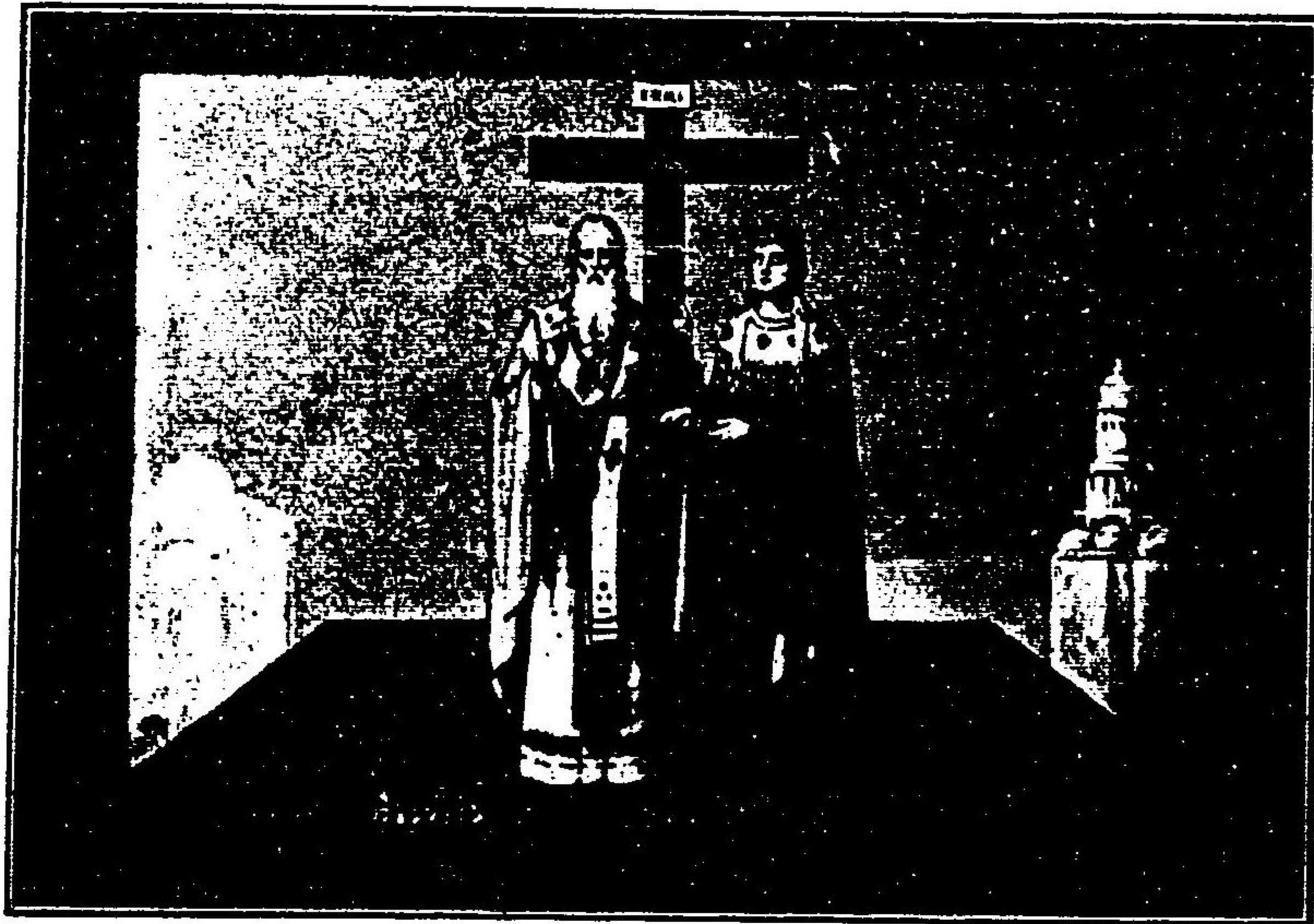


第二十圖 五旬節





第二十一圖 生神女就寢



第二十二圖 十字架の舉示



圖 三 十 二 第



王 ス ト ス リ ハ

(18)



圖 四 十 二 第



イレドンア者召初 ルトベ徒使

(19)



圖 五 十 二 第



ルエバ徒使 シアオイ者學神



圖 六 十 二 第



フコアイ兄の主 イデフ徒使

(21)



圖 七 十 二 第



トロジンモシ徒使 子のイフルア徒使

(22)



圖 八 十 二 第



イメロフルワ徒使 子のイデベゼ徒使

(23)







圖 十 三 第



ルドンサキレア者命致 ナレエ后太



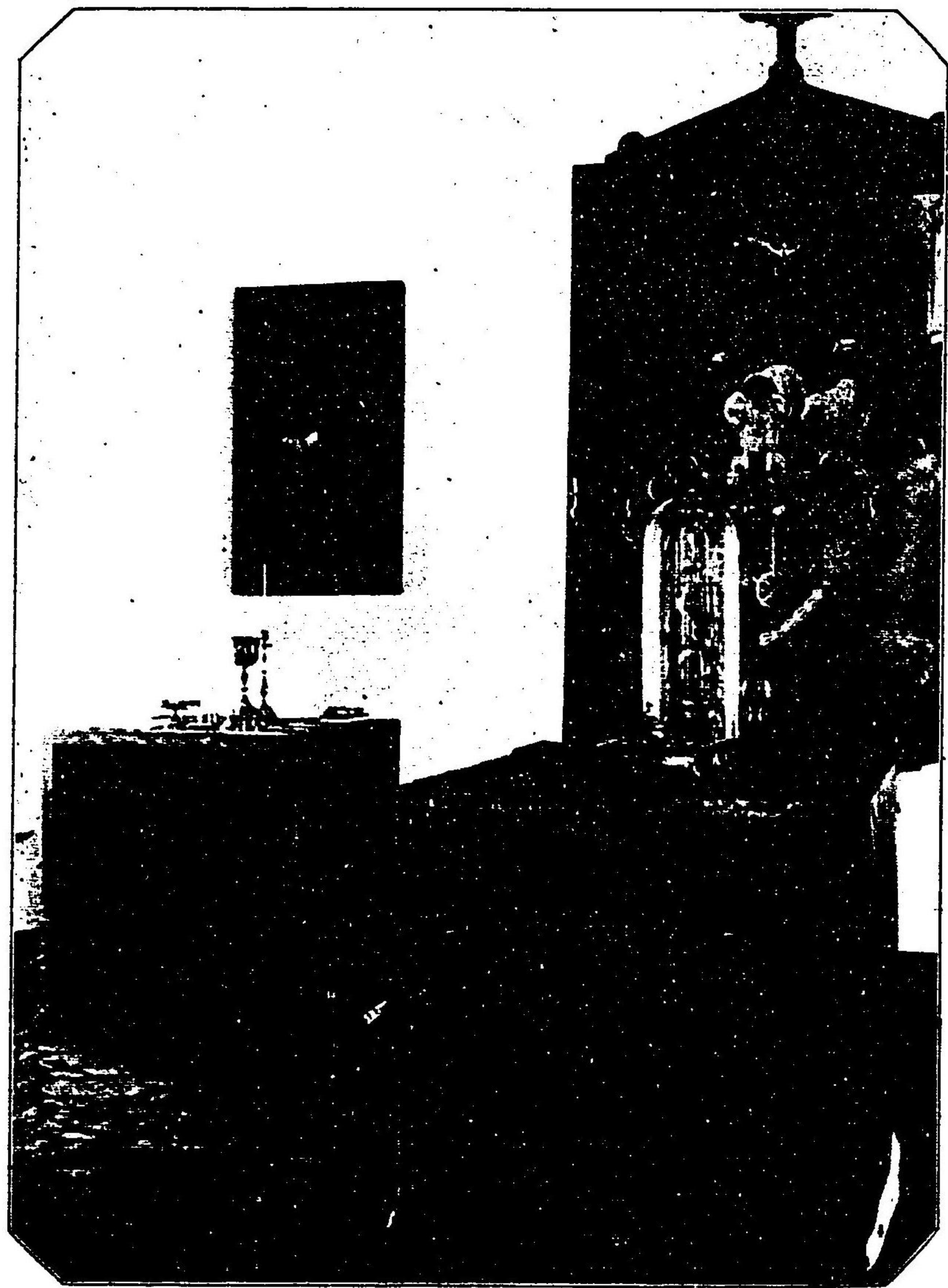
圖 一 十 三 第



ヤリハザ者言預 タベサリエ婦義



第 三 十 二 圖 至 聖 所



(27)



圖 三 十 三 第



者 三 聖

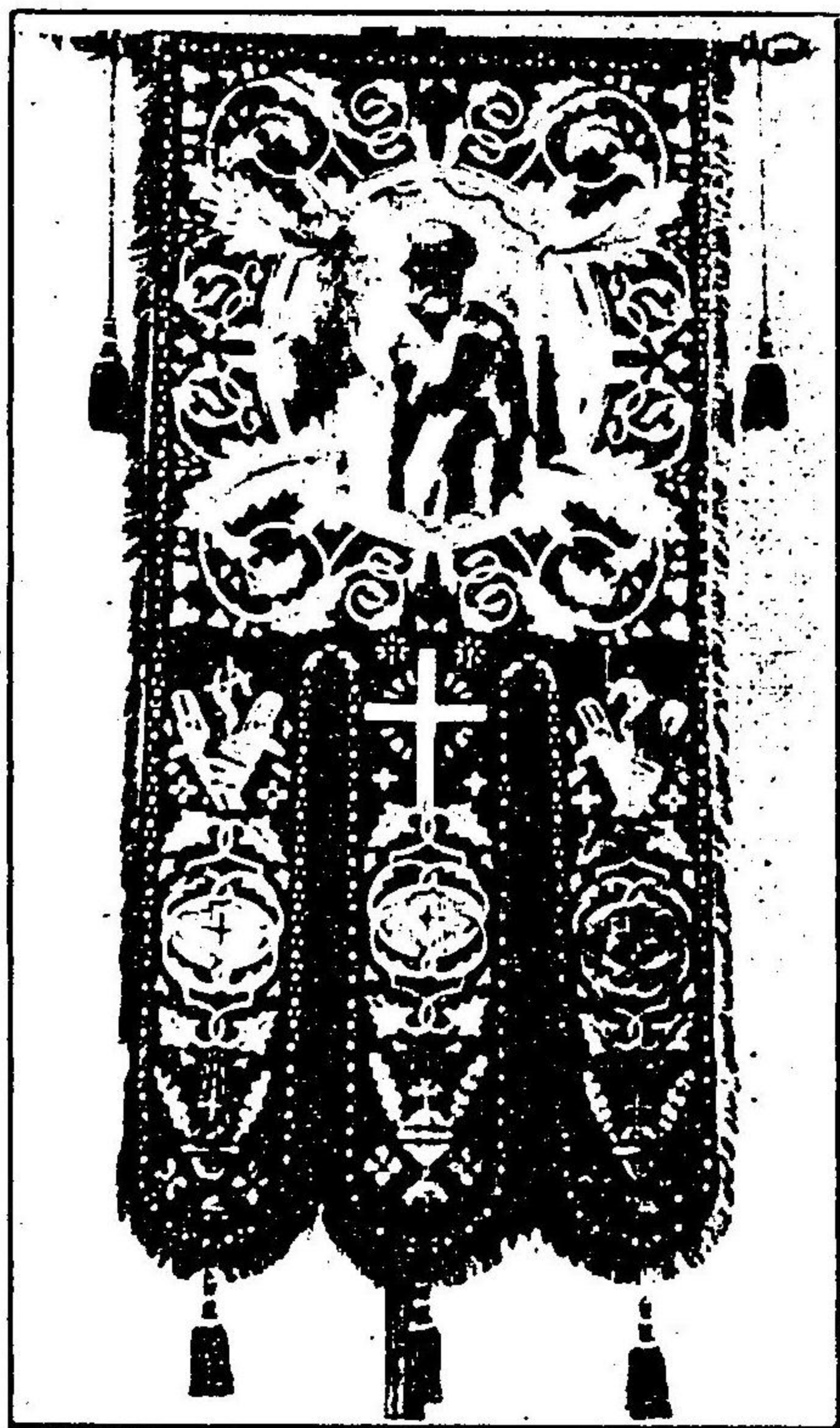
(28)



女神生の山ンファ 圖四十三第







同裏面

第三十六圖



南方の凱旋旗

第三十五圖



圖八十三第



面裏同

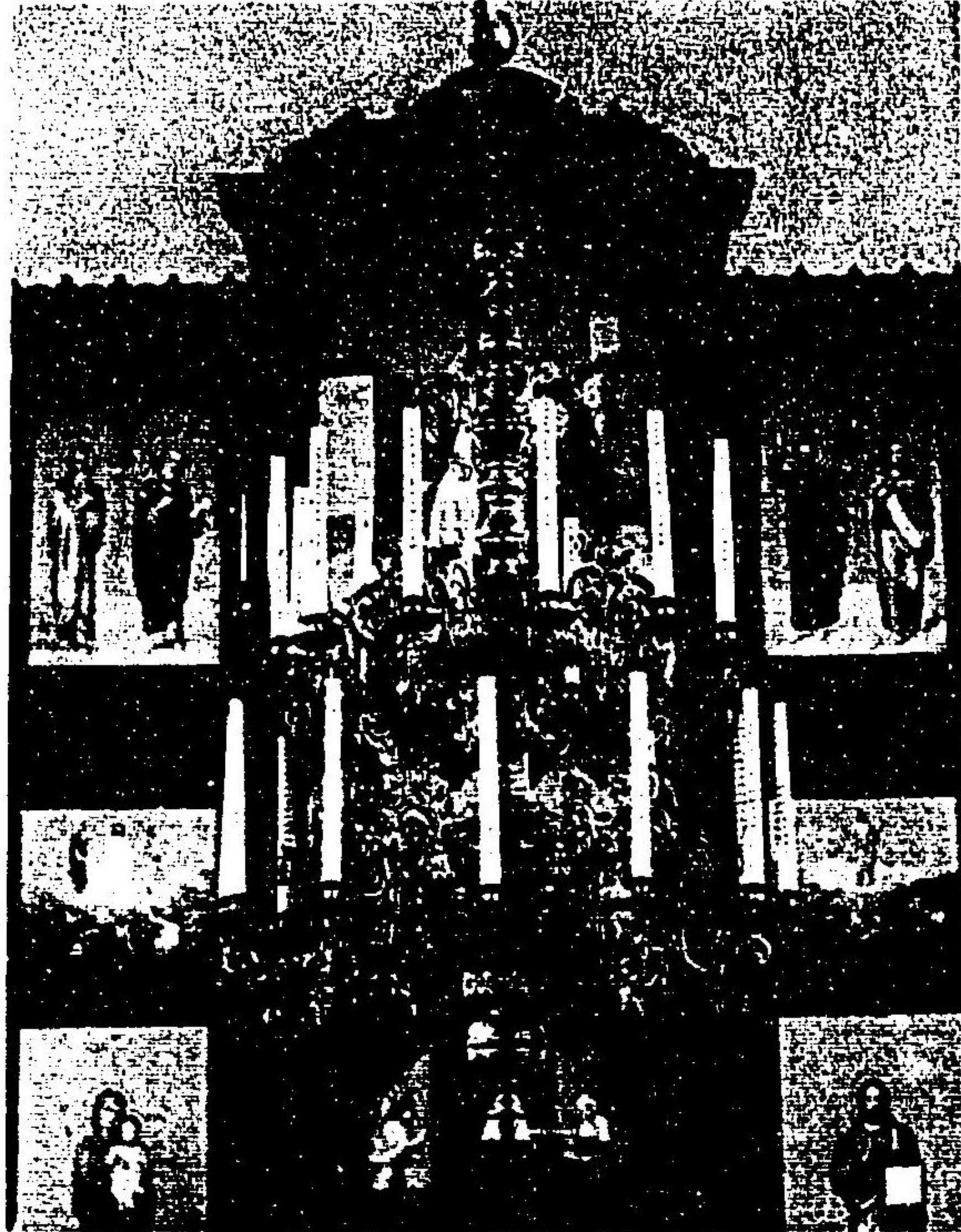
圖七十三第



旗旋凱の方北

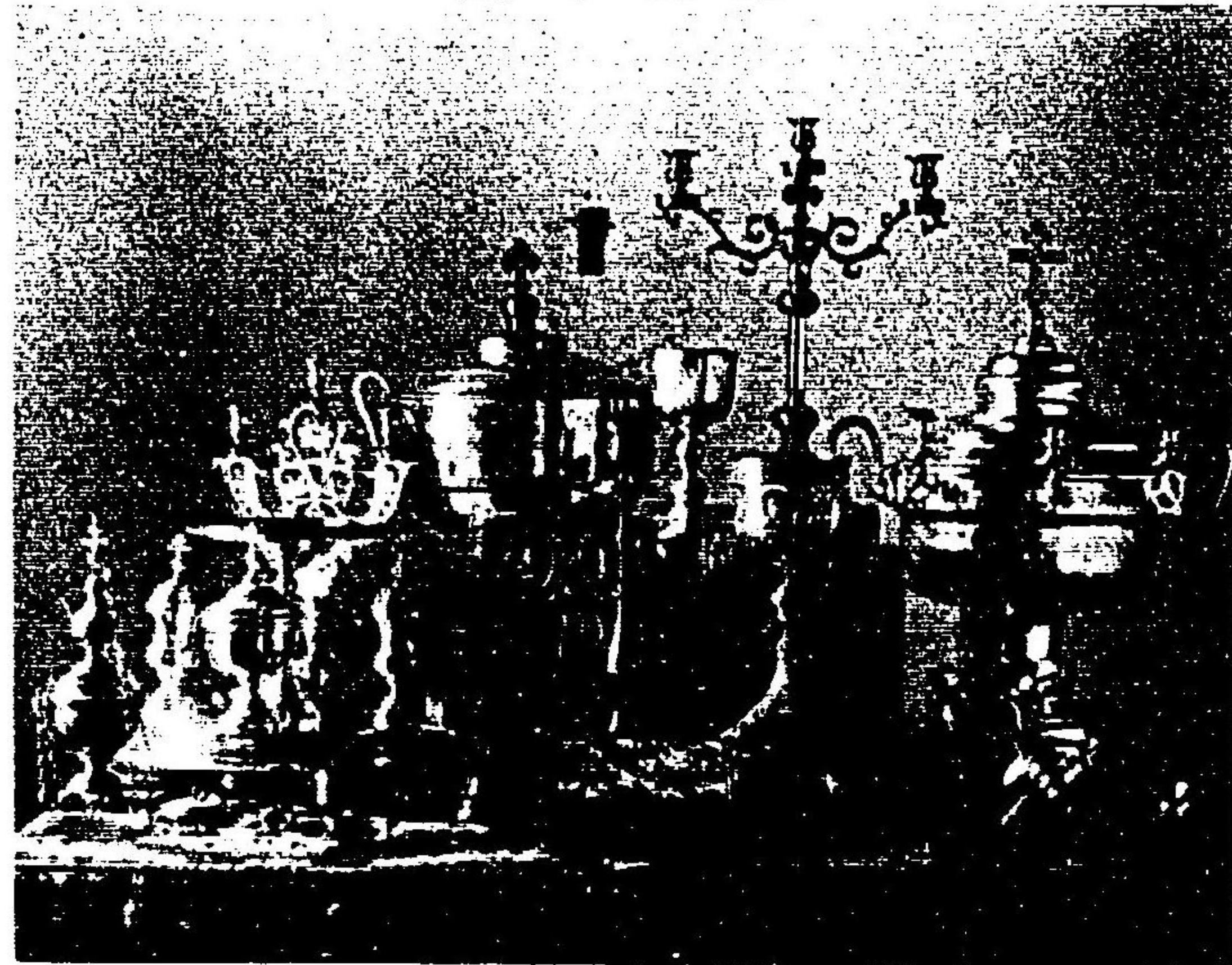


中央の大懸垂燭



第三十九圖

第十四圖



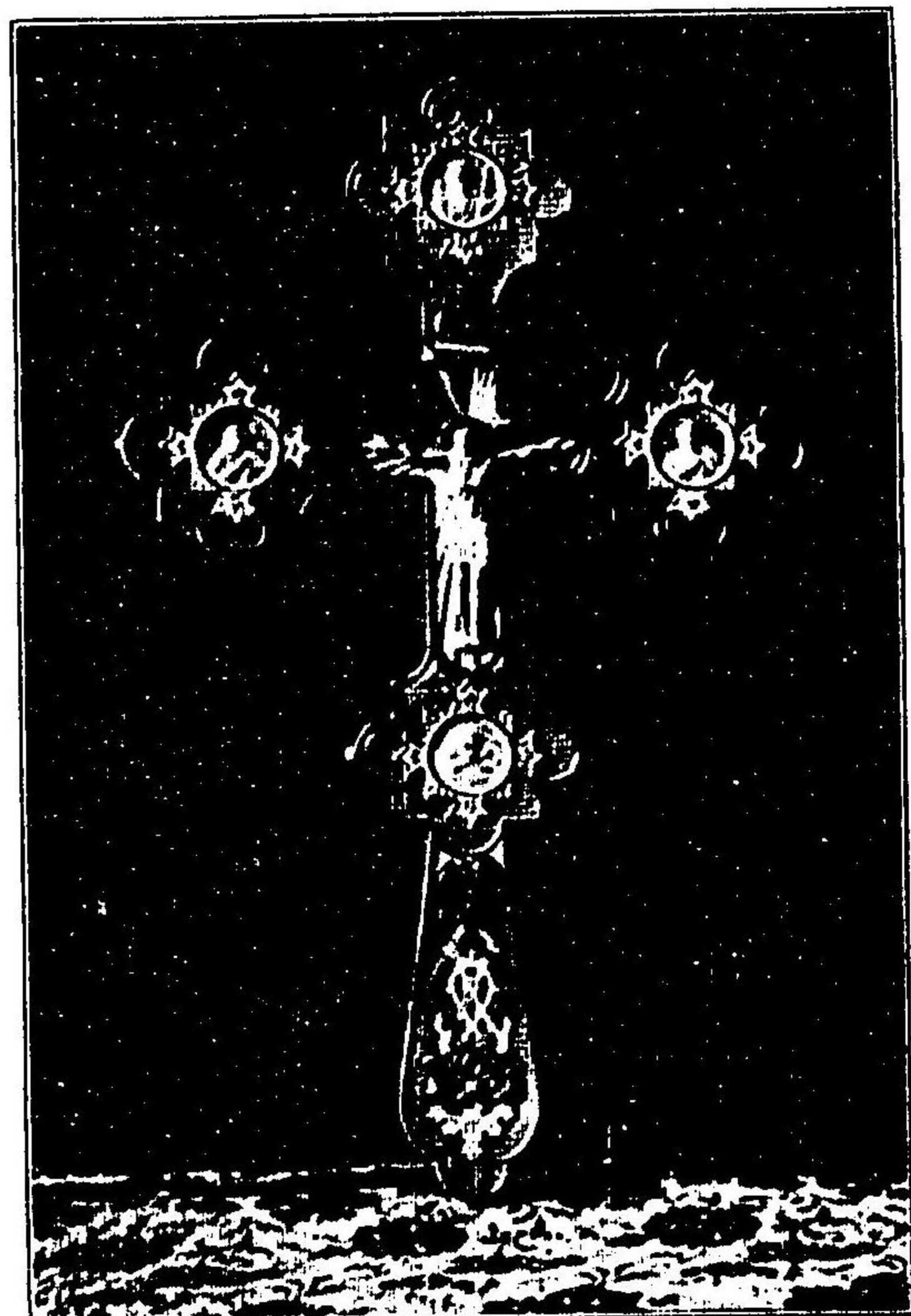
諸聖器物一式



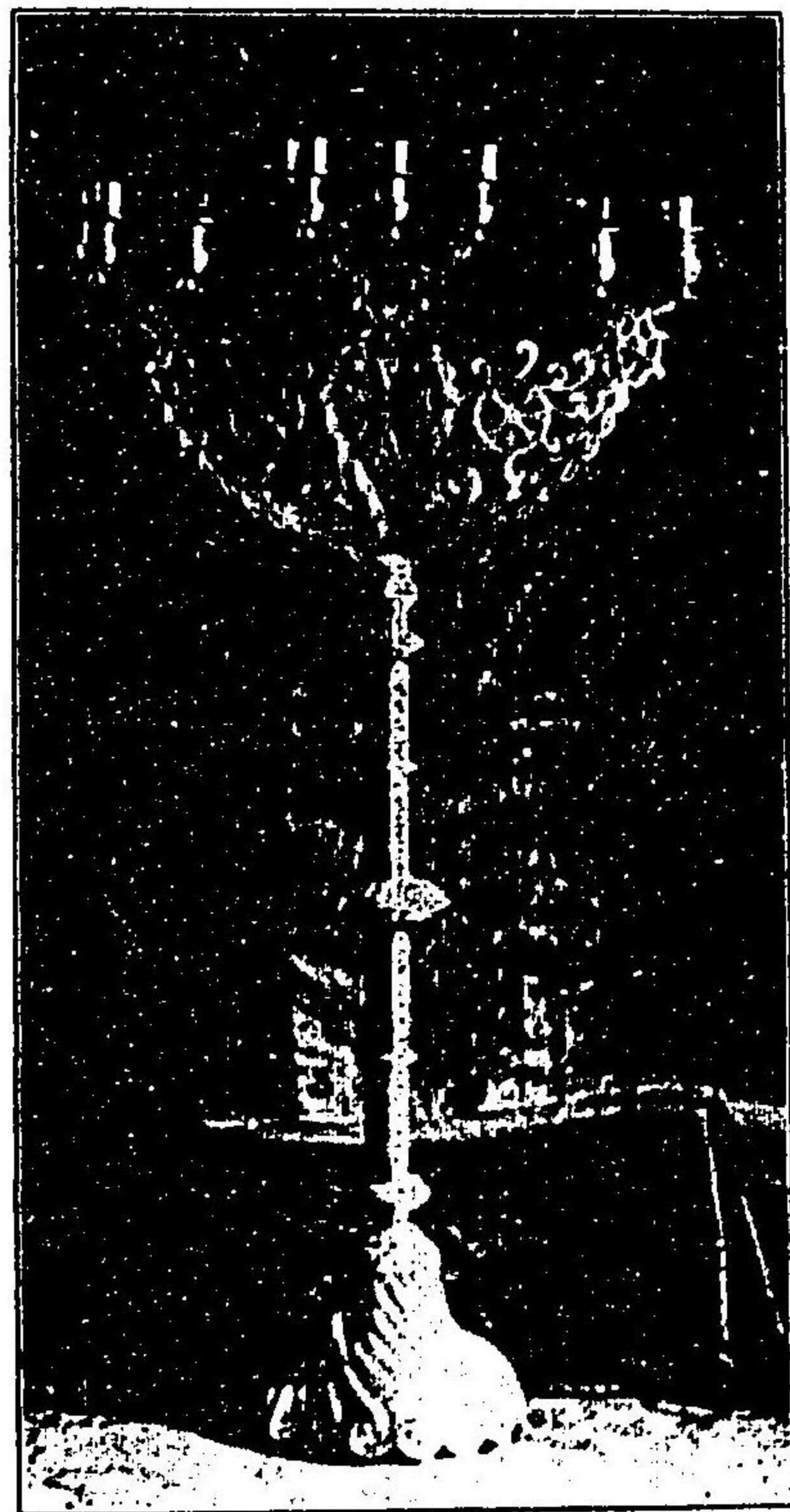
經音福聖 圖二十四第



架字十聖 圖一十四第

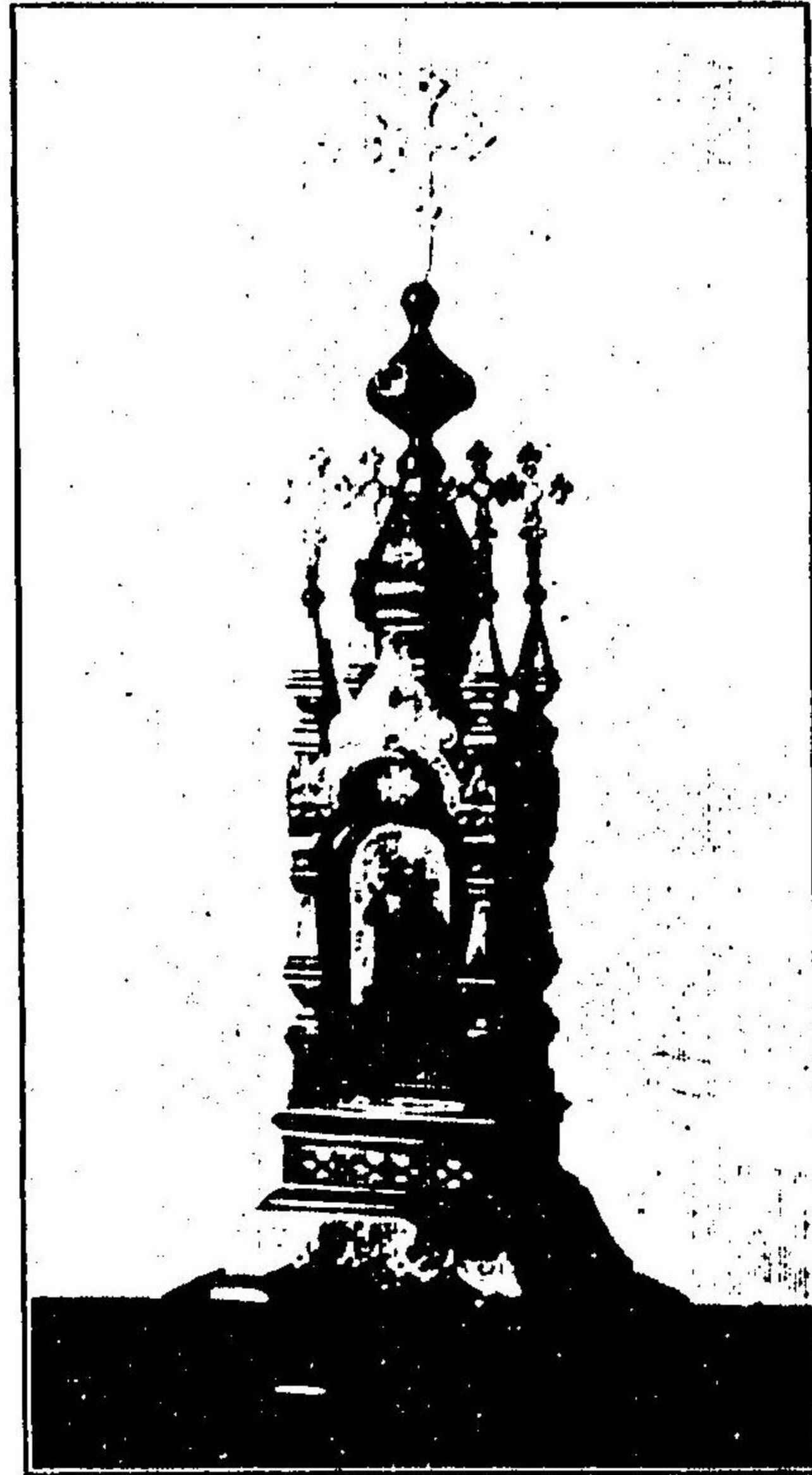






至聖所の七燭

第四十四圖

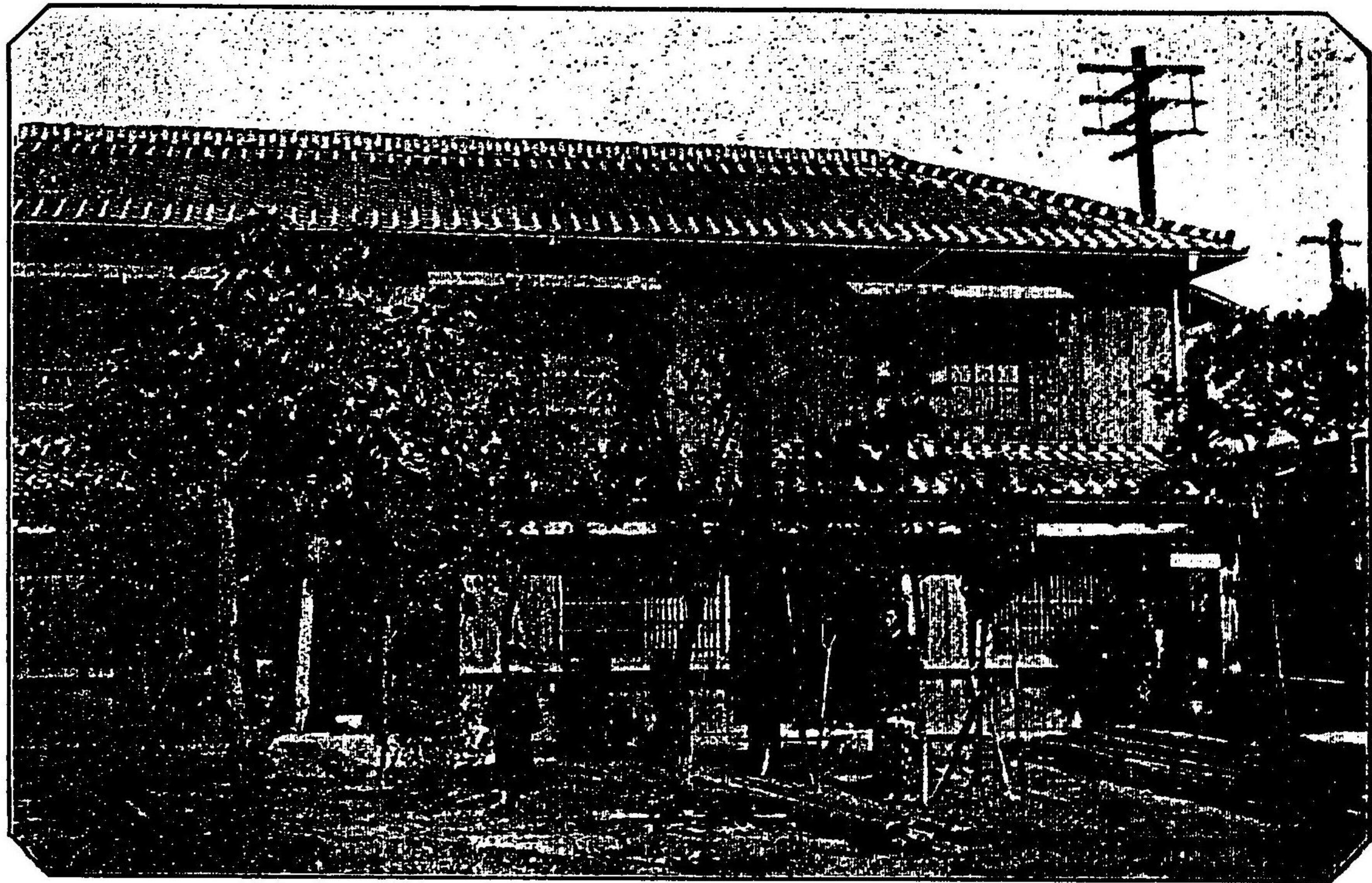


聖 龕

第四十三圖



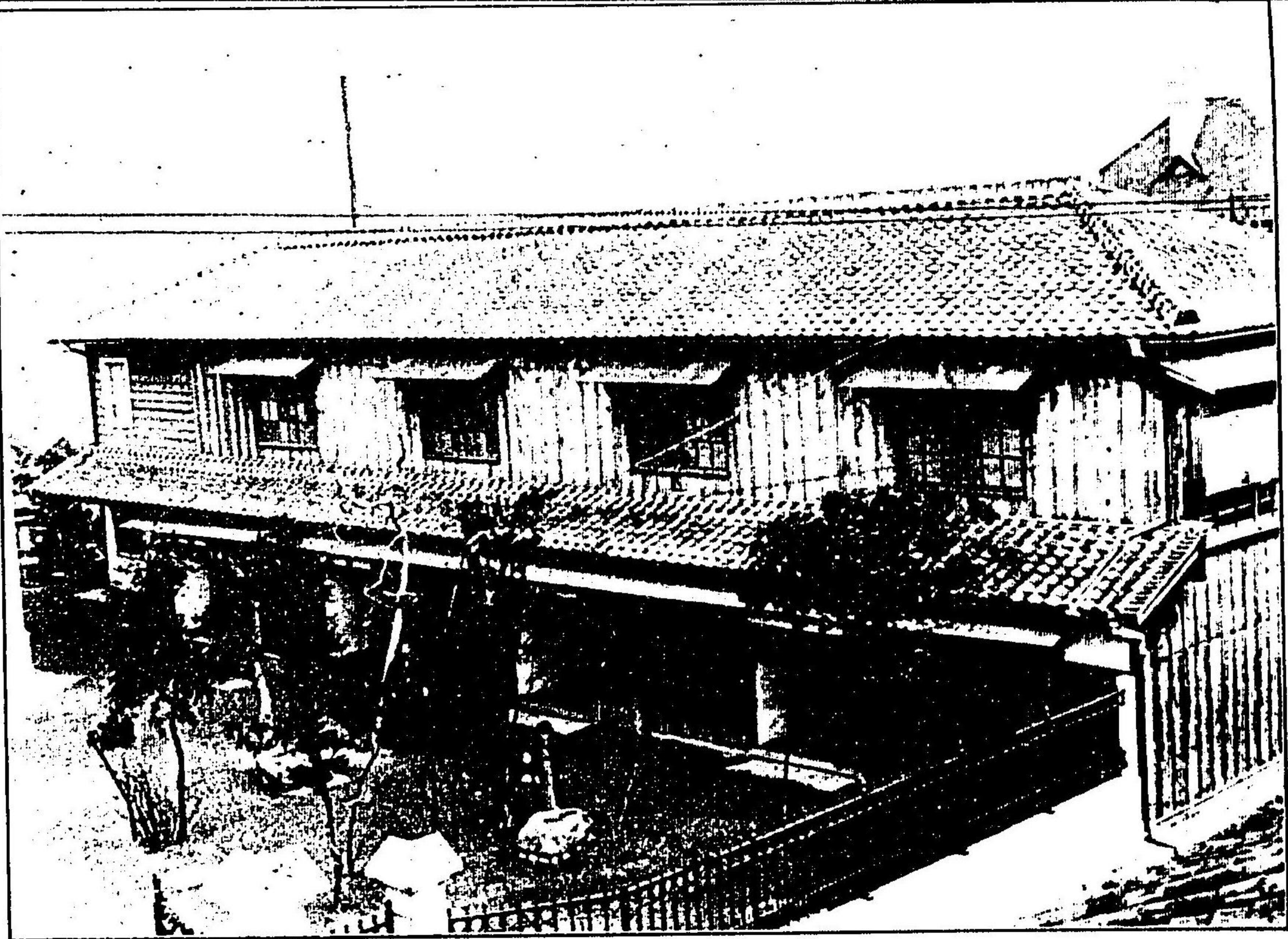
圖 五 十 四 第



(一其) 宅居者役教館屬附の堂聖阪大  
Домъ священноцерковнослужителей въ г. Оосака.



第四十六圖 教役者の居宅(其二)





第四十七圖 大阪教會の信徒控所及び青年會室

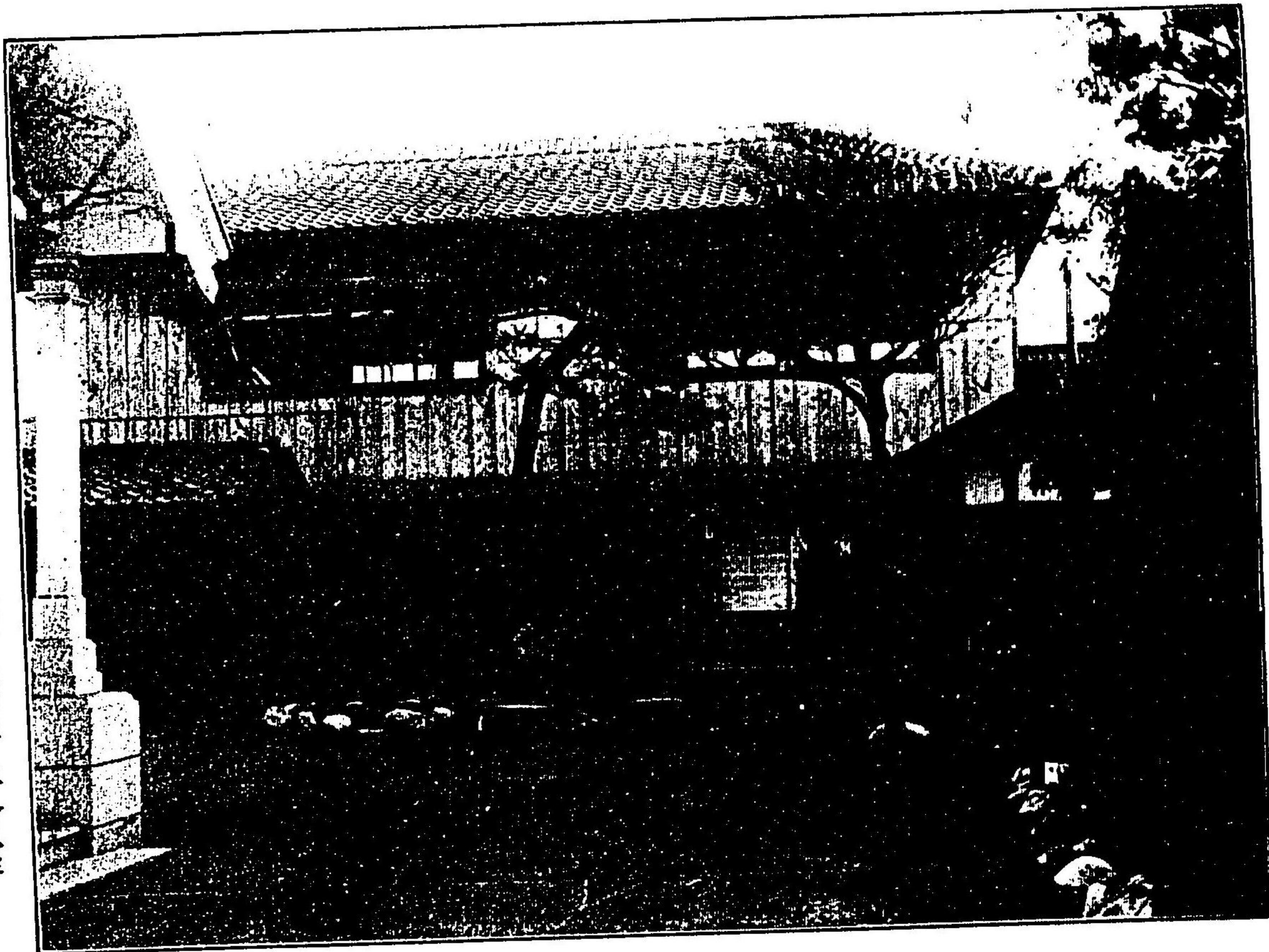
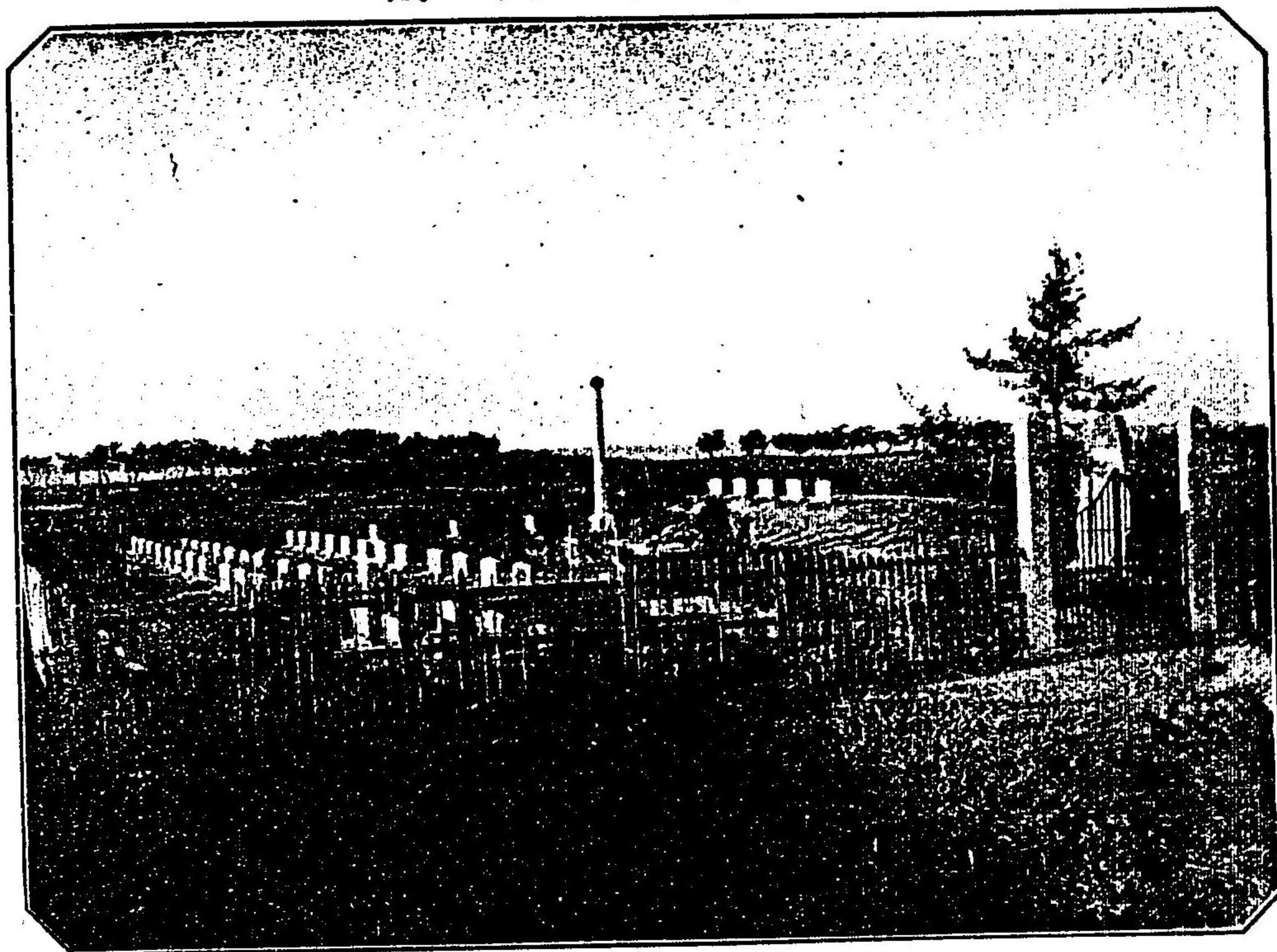




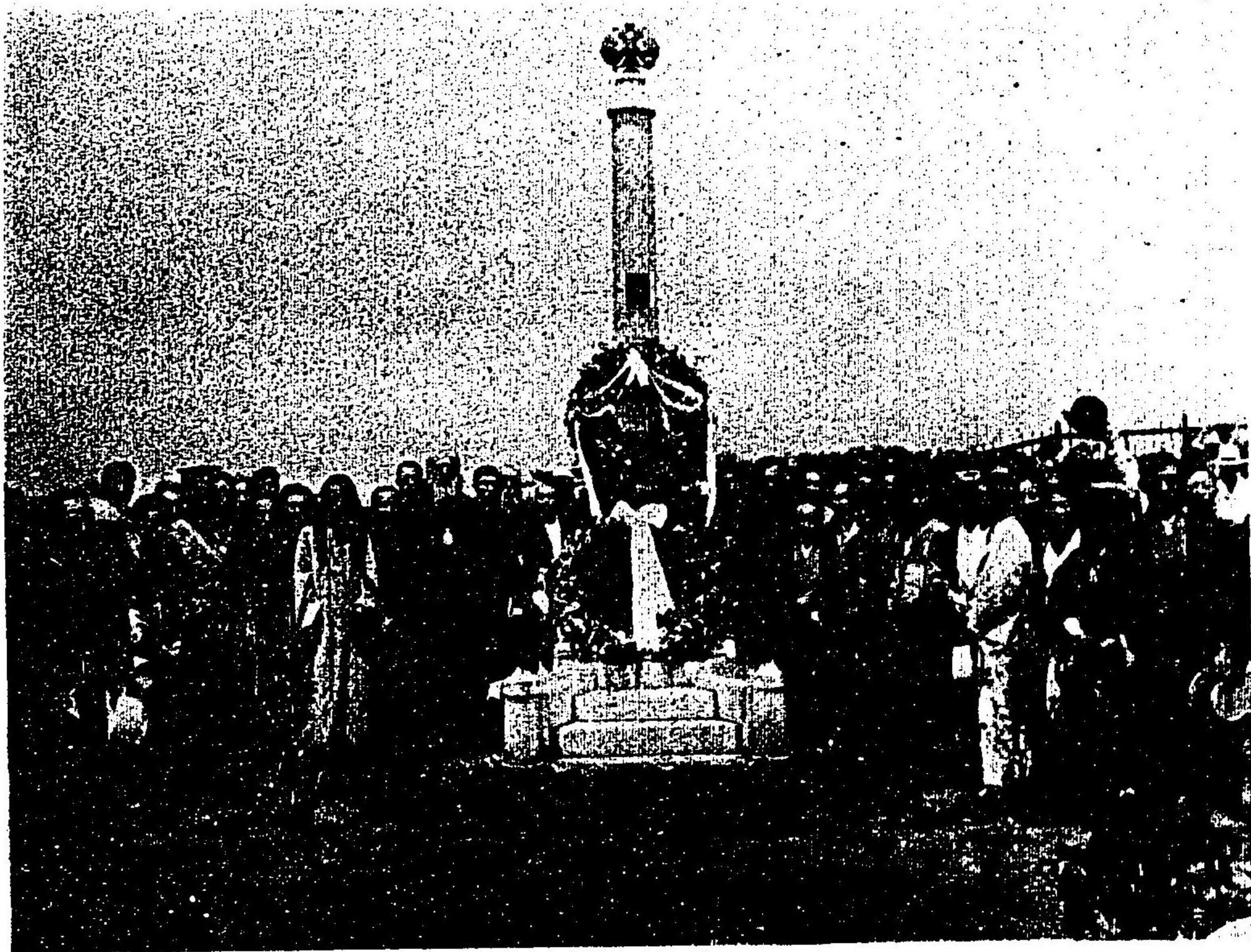
圖 八 十 四 第



地墓の者死軍國露寺濱  
Кладбище военнопленныхъ въ Хамадера.



圖九十四第

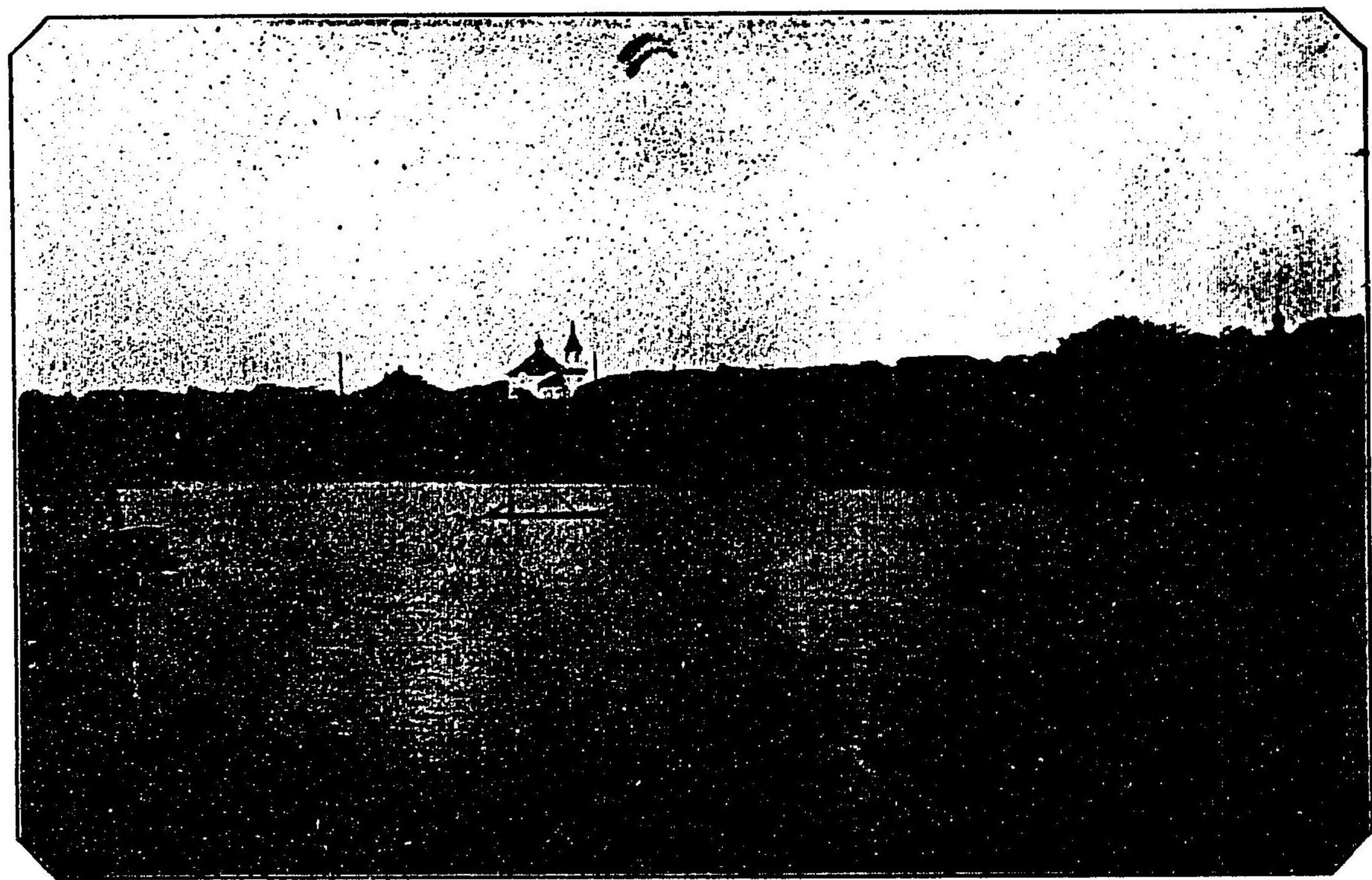


員會參の禱祈地墓の寺濱

Участники въ панихидѣ въ Хамадера.



圖 十 五 第



む望を堂聖新阪大よて隔を川淀  
Видъ на Православную церковь въ г. Осака изъ-за р. Ёдо-гава.



## 説明の部

### 第一章、大阪に正教會の聖堂建立の普通一般の由來、及び露國の厚意者に對する我等の感謝。

大阪は四區八百五十餘町を有し、人口百二十萬以上を有し、石炭の煙と電氣の光と水の利益と城の堅固を以て有名なる、關西第一の大都會である。されば茲に石炭の煙ならぬ香煙の馨りを以て、電氣の光ならぬ世の光を以て、死せる水の利益ならぬ活ける水の利益を以て、此世の城ならぬ聖なる城、新なるイエルサリムを以て稱せらるゝ所のハリストス上帝の聖堂の建てられ固められて、近くは大阪市の正教會及び衆人の利益となり、遠くは關西全地方の教會と衆民の幸福となるべき事を祈り、且つ傳へらるゝは、最も當然のことで、又最も必要の業である。されば他の或地方よりも、寧ろ先に此地に上帝の聖堂は、速かに建立されても善かつたのである。固り信徒の數を申せば、大阪教會のハリストスアニンは、未だ千の數にも達してゐない、けれども從來の假聖堂は、既に餘り舊く且つ朽壞に近づいてゐた。而して新なる信徒は、熱心なる司祭、輔祭、傳教者等の盡力に依て、年々少からず増加してゐる、新なる聽教者は月々踵を接して出てゐる、衆くの異教人は、其形はまだ異教人であるけれども、其心は覺えず自ら世の光なる眞の上帝のハリストスに向つてをる者が少くなかつた。此等の事情は、人々に今までの古びた狭い教會所から、新しい廣く美はしい聖堂の實現を望ましむる所以である。さ



れば去る三十六年の冬の頃、我が東京の大主教ニコライ尊師父は、大阪に聖堂新築の希望を、露國なる母教會に書して、具體的に之を計畫されたことも有つた。所が翌三十七年の初めには、日露の國交斷絶の不幸を見るに至り、とても聖堂建立どころの始末ではない禍の境遇に陥つた。けれども禍を轉じて福となすは、常に我等の主全能者の睿智と仁慈に屬する。初め此禍なる戦争は、我が日本に乘くの俘虜を送致して來た、彼らは多くハリストミアニンで有つた、彼らは其信仰と言語と習慣、其他萬事を異にする外邦に客となりて、しかも敗兵、俘虜と云ふ氣の利かぬ境遇に在りて、尙善く其信仰を守り、祈禱を愛し、善く讃歌し、善く上帝に獻げ、教會の爲に慮り、随分我が日本信者の前に則るべき模範を遺したことは、今に我々の記憶する所である。而して平和克復の後彼らの多くは、其郷國に生還することが出來たが、他の幾十人、若くは幾百人の者は、疾病創夷の爲に客地に死んで永く其の外邦に死屍を埋めらるゝ者と成つた、此らは不幸中の不幸であらう。けれども端なく此事が動機と成つて大阪生神女庇護の新聖堂は成全せられたのである、其始末は、次章に詳かであるが、兎に角平素事なき時は難産で有つて、一朝事ありて安々と生れたのは、實に是の新聖堂である。是れ皆主イ、ス、ハリストスの恩寵と天に在す父の攝理と、至聖生神女の庇護に因ることは、勿論であるが、又露國上下の敬虔なる援助者が、其同胞死者の靈魂を顧み、遠く自國以外の客地に在ても、永久に之を記念し彼らに天上の安息を得しめんとする仁心に因ることは、甚だ明かにして、我等不肖なる後進の信徒も、敬仰にたへない所である。又此聖なる事業を以て、獨り其自國の死者を慰むるのみならず、乃ち延て斯の大阪正教會に宗教上道徳上に多大の利益を與へ、尙進んで關西と全日本教會に愛を彰はし、曾に

ハリストミアニンの中のみならず、彼の異教者等の中に斯の聖堂と凡その聖物を以てハリストス上帝の光榮を顯はすに至らしめた所の露國の貴人、尊者と諸父兄弟等に對して、吾人は滿腔の熱誠を以て感謝を表する者である、惜むらくは斯の著者は、露語を以て此だけの思想を直接に彼恩者等に傳ふることが出來ない事である。願はくは至愛大仁慈の主は、是の日本正教會の恩者を永久に記憶し、尙幼弱なる我が教會をも佑けて、速かに獨立の氣運に向ひ、何れの日か、是の受恩者をして、其大恩者に報いしめ給はんことを、アミン。

## 第二章、大阪庇護聖堂建立の特別由來。

聖費の献金者及び聖物の献納者の事、成聖式の概略、并に濱寺に於ける露國死者の墓地に於ての聖務略記。

余は前章に於て、大阪生神女庇護聖堂の建立について、重に普通一般の由來を宣べたまで、あつた。次に特別の動機と成つた所の由來と、聖堂建築費の献金、附屬聖物の献納、成聖式當時の概況、及び式後濱寺の露國軍人墓地に於ける聖務の事に至るまで略述せうと思ふたのである。所が今年の初め、余が大阪教會を訪ふた時、最も我等の敬仰する同會の司祭セルギイ鈴木尊師父は、非常に親切に待し、余が恰も望む所の右の事項は悉く一露文雜誌の中より口譯して余に多大の便益を與へられた。此雜誌



は「ルッスキイバロムニク」と題し、(第四十號)サントペテルブルグに於て、千九百十年露曆十月二日の刊行に係る、以下其に依つた者である。

日本の大主教ニコライ師父に因りて、大阪市に於ける聖堂の建立に付て、簡明なる獻金の收支決算報告、及び該聖堂成聖式の事の概要を報道すれば左の如し、

露西亞の俘虜は、一千九百零四年から五年の戦争の時、其同胞、日本の國土に寓居中に、戦傷及び疾病の爲に、日本に於て死んで葬られた兄弟に對する愛と同情に動かされつゝ、松山と大阪に、小聖堂を建て、彼等の記憶祈禱を致したいと思ふた。而して之が爲に彼等は、自分の乏しい境遇から、獻金を呈出して有つた。勿論此等の金額は、彼等の望を實現させる爲には、まだなかく有つた。けれども上帝の祝福は、彼等の愛と敬虔の事業の上に臨んだ。彼らの此企てがロシア本國に知れ渡るや否や、彼處から、或は松山の聖堂の爲として、或は大阪の聖堂の爲として、續々聖金は獻せらるゝに至つた。千九百零七年の初めに當り、一の敬虔なるモスクワの慈善婦人は、單獨で松山に聖堂を建てたい望を顯はした、而して其通り成就した(千九百零七年より八年の間に於て聖堂は建てられ、而して千九百零八年の八月十八日に成聖式を行はれた)。其が爲に、前の獻金と其後の獻金は、凡て大阪の聖堂を建てる方に向けられた。今や斯の事業も完成を告げられ、乃ち大阪に聖堂は建立せられたのである。此に付て總ての獻金の収入の詳細なる報告は、一々金額と獻金者の氏名及び住所を録して、モスクワなる正教傳道會社の審議に送附せられた、報告の他の一部は、至聖シノドに送附せられて有た。シノドの報告の中に、次の如き會計が記載されて有た。

一、俘虜が、まだ日本に居た時に献じた金が、一千九百六十五圓二十六錢。

二、ロシアに在る獻金者から贈られた金額は、直接にミッシヤ(傳道會)に宛てた分が一萬二千二百九十圓廿八錢、其中に、皇后アレキサンドラフェオドロウナ陛下より、特に大阪聖堂の爲に金五千圓、又大公妃エリサベタフェオドロウナ殿下より、同聖堂の爲に一千二百八十六圓を御寄附に成た。

三、サントペテルブルグなるミッシヤの同勞者長司祭フェオドルニコラエキチブイソロフ師父を経て送られた獻金が三千三百九十三圓四十一錢。

四、一千九百零六七年に亘りて京都の主教で有たアンドロニク師父、今ではテヒピンの主教である方を経て送られた獻金が、右兩年に於て、五千九百四十五圓零七錢で、千九百十年には、二千八百十六圓十七錢で有た、斯く熱心に此事業の爲に勞したるアンドロニク主教を経ての獻金は、總計で八千七百六十一圓廿四錢で有た。

五、大阪市の日本ハリストアニンの獻金は、七百七十七圓(成聖式の時約百圓)で有た。

六、ミッシヤ附屬の土地及び舊い家と建造物の不用なる材料を賣却した収入が、金四百零四圓八十二錢で有た。

此通りで 大阪の聖堂を建てる爲に、収入の總計が、金二萬七千五百二十一圓零一錢と成た。今之にフェオドルブイソロフ師父の手翰(七月二十四日の)に依て、皇太后マリアフェオドロウナ陛下が大聖堂の爲に三百圓を御寄附に成るとを約せられた者を加へらるゝ。

支出の報告は、同じくモスクワの傳道會社とシノドに送附された、其上傳道會社の方には、凡ての領



收書が添へられて有た。大阪聖堂及び附屬の教役者居宅、並に石の土臺前面の鐵欄、其他の爲に、金二萬五千八百四十九圓八十五錢五厘を支出され、差引殘高金一千九百七十一圓十五錢五厘である、此は將來の松山及び大阪教會の修繕の爲として保存せらる。

以上の金員の献せられた外に、又聖堂附屬の物品を以て献せられた者が澤山有た、乃ち左の人々から左の如き聖物が寄贈せられたのである、

アレキサンデル グリゴリエキチ エリセーフ氏は、ベラルブルグの住民でして、イコノスタス(聖障)を樅の木に彫刻した者を美麗なる諸聖像と偕に寄贈された、同府のイオアン ルバーヒン及びフエオドル ルバーヒンの二人兄弟は、寶座の上なる銀製の聖籠及び其他の聖物を献じた。モスクワのニコライアンドレーキチ コレーニコフ氏は、鐘樓に用ふる六の鐘を寄附された。カザンのワシリエキチ シチュナンキン氏は、寶座用の福音經と十字架、聖體禮儀用の聖器物一式、並に司祭、輔祭及び讀經者の祭服三具宛、其他寶座の布等を献納した。

成聖式は、聖使徒ペトル、パエルの祭日、即ち七月十二日(一千九百十年の)に於て行はれた。此式典の爲に、東京よりニコライマレーツスキイ マーレキチ氏と露國陸軍の代表者として、ツマカ、モイロフ氏及び其他の露人が來會した、同じく大阪市の 重立ちたる日本の官憲、日本正教の 衆司祭、諸傳教者及び大阪其他の教會より衆ハリストミアニンが參列した。成聖式の翌日、聖堂に於て、死者の爲にリトルギヤとパニヒダが行はれ、ロシヤの死せし軍士の肥體は祭壇の上に置かれて有た。式の三日目には亦莊重にリトルギヤを行ひ、終つて神品等は、詠隊及び衆くの男女信者と偕に大阪市の近

距離なる濱寺の墓地を巡視した。其處に旅順口のロシヤ兵が八十九人葬られて有る。而して茲にパニヒダを行ひ、尙敬虔なる献金者等の壯健と救贖の爲に、其式の日、リトルギヤの後に、特に祈禱を献じた次第である。願はくは己れの生命を生國の爲に捐て、外邦に葬られた兄弟らに愛を彰はせし悉くの献納者等に、主は其愛と恩寵の賜を降し給はんことを。

(以上「ルスキイパロムニク」記者の文辭である)

### 第三章、圖 說上。

#### 聖堂の構造、内外の詳解、鐘樓及び其他の事。

第一圖は、今回大阪市東區石町一丁目十番地に新築せられたる至聖生神女庇護聖堂の外景である。ことは別に説明を俟たない。けれども特に説明を要するは、是の大約百二十萬以上の人口を有する大阪に、主イ、ス、ハリストスの福音を傳へ、上帝の光榮を顯はす爲に、此様な聖堂の建立を要する。ことは、既に多年衆民の認むる所、殊に我らハリストミアニンの切望する所で有たのが、今回主上帝の恩佑と露國正教會の敬虔なる諸父兄弟等の厚意に因て、愈々成就した事である。是の聖堂は明治四十二年八月中、大主教ニコライ尊父が下阪して、基礎式を行はれ、其翌四十二年七月十二日、聖使徒ペトル、パエルの祭日を以て、同尊父及び主教セルギイ尊父に因て、成聖式を行はれた。建坪は大約七十五



坪で、堂外を一周すれば大人の足で百五十歩以上である。高さは本堂の方が礎石の下から、屋頂の十字架の上まで約十間三尺九寸五分、鐘樓の方が同約十一間五尺である、其中屋頂の十字架の丈を差引けば、本堂の方は正味九間五尺四寸五分となる勘定である。右十字架は、銅に金装した者で、縦が四尺五寸、横が二尺四寸、厚さは約八分、之を支持せる圓球も、同じく銅の打出しである。全堂の土臺下は、深さ約五尺も掘明け、割ぐれ石で五段も詰込み、其れに八寸高のコンクリートを用ひ、其上に堅牢なる石の三段積を以て基礎を固め、此通にして地震の爲にも慮つてある。此等の石は、備中國北木産の品で、冷白堅固の者である。此地は亦大阪中の高臺で、風が非常に強く當るから、工事を監するフヤマ尾林氏の留意に因て、建物の骨組は、總て堅牢なる松材をX形に組合せて、倒壊の難を防ぎ、其表側は杉板で覆ひ、之にペンキは四度塗の灰白色を施し、鐘樓の巨大なる木材と、總て扉には楓を用ひ、又總て窓の木材には檜を以てしてある。其から屋蓋の上は、亦青銅を以て覆ふた者である。本堂の入口は、西に在て、玄關の高さは、石段の上から、二間四尺五寸、横幅は一間半である、其石段は、御影石で六段積上げ、冷艶凜乎たる者である。此玄門の戸外に、約一間半ばかり出張りたる屋蓋があるのは、參堂者の爲に、雨雪の日などの出入に甚だ便利をなす。本堂の南北にも、亦同様の入口が有て、以上三ヶ所共屋蓋の上には各小十字架が立てられてある。堂外北方の餘地には、清楚なる築山が設けられ、此邊を逍遙すれば、近くは淀川の三大橋と、遠くは北區、西區の櫛比せる人家と烟霞に罩る青山白水に至るまで、舉て一望の中にある。

本圖の中に、鐘樓の鐘が少しばかり見えてをるから、序でに鐘の事も申述べまじやう。此等の鐘は

大小六個有て、衆人に祈禱の時刻を知らせ、又奉事中の重要な時を知らせる者であるが、中央の一番大きい鐘は、下圓の直径が約三尺六寸で、其重量が五十三ブロード六フント（我が二百三十一貫九百九十九匁六）、二番のが直径約二尺二寸で、重量が十二ブロード（我が五十二貫三百八十匁）、三番のが直径約一尺八寸である。而して一番の大鐘には、西側に救世主を鑄出し、東側に聖ニコライ、南側に生神女、及び北側に克肖者聖セルギイを鑄出してある。其から上下二層に繞りて、スラヤン文字が鑄出せられてある、其上なるは、プロキメンの言「日ヨリ日ニ、我が上帝ノ救ヒヲ福音セヨ」と云ふと、其下には「此鐘ハモスクワノサンギーナ兄弟商會ノ製造所ニ於テ鑄造セラル」との言で有る。二番の鐘にも、救世主、生神女と聖ニコライの像が鑄出せられ、又スラヤン文字で「至高キニハ光榮ハ上帝ニ、地ニハ平安」の聖語が鑄出せられて有る。三番の鐘にも、下層に前者の下なる者と同文が有る様で有た。第一のには、尙六の圓形が鑄出されて双鷲と褒賞の「メタル」が印されて有つた。

第二圖は、同じく聖堂の外景であるけれども、特に門外からの眺望を示したのである。此中央大門の石柱は、高さが九尺で、扉が七尺三寸、小門が六尺六寸、大門の横幅は、八尺五寸四分で、左右小門のは、各四尺五寸二分五厘である。向つて左に見える低い建物は、門番所で、其左後に見える高いのは、信者の控室、若くは集會室である。

第三圖は、聖堂の内景で、此時はまだ附屬聖物の飾付が出来ない前で有た。此イコノスタス（聖障）は三層で大小縦横三十二面の聖像が掲げられてある。王門と兩側門と各聖像の區劃を成す所の木材は、露語でツープ、即ち樅の木を以てして、光線の具合で、餘り暗黒を帯びてをる様であるが、實際はバ



レントシンの濃き様な色である。此イコノスタスは、聖なる人物の外に、特に景色と雲を以て秀でてをる。大はハリストス王の如き額面から、小は四福音者の傍の異象に至るまで、悉く雲が隠蔽してをる。色彩は、ニュートラルチント、ヴェルミリオン、インデゴ、若くはクリムソンレーキ其他を配調して、精妙崇高たとへ方なき美善の作である。景色は、従来の他の聖像の様な添物でなく、乃ち實に聖地の仙境を見るが如く、聖山、聖川の真景に對する様な快感を覺ゆる。此畫家ア、ペ、ロザノフ氏は、宗教畫家中、古風に拘泥せず、特に近世の畫風、進歩したる手腕を以て、定理と聖なる歴史を描く所の敬仰すべき美術家と謂ふべきである。此聖所の横幅は、約三十六尺、縦に玄關から至聖所まで奥行は、約九十尺六寸位である。各聖像の説明は第五圖説以下に詳。

第四圖は、同じく内景であるけれども、既に 附屬聖物の飾付を済まして、整全した所の景である。中央に天井から高く懸垂せるバニカヂロ（大懸垂燭）を初め、兩側の凱旋旗、其他 諸聖物の説明は、第三十五、以下に詳である。今は只茲に便宜とするだけの事を略説しておく。下の床から三段上つて、ソニヤ（教衆の立つ所）の上、救世主と其他の聖像の前に、六基の銀色燭臺が立てらる。各々中央に大燭一本、兩側に稍大なる者二本、前後に小十八本を立てられる様に成てをる。各中央の燭筒の表に、小聖像が描いてある。編者が見た時の順序に依て、右の端から申せば、ハリストス復活の聖像の前に在るのが、聖ニコライ、次が生神女庇護、其から救世主、生神女、聖セルギイ、左の端降誕の前の燭筒のが聖セラフィムである。燭臺は六基の外に、尙二基、聖務の時持ち歩く用に供するのがある。ソニヤの左右兩端の上、八角窓の下の壁上に、一對の聖像が懸つてをる。向つて右のが主の御顔、奇蹟

で布に寫された者を描いたので、此れは舊く大阪教會の前の聖室に懸けられてあつた者である。向つて左のは、カザンの生神女である。其下の長方形の窓の左上に、少しばかり小額面の端が見えてをるが、此は左の圖の如く、十字形に十二面の小聖像を飾付けたのである。

			降 <small>ハリストス</small> 誕
	迎	接	就
五	福	音	誕
旬	音	誕	生
祭	誕	生	昇
進	昇	天	入
殿	天	入	城
			現
			顯
			榮
			示
			舉
			十字架

此等は我が教會の聖畫師山下女史の作である様に思はる。此れと反對の方面なる右側の壁には、アフォン山の至聖生神女の大聖像が懸けてある、（此は特に第三十四圖に於て詳）。此聖像の左側に見ゆる讀經臺には、イルモロギイ、オクトイホ及び祭日經の三大經が入てをる、アクシコーノフ氏の献納で、價十三圓五十錢を要したと云ふ。經は大主教の新譯なる大事業に成た者である。

小懸垂燈は、晚餐の聖像の前に一、アフォン山の生神女の前に一つある。大懸垂燭は、前顯臺所の中央の外に、啓蒙所にも一個あるが六光である。



斯の内景の圖に見ゆる下の平面、即ち床の上は、一面に鮮かなる絨壇を敷詰めてある、燃るが如き濃紅の花模様ある者、聖所は固り、啓蒙所から、至聖所まで、同様である。

聖所の兩端の中央には、南北の入口をなす所の扉がある、斯く入口が二つ、玄關のと偕に三つである。窓は、左右共扉の兩方に二つ宛大形の有て、(左右共四つ)其上壁には、八角形の小窓が三つ宛(左右共六つ)あるから、堂内が明るいことは、頗る在堂者に晴々する快感を與へる。此美はしき敷物の上に、數百の善男善女は緩に集まつて居る事が出来る。

啓蒙所には、兩側共二ヶ宛の窓がある。其聖所と界する左右の壁が、各々差向に少しく張出てをる、其啓蒙所の方の壁面に、左右各々一面宛の聖像が懸つてをる、向つて右なるは奇蹟者聖ニコライで、薄色の肩衣を着け、一手に降福、一手に栗海老色天鷲絨の福音經を持てをる事は、通例の通りであるが、其面貌は頗る崇高に見受けらる。向つて左なるは克肖者聖セルギイの半身像で、世間に舊派と云ふ黒味勝の畫であるが、我等は此聖像が、舊の假聖堂の時代から懸け傳へられて、聖者の温良莊嚴の顔が、暗き背景の中から浮出してをる何とも言はれぬ崇高の面目は、甫めて遠くから見た時は、主サワオフの聖像ではないかと錯想した往時の印象を、今にも深く腦裡に感してをる。此聖なる克肖者は、右手を胸に當て、左手に其訓言を掲げて、自ら祈禱しつゝ、我等を教へてをる、其言は「忍耐セヨ、忍耐セヨ、主ハ我ニ耳ヲ傾ケ、我ノ祈ヲ聴キ給ヘリ」と云ふ事である。

此聖像と餘り遠からぬ我らより向つて啓蒙所の左側の後ろの隅に、横長の立方體が置てある。規模で、高さが二尺六寸、幅が一尺九寸に三尺九寸ある。此は聖蠟を藏して、祈禱の時、信者の求めに應じて頒賣する所の器である。此聖堂の建立費も聖障も、其他の聖物も、一切露國なる教兄弟の献與に係る者で有たが、又多少は、日本信徒の献與に出た者がないでもない、乃ち此聖蠟賣臺の如き、其二で、此は津山教會の篤信なるイリナ深瀬夫人が、母堂の救ひを願ふ記念の爲に、特に此聖堂に献納せられた者であると云ふ(其製費は金十五圓以上を要した云)。

天井は、皆白色で、聖所のは八角形の穹窿を作し、中央に又八角形の飾あり、其中心は圓形で、其中間周圍は、唐草の莖と蔓を以て連結してをる。天井と四壁の相接する周圍は、皆短冊形を以て連続せしめてある。啓蒙所には中央に圓形の飾が有て、其中心には圓十字架、其四隅は、稍簡短な唐草模様を顯はしてをる。又玄關のには、花形の飾がある、其に八花八葉が相參差してをる。

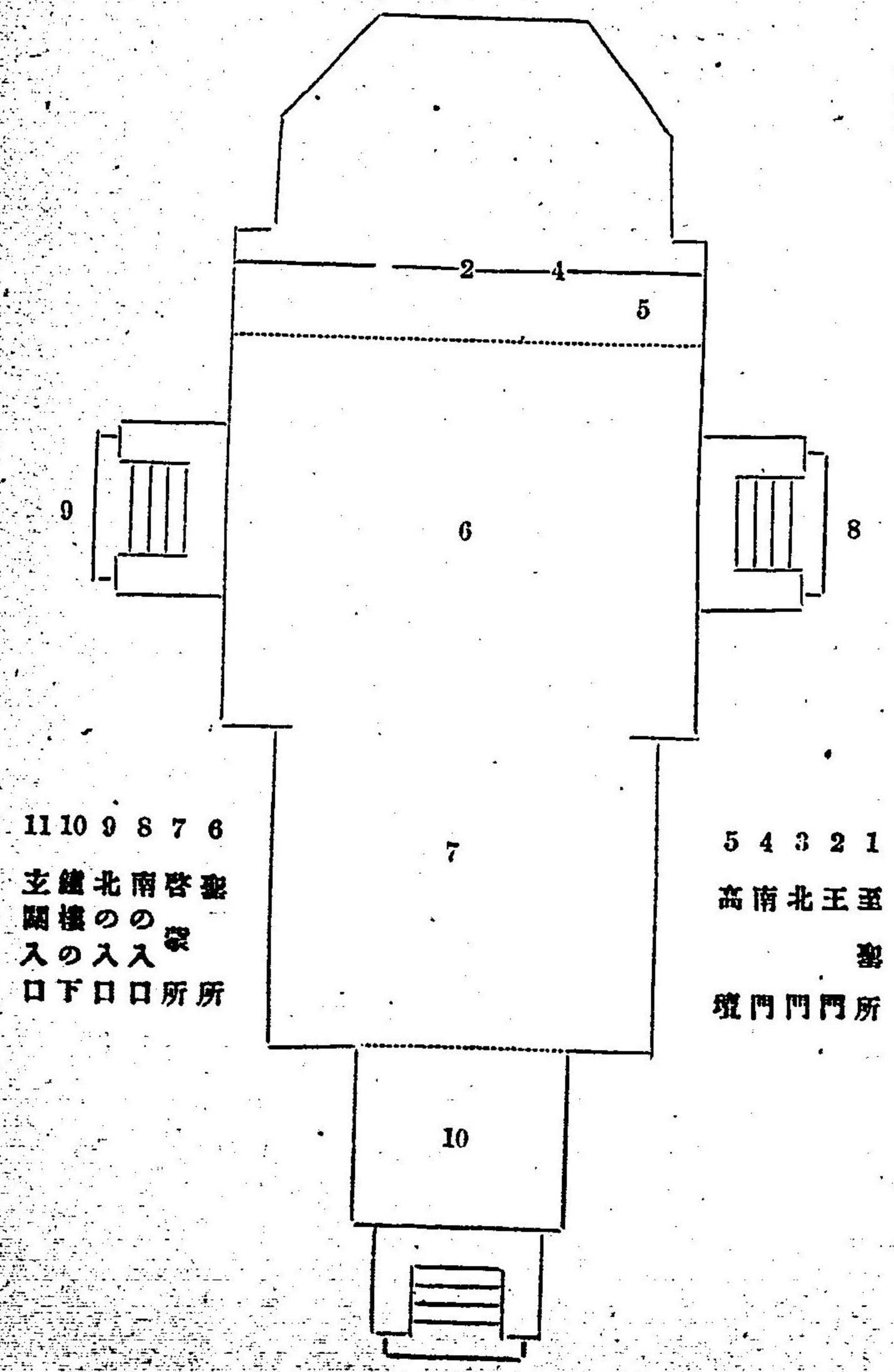
玄關から、啓蒙所の方へ入らうとする扉の上には、金装の小聖像が懸つてある、生神女が双手を舉げて、我ら衆民の爲に庇護を施し給ふ姿である。入口から玄關に向つて左側に幾十の階段がある、乃ち鐘樓への昇降口である。

此聖堂全體の建坪は、既に第一圖の説明中に記して置たが、特に分けての所は、今詳でない、只編者が僅かに目撃する所に依て想定すれば、大方至聖所が十一坪、聖所が四十二坪、啓蒙所が十六坪、及び玄關が六坪ぐらゐな者ではないかと思はる。併し此様な事は、如何でもよいとして、實際にいふん多人數入らるゝ故、大阪教會の信者は、どしどし主日、祭日及び其他にも、御遠慮なく、此聖堂にお入に成て、祈禱し、説教をお聴きに成るが宜しい、又未信者も御遠慮なく、御參堂なされて、ハリストス正教の眞理を御研究に成る様、我らの切に願ふ所であります。となたにも信仰と希望に依



て愛の上帝から、恩寵と啓迪は有りまじやう。

大阪聖堂平面略圖



以上大阪聖堂の内部に付て詳説したけれども、文字の説明ばかりではまだ分りにくい廉も少からぬと

思ふから、茲に平面略圖を添へて置きました。

第四章、圖 說 中。

イコノスタスの諸聖像、至聖所及び聖所の諸聖像、并に諸聖器物の事。

第五圖王門の高さは、地方聖堂の中で最も高く、東京のと相如く、約八尺を越ゆる。王門の上部なる生神女は、白き被り物に、紅の袍(裏衣は青)で、今舊約の預言書を繙き、天使の前に恭しく敬虔の貌を顯はして居られます。之に相對する天使ガウリイルは、稍薄紫を帯ぶる白衣で、右手を閑安の狀に出し、左手に花を持して、丁度今其口から『恩寵ヲ蒙レル者ヤ慶ベヨ』と唱へつゝある者の様である。右生神女の下に描かるゝ福音者マトフエイは、朽葉色の袍に、草色の裏衣を着て、其右肩の後に、羽のある人が立て居る。同マルコは、青の袍に、薄紫色の裏衣を着て、其左肩に獅が居る。次に我等より向つて王門の左の下なる福音者ルカは、濃藍の袍に、褪紫の裏衣で、其右肩の傍に牛が居る。其上なる同イオアンは、赤の袍に、緑の裏衣で、其右肩の上に鷺が居る。斯の四つの異象は、各々寶物の様に善く出來て、皆雲の上に現はれてをる事は、乃ち各々特別の意味を有て居る所の異象である事を憶はせませす。此四の福音者は、各縦一尺二寸、横一尺の小聖像である。



第六圖、我等より向つて王門の右なるハリストス救世主は、最も莊嚴の顔、整然たる態度で、青雲の上に立ち給ふ。青藍の袍に、鮮紅の裏衣、共に我等の目が覺めるばかり、其手に開ける福音經には「我ハ世ノ光ナリ、我ニ從フ者ハ暗ミヲ行カズ」との聖言を録す(イオアン、八の十二)。

第七圖、向つて王門の左なる至聖生神女は、崇高なる顔で、慈愛の懷に、無罪無垢の兒即ち上帝の子を抱きて、紫雲の中に立ち給ふ。此至聖なる母の着衣は、上が洋紅に下が草色で、上帝の子のは薄紫の御衣である。此聖像及び以下第一層の者は、皆縦五尺三寸横二尺五寸である。

第八圖、救世主の聖像に向つて右に隣れる天使長ミハイルは、鱗甲の上に薄紫を帯ぶる空色の袍を纏ひ、右手に焰の劍を掲げ、薄雲色の羽を左右に張てをる。

第九圖の、天使長ガウリイルは、前者と相對して、其目を天に舉げ、右手を胸に當て、我らの爲に至上の主に祈禱する狀を顯はしてをる。着衣は薄青を帯ぶる白色のステハリ狀の者に、薄紫空色の袍を纏ひ、兩背には紫雲色の羽を張てをる。聖衣の襟と袖口には、寶石と金糸の刺繍を顯はしてある。

第十圖は、特に斯の聖堂の名稱の依る所の至聖生神女庇護の圖である。生神女は、薄緑の袍に、丹色の裏衣を召し給ひ、双手に(フオモ)を持たせて長く垂れ、御身は紫雲を足凳として、橄欖色の如き景雲に倚り給ふ。其下に老總主教は、黄土色の祭袍を着て、經文の上に面を俯し、其はるか後ろの方に、佯狂者アンドレイと年少のエピファニイは、懼れつゝ眼を舉げて、至上なる女宰の現はれを見て、其奇徴を話しつゝある者の様である。此圖は從來ありふれたる庇護の圖と異りて、新珍なる描畫である。

第十一圖、神現の圖は、キエフの太公聖ウラヂミルの大聖堂の者に似てをる、けれども廣大なる山紫水明の景色を、此狹少なる一幅の中に收めた所は、彼に優りて佳作といふべきである。此中の授洗イオアンは、煤色の毛衣に、灰色の上衣を纏ひ、見るから嚴齋悲哀の苦行者であることを憶はしむる。

第十二圖は、ハリストスの降誕である、星の光に青味を帯ぶる白布に包まれたる至聖なる嬰兒は、今日を開て至聖なる母の顔と相對し給ふ。此母は、茜色の御衣を、其後ろに義人イオシフは朽葉色の衣を着てゐる。紺色の洞穴に、紫の山、夜の暗空色、此處にも景色は、浩大なる人物に添て、自然の善美を彰はしてをる。

第十三圖、ハリストス復活の圖は、元來其事實が奇蹟中の奇蹟なる一大事件であるから、其描寫も至りてむつかしくて、從來一つも、此れぞと思ふ善い者が無い、所が是の聖像は、稀に見る所の佳作である。大能ある上帝の子は、莊嚴の顔、堅實なる肉體を以て、右は祝福の手を舉げ、左は凱旋の旗を杖き、凜然として、石の上に立ち給ふ、此にも雲が現はれてをる。ハリストス上帝の子は、天の色を帯ぶる白衣を纏ひ、天使は藤紫を帯ぶる淡紅の衣を着て、ハリストスの前に跪いてをる、其羽は紫で、兩つ偕に高く上に張てをる。

### 第二層 (以下二層中の諸聖像は、各、縦二尺、横二尺五寸位である)。

第十四圖、晚餐の圖は、第二層中の大作である。救世主の袍は緑で裏衣は淡紅に描かれてある。主の顔と手は、今斯の神聖なる機密を行はるゝについて働き、神學者イオアンを初め其他の諸使徒は、該夜の大事件、殊に憂ふべき事情について、各々其面貌に、内心の思念を顯はしてをる。獨りイウダは



貪りと悪心を以て、此聖なる席に與かるの資格なき身ながら、また此に居て、左の手を顔に當て、顔の悪相を顯はしてをる。

第十五圖、生神女誕生の圖中、聖なる産婦アンナは今床の枕に倚懸つて、其老年に及びて生れた所の嬰兒を見て、悦びの色を顯はしてをる。此聖なる嬰兒即ち童女マリヤを抱ける婦人と他の二婦人ともは、義なるイオアキム、アンナの親族、又は近隣の人々である。

第十六圖、生神女進堂の圖は、今司祭長ザハリヤが、甫めて三つばかりなる至聖童女を、壇の一番上に立て、至聖所に導く所である。其下には童女の兩親なるイオアキムとアンナ及び他の婦人が驚いて見てをる。別に蠟燭を以て立てをる童女等は、至聖童女マリヤの近所の小兒らで、今至聖なる童女が、上帝の堂に獻せらるゝについて、送つて來たのである。

第十七圖、主の迎接の圖中、高老の司祭長シメオンは、今中央の壇の上に立つて、主のハリストスを抱いてをる。其顔つき口もとの容子は、大かた今上帝を祝讃して、『主幸ヨ、今爾ノ言ニ循ヒテ、爾ノ僕ヲ釋シ、安然トシテ逝カシム云々』と言てをる所であらうと思はれる。右の右即ち向つて左に跪けるは、至聖なる上帝の母、其端に立てをる老婦人は、預言女アンナ、又向つて右の端に鶴を持て立てをるのは、義人イオシフである。

第十八圖、主の顯榮の圖は、横額に描くのは困難であるから、前列の人物、使徒ペトル、イアコフ及びイオアン<sup>の</sup>の三人共半身にしてある。主は白衣を着て、光れる雲の中に立ち給ふと、我等をして坐るに福音經の記事を憶はせる(マテウイ十七の二、五、其他)。イリヤは丁度主がイエルサリムに於ける苦みと死の事を

話されて聴いてをる者の如く、モイセイは、主が二決して其律法に背く者でない、確かに律法を守り、預言に合ふ所のハリストスであるといふことを證明してをる者の如くである。

第十九圖、主の昇天は、亦横額には描きにくい圖である、けれども從來のありふれた圖の様に、無理に下の人物の全身を顯はすの窮屈を避けてあるから、此圖に對しては、我らは別に窮屈の思ひをせずに見らるゝ。救世主が兩手を舉げて、祝福しつゝ、昇り給ふ恩愛の容姿は申すに及ばず、山と雲、空の色に至るまで、皆善く出來てをる。

第二十圖、此聖なる五句祭の圖には、生神女を初め、十二使徒の面貌姿勢が、此驚くべき聖神降臨の奇蹟について、各或は感謝し、或は讚美し、或は驚喜し敬拜する所の特徴を顯はしてをる點が、最も目立ちて見ゆる。

第二十一圖、生神女の寝り。古來の畫家の風に依て本圖にも生神女を、非常に若く描いてある。其子なる救世主が、至淨なる母の靈魂をお迎へにおいでになつてをる所は最も善く出來てをる、彼の故らに救世主に嬰兒を抱かせた作よりは最も宜しい、聖使徒らの狀況亦一の難なき作である。

第二十二圖、尊くして生命を施す主の十字架の擧示の圖は、只ロマの太后聖エレンナと其時のイエルサリムの總主教だけを描いて、其他の人物は略してある。太后エレンナが其目を主の十字架に注ぐ所を見ては、我等ハリストスエレンナも、常に其靈魂の目を、主の十字架に注いで、中心より『主憐メヨ』を唱ふべきことを悟らせる者である。

### 第三層



第二十三圖、王門の上の最上なる中央の大聖像は、縦凡六尺、横四尺六寸位有て、天地の一切の權を握り經ふハリストス王の尊像である。王は、今天空色を帯ぶる白衣、襟と裾と其中間を縦に金縷の飾りせる袍を纏ひ、薄紅の裏衣に、頭には十字架と三角の飾ある金冠を被り給ひ、右の手には王の笏、左の手には全能の玉を有ちて紫雲たなびく寶座に坐し給ふ、其儼かなる顔と其崇高なる威容は、看る者をして覺えず襟を正さしむ。寶座の後ろなる、向つて左方には、機密の聖符を載せてあるのは、彼が是の靈糧を以て我らを養活し給ふことを示す者。右方には二枚より成る石盤を立て、ある、其中に横に數行の文字が録してあるが、敢て字體を正格に書いた者でない、只遠くから見て、大かたエウレニ文字で上帝の誠命を書いた者と思はせるまでである。

第二十四圖は、使徒の長座たるペトルと、初召者アンドレイが、ハリストス王の方へ向つて祈禱願してをる形である。ペトルは右の手を胸に當て、左の手に巻物を持てをる、其着衣は上が眞鷄に、下が緑である。アンドレイは両手を十字形に組み、左の手に十字架を持てをる、着衣は上が灰白色に、下が帯紅紫色である。

第二十五圖は、聖使徒神學者イオアンと、大使徒バエルが、ハリストス王の福音を衆人に宣傳の形である。イオアンは、兩手で巻物を舒べて、其自ら福音に録した言を示してをる。此に書いてあるのは、スラヤン文字であるが、其は有名なるイオアン福音第一章の初めの言で『太初ニ言アリ、言ハ上帝ト共ニ有リ、言ハ即チ上帝ナリ。是ノ言ハ太初ニ……』といふ所である。乃ち彼が斯く奧妙なる福音を著はし、且つ世に之を弘めたことを象つた者である。彼の着衣は、上が茜に、下が薄緑に描いて

ある。聖バエルは、左の手に聖書を持ち、右の手を舉げて、今侃々としてハリストスの福音を説教する姿である、其着衣は、上が赤に、下が緑に描いてある。

第二十六圖は、使徒フッディと使徒イウダ即ち主の兄イアコフである。フッディは、目を舉げて右の手を胸にして十字架を畫きつゝ祈禱してをる。其着衣は、上が藤紫に、下が赤である。イアコフは、左の手に巻物を持ち、右の手に上衣をかへげてをる、其着衣は上が灰白色で下が帯黄紫色である。

第二十七圖は、使徒アルフェイの子イアコフと、シモンジロトである。アルフェイの子は、右手に巻物、左手に衣をかへげ、其目は亦天に向て、上に在る事を思ふてゐる様である、其着衣は、上が朽葉色で、下が緑である。シモンジロトは、右手を下げて巻物を持ち、左手を胸に當て、祈禱してをる。其着衣は、上が草色で、下が茜色である。

第二十八圖は、ゼベダイの子イアコフと、ワルファロメイの兩使徒である。ゼベダイの子は、右手を下げて巻物を持ち、左手を胸に當て、をる、是れ皆其胸を、心を淨めて上帝と交通すべきことを思はしむる者である、其着衣は、上が灰青色に、下が灰白色である。ワルファロメイは、兩手を胸の前に重ね合せて、上よりの聖なる事を思ふ姿である、其着衣は、上が緑に、下が帯紅紫色の様である。

第二十九圖は、フォマとフィリップの兩使徒である。フォマは、亦兩手を胸の前に重ねて、今までの疑ひ深き念を去り、一心に復活のハリストス上帝を信じて、其お助けを願ふ如き姿である、其着衣は、上が濃藍で、下が灰白である。フィリップは、右の手を胸の上に、左の手を下げて巻物を持てをる、丹心



を以て上帝の恩寵を望む姿である。其着衣は、上が帯黒黄色に、下が濃き朽葉色である、以上で聖使徒十二人の聖像は済んだ、但十二使徒中十一人と別に聖パウルと合せて十二面である。

第三十圖、聖太后エレナと聖致命者アレキサンドルである。太后は金冠を冠りて、左右に寶珠の繻を垂れ、着衣は上衣の表が赤に裏が帯紅紫、下衣は橙黄に濃きバルントシンナ色を合せたる如き者、而して上下各金絲寶玉の刺繡を施せる者、さすが王者の母后たる盛装である。併し其よりも善美なるは、彼が其双手に盆の上に携ふる所の主の十字架の遺品と、其双眼を天に向けて十字架の主を望む所の信仰と愛である。聖アレキサンドルは、右手で十字架を畫き、左手に十字架を捧げてをる、勿論祈禱讚美の所であらう。着衣は上蔽が薄藍と、下衣が紫赤の間色である。此アレキサンドルは、果して何のアレキサンドルであるか、只致命者と云つて同名の致命者にもたくさんあるから詳かでない。(けれども茲に太后エレナと同額内に描いてある所から推考すれば、多分八月十四日に記念する所のパンフリヤ州ベルギヤの九人の聖致命者の一なるアレキサンドルであらうかと 思はれる。乃ち是の日に、コンスタンテノポリの皇居から、主の十字架の一部を出して、ソフィヤの聖堂に於て衆人に拜ませ、又十字行をなす古例が有た、それで特に是の同日に記念する所の聖アレキサンドルを茲に描いた者かと想はる、併し此れは史傳が詳かでない。其他にも致命者のアレキサンドルは、おほいあるから、果して何れか分らぬ。)けれども此諸聖像の献納者アレキサンドル、グリゴリニヤ氏は、大かた自分の名の依る所の聖人を描いた者であらうとは信せらる。同立の聖エレナも、多分同氏の令國の聖人だらうと推せらる。

第三十一圖は、預言者ザハリヤと、義婦エリサベタで、即ち授洗イオアンの父母である。共に主の前に端然として其恩寵を願ふ所の状をなしてをる。ザハリヤは橙黄色の祭服に、灰白色の裏衣を着け、頭の被り物と胸に、方形の徽章が附てゐる。エリサベタは、藤紫色様の頭巾を被り、帯黒洋紅の上衣に、帯朽葉紫櫻色の裳を着てをる。

以上列聖は、悉く雲の上に立ち、美しく光る金色を背にして、今に彼等が天國に活きて、我等衆人の爲に祈禱代求してをる狀況が察せらる。

第三十二圖は、至聖所を聖障の南門から拜觀した光景である。中央の寶座は、大約方三尺の立方體で、斯の中に、聖致命者マルダライの聖不朽體の一部分が藏められてあると云ふことである。向つて左隅の祭臺も其大さは右と相似た者で、其壁上に懸けらる、爵の祈禱の聖像は、大約縦三尺七寸、横二尺一寸、圖の形狀は、東京本聖堂の南側堂の至聖所に懸けてある者と同一である。寶座の正面なる壁上に懸けらる、聖三者の大聖像は、斯の新聖堂中、最も大なる者で、大約縦が一丈一尺に超え、横が四尺九寸、額縁最上部の十字架だけでも大約一尺五寸位ある様である。是の聖三の形色に付ては、別に次の圖説に於て詳かである。此には只其聖三の前に見ゆる大十字架の中の聖像と模様とに付て説明する、乃ち十字架の表面、中央は、ハリストス救世主の釘うたれ給ふ像、其上は上帝父、其左右は生神女と使徒イオアンである。十字架の裏面には、中央にハリストスの復活、其上は聖三を象れる三角の中にスライヤンの略字で上帝と記し、横木の向つて右は爵の祈禱、左は十字架を負ひ給ふ所が描かれ、縦の下には鶏と、梯子、矛、海絨とイエルサラム、ゴルゴファの景色が象られてある。此大十字架は高さが



七尺である。大十字架と寶座の間には七燭が立てられ、其前即ち寶座の上には、聖籠が圓筒形の硝子内に安置せられてある。此聖籠は別に第四十三圖に、七燭は第四十四圖に明かに見ゆる。此至聖所の天井は、聖所のよりも低い、けれども床の上から尙十六尺四寸五分の高さがある。

第三十三圖は、前述至聖所の大聖像である。聖經に『老イタル日』と名づけらるゝ主サワオフは、其白髪銀髯、耀く目に、永遠の父長壽の上帝なることを顯はしてをる、其着衣は薄紫の袍に、帯紅紫色の裏衣である。父の獨生子なるハリストス救世主は、右手に聖經を膝の上に立て、左手で胸を抑へて、彼は、蒼生の救ひの爲めに己れの意思を抑へ、乃ち父の意思を行ふことを顯はす者の如くである。彼は青色の袍と燃ゆる様な紅の裏衣を着けてをる。兩者の中間に黄土色の球と空色の十字架星が描かれてあるのは、乃ち上帝の子が父の旨に依て、十字架の苦死を以て世界を救ひ給ふ定理を悟らせる者であらふ。其上なる淨き鴿が、聖神であることは、もはや説明を要せない。此聖像は大きいだけに、雲が最も多い、紺色に、藍に、空色に、紫に、様々な鮮かな色で簇かる雲は、聖なる上帝の足凳となり、腰掛となり、肘懸ともなつてをる、聖詠者の所謂『雲ヲ以テ車トナス』所の大能者なることを思はしむる。背景の色は、茲には金色でなくて、夕陽色の如くである、嗚呼斯の美はしき夕陽色、是れ實に上帝の穩かなる仁徳を我らに悟らしむる者、イエルサラムの聖ソフロニイの祝文に『我等日ノ入りニ至リ、暮レノ光ヲ見テ、上帝父ト子ト聖神ヲ歌フ』と曰ふ通り、我らは上帝の穩かなる光と恵みに、中心よりの感謝と讃揚を上つるべきである。

第三十四圖、聖所中イコノスタス以外の聖像で、最も著しいのは、是の『イズバキータリニザ』(救

護女)と名づけらるゝ生神女の聖像である。其は聖所に入て南東の隅なる主の顔の聖像に隣り、向つて右手の隅、ソレヤの欄干てすに近い南側の壁に懸つてをる。圖に見える通り肖像額縁共に美妙精巧なる作である、大きは縦が大約六尺、横が四尺位、生神女の兩袖の下に小さく二人の聖像が附いてをるのは、向つて右が聖バンテレイモンである。左のは使徒シモンカナニトでして、左の手に聖書を抱へ、右の手に鋸か杖の様なものを持てをる。シモンカナニトとは、十二使徒中のシモンジロトのことで、此れはアフォン山に彼の記念修道院が有て、其處から此聖像が來た者であらう。生神女の面目の崇高善美なることは、彼が頭上と兩肩に見ゆる三つの星、即ち三重貞女たることを示す所の聖徳を遺憾なく、是の清秀なる眉目と威光ある面貌の表に彰はされた者である。彼の左手に抱かるゝ上帝の子の御衣は、古代の彫金的畫様を其儘に傳へたる者、衣服全體に、波形と飛沫の如き模様がある、共に薄き、パルントシンナにゼー、オー、色を調和したる如き色彩で、諸像全體の背景は、濃藍色である。此聖像の前に金色の懸垂燭が釣下げられてある、中央に大燭一本、其周圍に細小なる者九本を立てられる様に成てをる。

第三十五圖は、聖所に向つて右方に樹てらるゝ凱旋旗の表面で、聖像はハリストスの復活を描き、其周圍なる楕圓に唐草の葉が卷附き、蔓と偕に四方に延びて蜿蜒たる狀甚だ妙巧である。旗の下半は三脚に分れて、脚の上部、中央には十字架と星、左右には銅蛇を懸けたる十字架を二枚の石盤を束ねたる間に立て、中部と下端には、各々十字形の花紋と香爐、其他の模様を盛飾し、全體の布地は、鮮かなる海老栗色の天鵝絨で、其上に右の如き模様を金に青綠色で、美事に作成した所は、丁度七寶燒の様である。



第三十六圖は、右の凱旋旗の裏面で、聖像にミラリキヤの大主教奇蹟者聖ニコライを描かる、外、旗地の色彩、様式は、すべて前者と同一である。

第三十七圖は、向つて左、即ち北側に樹てらる、凱旋旗で、聖像には、上帝の現れを描いてある。

第三十八圖は、同上の裏面で、聖像は、カザンの生神女である。右表裏共、旗の形状、其他すべて第三十五圖に説明せる所と同一である。

第三十九圖は、聖所の中央なる高さ天井から釣下げらる、パニカデロ（大懸垂燭）で、銀臺の上下二段に各十二光づゝ、合せて二十四光の聖燭を點せらる、燦爛たる大聖器である。

第四十圖は、斯の新聖堂に屬する諸聖器物一式の圖で、聖架と福音經を初め、聖爵あり、聖盃あり、香爐あり、三燭あり、聖水器あり、其他リトルギヤに用ふる種々な聖器物が陳列されてある。概ね皆貴金屬で出来てをる貴重品ばかりで有て、一見金光燦然、鮮色爛然として、目が眩くなる様である。

第四十一圖は、接吻用の金十字架、第四十二圖は、聖福音經、偕に寶座の上に安置せられ、聖役者の手に捧げらる、貴重聖器物である。其他にも此様なのが數種あるのであるけれどもとても悉く採寫して本畫帖に掲ぐることは困難であるから、今は只其一例として、之を掲げたばかりである。其彫金と精巧の圖様の如何であると言ふことは、別に説明を要せずして、諸君は該圖を見て分るだらうと思ふ。

第四十三圖の聖籠（聖賜守藏器）は、前第三十二圖の寶座の上に見ゆる圓筒形の硝子の中に入てある者を出して、明徹と示したのである。我らが痛悔して領食所の畏るべき主イ、ス、ハリストスの聖體聖血と同一の預備聖賜は、實に斯の中に守らるゝのである。是の寶物は、金光目を射るばかり、

精妙人を驚かすばかりであるが、寫真から複製版した圖面では、愈々の美善を見ることが出来ないのは遺憾である。

第四十四圖の七燭は、亦前第三十二圖の寶座の後ろに見ゆる者と同じ聖物である。銀製金装の善美な者で高さが六尺で、形状は舊約の圖に時として見える燭に似た所がある。中央の三燭と下の圓柱の中間なる十字架の四つの隙には、シレチヤ語の「ニカ」(勝つと云ふこと)を、露文字で一字づゝ四所に分け顯はしてある。

## 第五章、圖 說 下。

### 附屬館 及び 濱寺墓地等の事。

第四十五圖から、第四十九圖までは、直接聖堂の部分ではないけれども、皆大に是の聖堂に關係ある者、又殊に斯の新築に有力なる動機を興へた者であるから、茲に附けて置く。第四十五圖は、聖堂の南東に當り、聖役者及び教役者等の住所に充てた建物で、圖に向つて右の端の一角が今の聖堂付管轄司祭の鈴木セルギイ父の居らるゝ所である。次の第四十六圖は、此建物の全體を示した者で、此通り日本造りが四戸で、中の三戸は、傳教者と輔祭の住居に充てゝある。向つて左端の西洋館は、大主教若くは司祭長などの御出に成た時の宿泊所に充てらるゝ。圖の中に、一人立て居らるゝのは、内田輔



祭である。此建物は、階上が三十七坪五合、階下が五十六坪三合三ある。

第四十七圖は、聖堂の南西方に在り、一は信者の扣室、一は大阪正教青年會の事務室、他は集會講演等の用に供せらる。此建物は階上十九坪五合、階下が十九坪七合五ある。別に門番所は六坪である。

第四十八圖は、明治三十七八年の戦役に於て、不幸我が國に客寓の中に病歿した所の露國軍士の死者を葬つた所で、此は別に説明するまでもない、看客の記憶にまだ新なる次第であらう。第四十九圖は、斯の墓地で、大主教以下内外の諸神品と大阪教會の兄弟姉妹と其他の衆員が彼の悉くの死者の爲に救贖の祈禱して、後に一同此記念高塔の、美はしき花環の捧げられたる左右に参列して採た所の寫眞である。向つて塔と花環の左に立てるは、我が日本の大主教ニコライ尊父、大阪の鈴木司祭、花環の右側には、同じく我が日本の主教セルゲイ尊父、其より右に數人隔て、横顔の白色洋服に寫れるは、石川正教新報主筆、其から又少し右に隔たつて、高く擧げられたる帽子の下の顔は、詠隊教師デミトリイ長輔祭である。我らは茲に友邦の死者の安息を祈り、併せて生者の健康を願ひ、殊に彼邦の敬虔なる諸父兄弟姉妹等の、我が幼稚なる日本教會に垂れ給ひし厚意と盡力を感謝せざるを得ない。

最終に第五十圖は、淀川を隔て、大阪生神女庇護聖堂を望んだ所である。乃ち聖堂の北の方から見た邊境で、圖には至つて小いけれども實際は甚だ景色の善い所で、上帝の宮居は甚だ奇麗に見える。

(斯く編者は是の畫帖の最後に、又聖堂の外景を出したのは、どういふ理由かと申すに、どうも我が看客は此様な畫帖を遂に終りから見て仕様がなからである。始めから順に開けて見ずに、終りから逆に括り開ける人の爲には、或は全く本書の順序を顛倒して製本した方が善かつたかも知れぬ。

〔補記〕大阪新聖堂成聖に付て献金の記録

収入の部

一金百貳拾貳圓七拾五錢	大阪教會よりの分	一金拾圓	星野定吉氏(聖堂建築材本圖)
一金八圓	和歌山 教會	一金六拾圓(アセチリンガス二臺)	未信者某氏
一金四圓拾錢	同 有志御中	支出の部	
一金五拾錢	豊橋 ウヰヱヲ武石姉	一金百六拾圓八拾錢五厘	諸神父慰勞費
一金貳圓	同 ヘルトル田中兄	一金拾八圓六拾錢	大阪 正教婦人會
一金貳圓	徳島 赤澤氏	一金貳拾五圓	同 正教青年會
一金貳圓	徳島 山田氏	一金七圓	
一金貳圓	徳島 濱田氏		
一金貳圓	徳島 宮田兄		
一金貳圓	京都 教會	一金五拾錢	姫路 イリナ岡本姉
一金五圓	伏見ソフイ十佐藤姉	一金壹圓	同 イリナ都守姉
一金貳圓	同 神部ソフイ十中野姉	一金壹圓	同 アナシナ河本姉
一金五拾錢	神戶 教會	一金貳拾錢	同 イリナ岩本姉
一金五圓		一金貳圓	同 小倉エカテリナ松井姉
一金貳圓拾錢	加古川 岡本氏	収入合計金貳百參拾四圓六拾五錢	外二 東京
一金貳圓	小野 見氏		
一金貳圓	姫路 イオアン森田兄	支出合計金貳百拾貳圓四拾錢五厘	
一金貳圓	同 マルフア森田姉		
一金貳圓	同 岡崎教會婦人四名		



## 第六章 補記。

斯の新聖堂建立が、一に露國正教會の尊者及び諸父兄弟の恩恵に依れることは、既に屢々明記感謝したる所なれども、斯く露國の彼等が我が日本教會を顧みて其靈益を計るに至れる所以を尋ねれば、専ら我等の尊榮なる大主教ニコライ愛父閣下の熱心と其幹旋に歸せざるを得ない。故に我等日本のハリスティアンは、又最も我が大主教閣下を徳として之に感謝を捧ぐる次第である。然るに我が大師父の謙卑抑遜なる、自らは一に之を上帝の恩佑と露國諸恩者の厚意と其愛に因れる献げ物の行爲者に歸するばかりである。閣下は實に己れよりも、深く其生國の盡力者と献納者に感謝を表することを善とし給ふ。由て余は茲に再び彼等重なる諸恩者の名を列舉して我が教會の諸父兄と諸信者に、之が記憶を勸むる。中に重複せる者もあるけれども、又新なる記事もあるから、以て前來の遺漏を補ふ事とする。

儲 日本内地の新聖堂起工に付て、露國上下の同情と佑助者の饒々たる中に、先づ特に露國の 現皇后アレキサンドラ フエオドロウナ 陛下 (Ея Императорское Величество, Цесарыня Императрица Александра Феофановна) には、五千圓の獻金を我が大主教に寄送せられ、又皇后陛下の御令妹故セルギイ大公夫人なるエリサフタ フエオドロウナ殿下も (Ея Императорское Высочество, Великая Княгиня Елизавета Феофановна) 一千二百有餘圓の獻金を寄贈せられたり、先に京都の主教として斯の日本教會に任せられし尊榮なるアンドロニコ主教 *Андроникъ*、*Евменовъ*、*Климентьевъ*、今テヒキンの主教なる同父 (Пресвитерный Андрей, Епископъ Тихвинский) は、其彼處に赴く道中に於て幾多の聖金を募集し、後現任所に在りて、我が大主教の求めに應じ、尙幾多の獻金を寄送せられ、乃ち彼の盡力に依れる者最も多く、其獻金約一萬餘圓に達せり。又ノーゴロドの貴婦アレキサンドラ ニコラエフナ ゴリツイナ公爵夫人 (Княгиня Александра Николаевна Полицкая) は、自ら及び其親交間に周旋して約五千圓を寄附せられたり。大阪の聖堂建築費に金員にて献せられし分は、其較著なる者斯の如し。

別に物品にて獻納せられたる主なるものを特記すれば、堂内正面の聖障 (Иконостасъ) を 其に嵌めある諸聖像 (Иконы) とは彼得傑のアレクサンドル グリゴリエキチ エリセエフ氏 (Александръ Григорьевичъ, Епископъ) の 全部獻する所なり。諸聖像はペテルブルグの美術大家アンドレイ ハトロキチ ローザノフ氏 (Андрей Петровичъ Розановъ) の 筆に成れり。氏はクロンシュタットの イオアン神父の尊愛を得たりし美術家にて同神父がペテルブルグに創立せられたる女修道院の聖像を畫きたる人なり。目下彼の都にてマリヤ柴山姉の就て學び居らるゝは、亦同氏方なりと云ふ。鐘樓に吊りたる大小六個の鐘 (Колокола) を 獻じたるはモスクワの イワン アンドレエキチ コレヌニコフ氏 (Иванъ Андреевичъ Колесниковъ) を 獻じたるはモスクワの



apcennn (Konecnikov) にして松山に獨力の獻財にて聖堂を建立せる貴婦人は即ちこの人の夫人なり。聖器物類 (Свещенная утварь) — 聖體禮儀用聖器、金裝十字架二本、金裝聖福音經二冊 — 並に諸祭服 (Облачения) 等を獻せるはカザン市のハメル ワシリエキチ シモタンキン氏 (Иванъ Барчлевичъ Шериничъ) なり。又燭臺數基 (Подсвечники)、大懸垂燈 (Лампакажия)、聖凱旋旗 (Копье-би)、銀製聖龕 (Серебр. ковчегъ)、銀製香爐 (Кадило)、及び其他諸聖器はベテルブルグのイワン イワノキチ ルベン氏 (Иванъ Ивановичъ Рубинъ) 並に氏の兄弟なるヌオドル イワノキチルベン氏 (Осолопъ Ивановичъ Рубинъ) の獻納に係る。氏は我がセルギイ主教の最も親しくせらるゝ知己なりと云ふ。我が讀者は是の畫帖に依て此等諸聖物の圖を見る毎に右等諸尊者及び諸父兄弟の厚志と博愛を懐ひて彼等に感謝し且つ之を主の前に記念して其健康と救贖を禱らざる可らず。

録 附  
祝 頌  
餘 音



至聖生神女庇護聖堂頌并序

維明治四十有三年七月。大阪正教會至聖生神女庇護聖堂成。其十二日。大主教尼閣賴師。主教些兒吉乙師。率諸司祭諸輔祭。行成聖之禮。奠陰保羅中井天生獻頌禱之詞九章。分至聖生神女庇護聖堂九字。各冠其首。韻用履軒古韻。自東至輯。分韻九。曰。陽。陰。實。頌曰。

至哉太元。鴻妙無窮。玄玄厥居。寶座峨嶺。顯名朝曦。定位正東。方圓垂象。乃有靈宮。準繩遵法。雙尖十棧。寢廟藐藐。有穆聖容。傾倒九天。層層來降。深仁大慈。誕敷光寵。聖殿有值。崇墼巍巍。磐上設位。于俶其基。陰府不勝。孰能毀之。載禱載頌。以免永死。爛彼王門。福祿所萃。承祀享祭。萬民特賴。神貌崇嚴。就之靈禱。列聖環照。在帝左右。生命遍布。上帝是嘯。天地未成。上帝獨居。太虛為殿。豈有柱礎。無形無聲。天軍威歌。彼嗟嘒咏。式為大輅。坤輿造室。儀型支圖。取彼棄石。

祝頌餘音

置諸隅處。聖詩百八篇帝曰善哉。我名在彼。列王

上八章二十九節、歷代志下七章十六節、

神明玄奧。在彼蒼天。經綸四方。德為厥本。沉其愛。浩浩其仁。瀛洋如海。渾深如淵。睿旨施惠。乃由誠信。慈眼臨顧。斯見遜順。罪亦則白。譬諸羊羣。潔穢如雪。以獨渥丹。以賽亞書一女性成罪。救自女性。無母之神。無父而生。童身清淨。倘有母名。抱兒食乳。不失永貞。枯朽生華。垂象靈杖。民數紀略十棘在火中。不燬克炳。出埃及記三章有門向東。恒久掩扃。以西結書一至深哉聖諦。不可形狀。庇地如雲。蔭城如幃。神女捧衣。垂眷鎮守。殿屋通天。啓微燭幽。降上陟下。接合宇宙。天放鎖鑰。四邊縹緲。高仰聖姿。神從情遊。毒矢凶劍。不復侵寇。葆衛擁護。恩及億兆。護國天際。覆夫衣襟。璨璨駢聯。張之如關。趨拜堂下。舊害必熄。俯伏壇前。玷污必嚼。轉者不拒。厥名是錄。誠信無疑。聖神必宅。天有慈憐。垂惠如珞。萬民子來。永受多福。聖慮攸眷。上帝駐蹕。魯人精誠。建室聖別。元賁

三三



萬千。樂心遠達。虔恭進奉。其香有餘。絕域弔死。情思感徹。忠國哭友。愛及枯骨。瞻仰華城。靈塔堯兀。奠祭題名。以代碑碣。堂宇既成。總干山立。金章粉壁。巍峨爰業。遠控河泉。鎮于南攝。三梁長橫。澗水滄滄。升拜請救。神必報答。諷詠祝頌。靡不嘉納。洪鐘攸召。離者諧合。聖謨洋洋。錫我大法。

夫レ人ハ活ケル神ノ殿ナリト云ヘリ主ハリストスハ曰ヘリ我ハ彼等ノ中ニ居リ彼等ノ中ニ行カント神ヲ容ルル殿ハ其結構ノ壯麗斷ノ美必端正潔淨ニシテ其屋梁椽桷窗櫺樞ノ類ハ必材ヲ慈悲仁愛謙遜溫柔聖潔公義謹慎廉節等ニ取ラザル可ラズ然ルニ罪惡ノ斧鉞ハ神賜ノ樓閣ヲ壞チテ魔鬼ノ棲處ヲ造リ驕慢拜偶像不義淫行惡惡貪婪讎怨嫉妬ヲ以テ其材ト爲セリ始初輪奐ノ美ハ豈復之ヲ觀ルヲ得ンヤ然ラバ則今日人類ニ切要ナルコトハ我等ノ衷ニ神殿ヲ建設シテ務メテ初造ノ美ニ復セシムルヨリ急ナルハナシ我等ノ大主教ニコライ尊師ハ吾ガ邦人ヲシテ簡簡ニ神殿ヲ建設セシメンガ爲ニ力ヲ致

ノ加ハレルヲ思ヒテ崇敬瞻仰ノ至ニ勝ヘズ敬ミテ微衷ヲ陳ベテ祝慶ノ誠ヲ致ス

明治四十三年七月十二日

- |               |           |
|---------------|-----------|
| 東京 神田 正教會     | 同 麹町 正教會  |
| 同 本郷 正教會      | 同 日本橋 正教會 |
| 同 芝 正教會       | 同 京橋 正教會  |
| 同 淺草 正教會      | 同 下谷 正教會  |
| 同 本所 正教會      | 同 深川 正教會  |
| 右總代 イオフ 矢萩源次郎 |           |
| 同 パワニル 伊藤 廣親  |           |

祝詞

維時救主降生一千九百十年七月十二日聖使徒祭ヲ期シ大阪正教會聖堂新築落成ニ付我ガ尊憲ナル大主教閣下ハ全國神品ヲ大阪ニ會シ盛大ナル成聖式ノ祝典ヲ舉行セラル我等遙カニ其聖典ヲ拜シ茲ニ聊カ蕪辭ヲ述ベテ祝詞ヲ奉呈ス  
夫レ聖堂ハ世海ニ於ケル救助船ナリ社會ハ滔々生存競争物慾主義ノ嵐ニテ激浪怒濤ニ漂サレ人心安キ思ナシ然ルニ一度聖堂ニ入レバ聖障ハ歷々前ニ在リ祈禱聖訓讚美ノ聲ト共ニ恰モ救主聖母天使

祝頌餘音

スコト茲ニ五十年多ノ草木禾稈ヲ以テ建設セラレタル堂室第宅ノ間ニ在リテ壯麗ナル神殿ヲ簡人ノ衷ニ建設シ給ヒシコト其幾何ナルヲ知ラズ然ルニ簡簡ニ神殿ノ建設セララルハ必神聖ナル機密ノ行ハルル處聖詩靈賦ノ歌頌セララル處ニ於テ各人ノ謙虛ナル意念ノ衷ニ聖神ノ至大ナル寵錫ヲ蒙ルニ因リテ成立スル者ナルガ故ニ大主教座下ハ亦斯ノ有形ナル神殿ヲ建設スルコトノ必要ヲ思ヒテ首トシテ東京ニ其他諸處ニ聖堂ヲ建設シ給ヒシガ今又大阪教會ノ爲ニ多方拮据シ給ヒタル至誠ニ因リテ露國上下ノ贊護ヲ得茲ニ舊會堂ノ墟ニ倚リテ崇嚴華麗ナル聖堂ヲ建設シテ成聖ノ典ヲ舉ゲラル我等東京諸教會ノ信徒ハ同信兄弟ガ斯ノ神光照灼タル殿内ニ於テ殊ニ其名ヲ得タル生神女庇護ノ下ニ在リテ其心靈上ニ於テ簡簡ニ神殿ノ建設セラレ又此ニ縁リテ許多ノ神殿ノ新ニ建設セララルベキヲ思ヒテ歡喜已ムコトナシ神殿ノ建設ガ此ノ要求ニ基クト共ニ更ニ斯ノ神殿ガ昔テ仔虜トナリテ此ノ地ニ客死セシ同信兄弟ノ永遠ノ記憶ノ爲ニ建設セラレタルコトヲ聞キテハ博愛公義ノ道ニ於テ一救調

及列聖ノ高潔ナル人格ニ接スルノ壯嚴善美ナル光景ハ心軌ヲ一轉シテ俗念ヲ去リ迷夢ヲ覺シ真正ナル人生ノ行路ニ向ハシム

抑大阪市ハ我國帝都ニ次グ大都會ナリ關西ニ於ケル主都ナリ聖堂建設ノ必要ハ爾來唱導セラレシ所ナリ今ヤ敬虔ナル露國信徒ノ獻金ニ依リテ宏壯ナル聖堂建設セララル實ニ大阪正教會ノ爲メ將タ日本正教會ノ爲メ慶賀ノ至ナリ自今其穹窿ハ高ク天空ヲ指シ恰モ都人ニ天父ヲ教ヘ人生ノ向上ヲ示スガ如ク其鐘聲ハ都人ニ警醒ヲ促サン茲ニ聊カ祝意ヲ表シ大阪正教會ノ益々盛大ナルト教ノ道ノ愈々汎カラシコトヲ祈ルアミン

救主降生一千九百十年七月十二日

- 三島正教會副輔祭 パワニル 廣藤保朗
- 江間正教會傳教者 エラスト 宮階以拉助
- 修善寺正教會傳教者 ヤコフ 根來乙五郎
- 柏久保正教會傳教者 ハトル 森繁

祝辭

時維救主降生一千九百十年七月十二日大阪教會



聖堂建築の工全く成りて、茲に盛大なる成聖の式典を舉行せらる吾等一同慶祝に堪えず熱々惟るに大阪は諸事成繁榮を極むる大盛都にして實に又東海以西の樞要地たるを以て必ず此處に一大聖堂を建設し以て信仰上の機關を完美にして布教の基礎を堅定し而して傳道界に大飛躍を試みざる可らずとは夙に之れ吾人の望める所なりき而して幸に此積年の宿望は成就せられて茲に崇嚴なる聖堂は建築せられ今や落成して其盛典を舉行せらるゝに至る同信なる吾等の欣慶何に譬へん庶幾くは向後諸兄弟各位の御協力と御奮勵とによりて益々貴會の隆昌を謀られ以て多年の素願に酬ひ新なる堂をして一層の光輝あらしめられん事を茲に謹んで祝辭を呈す

教主降生一千九百十年七月十二日

豊橋基督正教會一同

大阪基督正教會各位

祝詞

大阪ハ日本第二ノ都府ニシテ實ニ關西ノ首都ナリ

リ故ニ此地ノ盛衰進退ハ關西一般ノ消長ニ影響スルコト恰モ首腦ノ全身ニ於ケル關係ノ如シ我ガ福音傳道ノ業亦此例ニ洩レズ、大阪ノ地、教勢發展セバ關西各地方亦自ラ活氣アリ、然ラバ此地會勢ノ進退ハ實ニ日本半國ノ進退ナリ今ヤ此地新ニ聖堂ヲ建築シ茲ニ成聖ノ式ヲ舉ゲラル我等此盛事ニ逢フ者豈多大ノ歡喜ト感謝ヲ禁ズルヲ得ンヤ蓋シ此聖堂ハ恩寵ノ源泉トナリテ聖神ノ恩波此ヨリ四方ニ流布シ此聖堂ハ福音ノ寶庫トナリテ救贖ノ救ヲ賜ヒシ主ハ更ニ此聖堂ヲ以テ關西一般ノ宣教ト救贖トノ爲メニ實効アラシメ給ハンコトヲ、茲ニ大阪ノ爲ニ此成聖ノ大典ヲ祝スルト共ニ此祝賀ヲ以テ更ニ關西一般ノ爲ニセントス

千九百十年七月

名古屋福音會

祝詞

大阪聖堂成聖セララル

竊カニ按ズルニ大阪ハ現時ニ於テモ將來ニ於テ

モ物質界活動ノ大都會タルヲ失ハジ去レドモ人ハ麵麩ノミニテ活クルモノニ非ズ其一反豁然トシテ精神的ニ目覺ムル曉ニ於テ此大都府が巨口ヲ啓ヒテ慾求スル處ノ無クテ叶フマジキモノハ何ゾヤ是政治ニ非ズ文學ニ非ズ又、武備ニ非ズ必ラズヤンレ宗教ナランノミソレカアラヌ乎睿智者ノ攝理ハ不可思議ノ手ヲ垂テ此處ニ壯嚴ナル讚美ノ堂ヲ基ケ給ヘリ冀クハ『活ケル水』ト『生命ノパン』トハ饒カニ此大聖堂ニ於テ物質ノ子等ニ飽カシメラレン事ヲ

謹而祝辭ニ代フト爾云

尾張半田正教會信徒總代

主降生一千九百十年七月十二日

彼得 望月

祝詞

福音ノ種子我ガ日本ノ國土ニ落チシヨリ年處未ダ幾何モ經ザルニ全國到ル處會堂ノ設ケ在ラザルナキノ進境ヲ呈シ今又我邦三大都府ノ一ナル大阪ノ地ニ於テ聖堂新築ノ工ヲ竣ヘ茲ニ本日教會ノ柱石タルニ大使徒祭ノ聖日ヲ以テ成聖ノ大典ヲ舉

祝頌餘音

行セラル誠ニ喜悅措ク能ハザルトコロナリ大阪ハ其地位ヨリ言フモ其教勢ヨリ見ルモ我正教會關西ノ雄鎮トシテ早晚主教座ノ置カレザル可ラザル處我等關西ニ在ル信徒ノ意ヲ強ヴスル其幾何ナルヲ知ル可ラズ本日成聖ノ盛典ニ列スルノ榮ヲ得テ感謝禁ズル能ハズ一言蕪辭ヲ陳ベテ聊カ祝意ヲ表ス阿民

尾張乙川正教會信徒總代

主降生一千九百十年七月十二日

保羅三澤爲壽

祝文

父ト子ト聖神ノ御名ニヨリ謹而大阪正教會聖堂成聖式ヲ奉祝候也アミン

明治四拾叁年七月拾貳日

京都正教會信徒一同

父ト子ト聖神ノ御名ニ因リテ也

祝詞

聖母守護ノ名ニ因リ茲ニ聖堂建立セラレ本日即チ聖使徒祭ノ佳日ヲトシ成聖式ノ大典ヲ舉行セラ



我等信徒一同ノ光榮過之モノナシ謹而本日ノ大典ヲ奉祝ス

降生一千九百十年七月十二日

神戸顯榮教會信徒一同

父及子及聖神ノ御名ニ因テ也

祝詞

至聖生神女守護ノ名ニ頼テ大阪市ニ建設セラレタル我正教ノ聖堂此ニ落成ヲ告グ本日聖使徒祭ノ聖日ヲ選ミ成聖式ノ盛典ヲ執行セラル我等幸ニ其末席ヲ汚スノ榮ヲ得歡喜實ニ譬フルニ言辭ナシ唯仰テ神ノ光榮ヲ讚揚シ衆人ノ眞理ヲ識リ救贖ニ進ミ聖堂ノ長ニ隆盛ナランコトヲ謹ンテ祝詞ヲ述ブ

教主降生一千九百拾年七月十二日

播磨加古川聖三者教會信徒一同

祝詞

維時明治四拾叁年七月拾貳日聖辰ヲトシ大阪正教會聖堂成聖ノ式典ヲ舉行セラル由來大阪ハ關西

樞要ノ地所謂山上ニ建ツルノ邑ナリ今ヤ此地ニ神ノ聖殿成ル誰カ祝賀セズシテ可ナランヤ其光輝ル、コト能ハズ關西ノ光輝爲ニ一層ノ光明ヲ得タルヲ以テナリ

希クハ至聖神ノ御聖恩ニヨリ永久ニ山上ノ光ヲランコトヲ祈ルアミン

爰ニ小子等長野正教會ヲ代表シテ聊カ蕪辭ヲ呈シ祝意ヲ表シ奉ツル再拜

明治四拾叁年七月拾貳日

長野正教會信徒總代

- アレキセイ 河野 次郎
- アレキセイ 小池長兵衛
- カ 北澤才之助

謹奉祝大阪大聖堂之聖成

明治四十三年七月十二日

備中柳井原正教會總代

サムイル淺野

祝詞

謹ンテ惟ミルニ全能ナル三者ノ光ハ既ニ我が三大都府ニ耀キ且ツ益々耀カントス其活ケル記念ト

ノ敬虔ナル兄弟等ノ心勢ト厚意ヲ感謝シ衷心ヨリ其健康ヲ祝シ永久ニ主ノ前ニ其記憶ヲ願フ者ナリ

ハリストス降生一千九百十年七月十二日

東京正教會敬役者會

- 長司祭 パワエル 澤邊 家康
- 司祭 ハトル 假野 成幸
- 司祭 ロマン 千葉 忠明
- 司祭 シメタン 湯川金太郎
- 司祭 フェオドル 水野 親
- 司祭 アレキセイ 澤邊博太郎
- 司祭 ヲシロイ 澤井 忠徳
- 司祭 ステファン 釘宮 剛
- 輔祭 パワエル 高橋 坦
- 輔祭 フオマ 石田 金吾
- 副輔祭 ニコライ 吉田 雄吉
- 傳教者 フオマ 大野 耀彦
- 傳教者 イオアン 片岡 健吉
- 傳教者 イサイヤ 水島 行徳
- 傳教者 ニーコン 松田 保徳
- 傳教者 マルク 伴 頼三
- 傳教者 ヲリゴイ内藤 三雄
- 傳教者 ナイト 越山 照

シテ東都ニハ高大ナル本聖堂アリ西京ニモ崇美ナル聖堂アリ其三府以外ノ小都ト雖モ既ニ神ノ殿ヲ有スル者少カラズ獨リ大都府ノ一ナル大阪ガ是ノ中ニ遺サレタルハ同地ノ諸兄弟ト我等僭ニ遺憾トスル所ナリシガ今ヤ主ノ定メ給フ時至リ茲ニ大阪生神女庇護ノ新聖堂ハ工ヲ竣ヘ本日ヲ以テ我等ノ大主教ニコライ尊父及ビ主教セルギイ尊父ニ依テ成聖ノ大典ヲ行ハル不肖東都ノ敬役者等ハ斯ノ盛事ヲ聞キ斯ノ佳日ヲ見テ只歡喜ト感謝ニ堪ヘズト云フ事ノ外果シテ如何ナル言文ヲ以テモ祝頌シ盡スヲ得ザルナリ然レドモ是ノ日ニ讀マレン所ノ聖福音ハ我等ニ聖堂ノ大目的タル重要ノ義ヲ訓戒セリ曰ク我ハ彼等ニ永遠ノ生命ヲ與フ彼等ハ世々ニ滅ビズト乃チ我等ハハリストス神ノ是ノ言ヲ貴地ノ兄弟等ト僭ニ祝ヒノ中ニ戒メトナサン願ハクハ斯ノ善美ナル新聖堂ヨリシテ光ル三者ノ永遠ノ生命ハ愈々衆人ニ傳ヘラレ彼等モ我等ト僭ニ斯ノ神ノ殿ニ全能者ヲ讚美シテ世々ニ滅ビザル者トナルヲ得ン而シテ我等ハ特ニ新聖堂ノ建立ニ配慮ト盡カヲ賜ヒシ尊師父及ビ大阪ノ當事者並ニ露國教會



傳教者パウエル 青木 樽一〇  
傳教者イオアン 大木竹次郎〇

夫れ聖殿は神の家なり至上者の宮なりいと高き神の睿智と権能と仁愛とは見えすして常に此の中に充溢せり喜ある時此の聖殿に昇りて感謝を神にささぐる者は福なり憂ある時此の聖殿に昇りて慰藉を神より受くる者は福なり吾が足らざるを知りし時も吾が罪を認めし時も此の聖殿に趨りつきたる者はいかで其身の幸福なるを思はざらむ大阪正教會の信徒は今この幸福なる位置に數へらるべき者となりぬ

潺湲として盡きざる淀川のかなたに崇嚴清麗なる吾が正教會の聖堂は空高く聳えぬ鐘聲けふより市民の耳朶を破りて其警醒の響とならむ詠歌の聲今日より更に高くのぼりて其敬神の真心を天上の父に致さむあゝ盛なる哉けふの式典去年我が大主教が覺束なき預算のもとに工事を起し給ひしより以來見えざる神の力は能く此の聖なる業を助けて母たる露國教會の幾多の敬虔なる信徒の手より其

別ノ聖所ハ定メラレタリ舊約時代ノ摩西ニ命ジ「スキニヤ」ニ於テ公奉神禮ヲ行ハシメ新約ニ至リテ救主ハリストス祭日毎ニ耶路撒冷ノ聖堂ニ至リ門徒及ビ衆民ニ垂教ヲ賜ヒ又其聖使徒等ハ主ノ指教ニ服膺シテ常ニ耶路撒冷ノ聖堂ニ集會シ共ニ主ノ聖體血ヲ領食シ一心以テ祈禱願求セリ斯クシテ吾人信徒ノ確然タル標準トナリ一般古今内外ヲ論ゼズ奉教信徒社會ニ聖堂建立ノ必要ヲ來セリ況ヤ聖堂也者ハ吾曹衆信徒ノ敬虔智信ヲ一ニシ美的眞觀ヲ深大ナラシメ惟一ノ聖主ニ向上奉事セシム茲ニ於テカ塵俗ト自ラ別置區ヲナシ在ユル莊嚴美觀裝飾ヲ極メ崇高ノ念油然而シテ湧出シ來ラシメ特ニ聖主之臨在セル所上帝ノ聖殿救世主ノ聖家トシテ心靈ノ糧賜ヲ領得スル所タル宗教弘布ト相俟テ誰カ亦尊重セザランヤ今ヤ斯ノ目的ヲ遂行シテ聖堂建設ノ竣工ヲ告ゲ成聖之大典ハ舉行セラレントス曩日既ニ舊帝都京都正教會堂竣成セラレ今亦我が第二ノ大帝都大阪教會ハ其ガ景勝ノ地位ヲ占メ浩緩清透タル淀河及ビ三大橋ヲ俯瞰シ、舊城ト相伍シ輪奐ノ莊美煥然トシテ眞ニ精緻ヲ極メ其結構

悉くの費用と聖器聖物とを献せしめ給ひしかば工事は一の滞滞なく今日此の盛典を擧げて朝野の貴賓紳士と其歡を共にするに至る是れ吾が日本全教會の信徒が大阪教會の諸兄弟と共に永久感銘して忘る可らざる事なり、東京駿河臺なる女子神學校は敬みて遙かに祝辭を呈し併せて本校出身者にして大阪に在す諸姉が此の貴き神殿に入りて敬虔篤信なる心を養ひ益奮勵卒先してあまたの未信者を此の教の光の下に集はしめ給はんことを祈りまつるになむあなかしこ

明治四拾三年七月十二日

女子神學校上

聖堂聖成祝辭

維時救主降生一千九百拾年七月聖使徒大祭ノ吉辰ヲトシテ大阪正教會聖堂聖成之大典ヲ舉行セラレ噫嘻亦盛大莊嚴ナル哉吾曹信徒斯ノ未曾有之盛事ニ會シ豈欣喜雀躍大恭慶賀セザル可ンヤ不肖罪僕等伏惟ミル

至慈至仁ナル眞神ハ何レノ所ニ論ナク吾人ノ新求ヲ聽納セラレ、ト雖モ又其聖旨ハ吾人ノ爲ニ特

ノ優麗ナル寺院佛閣ニ多ク其比ヲ讓ラズ堂頂ハ幾々乎トシテ高ク雲星ヲ凌貫シ金十字ハ燦然トシテ都下百萬ノ衆民ニ慈愛ト其救贖ノ眞理ヲ警醒默示シ偶神ノ幽暗ヲ照輝シ以テ彷徨ノ都民ヲシテ自ラ歸省ヲ知ラシメ聖鐘ハ迷信罪愆ノ惰眠ヲ覺悟ス可ク噫嘻眞ニ優麗莊嚴美ハ堂ノ内外ニ充溢シ福樂ノ泉源エデンノ樂園タル感アラシムト云フ可キ也吾人今新築セラレタル斯ノ聖堂ニ由テ内ハ各信徒ノ神恩ニ聖浴シ救主ノ聖家トシテ其靈身ヲ安息修養セシメ外ハ以テ都人士百萬ノ救道福祉ノ警鐘眞ノ樂園トナランヲ喜ブ是ヨリ以後眞神ノ光榮ハ光彩陸離トシテ永遠八紘ニ輝キ我が大都ハ勿論關西諸教會ノ模範重鎮ト爲リ進ンデハ我が日本帝國ニ眞理ノ活泉湧出シ普及ノ光照ヲ見ルニ至ラン事吾人ノ確信シテ疑ハザル所ナリ茲ニ於テカ吾人信徒ハ陪々感奮激勵以テ我が同胞兄弟ノ信念ニ一層ノ發展ヲ來シ無形ノ聖堂ヲ建立ス可ク是亦努力セザル可ラズ古聖師父吾人ニ教ヘテ曰ク爾等聖堂ヲ愛セヨ若カモ爾己レヲモ亦聖堂ト爲セヨト眞ナル哉言ヤ不肖等斯之未曾有ノ盛典ニ會シ偶々希望ヲ陳シ



テ祝辭ヲ捧呈シ併而將來ノ陪發展ヲ祝スト云爾  
明治四十三年七月十二日

備前岡兒島復活正教會  
傳教者 龜井 介男  
信徒一同 謹白

祝詞

謹奉祝大阪正教會聖堂成聖式

明治四十三年七月十二日

和歌山正教會總代

イゲナテイ岩間與二

奉祝成聖式歌

成子 上

天つ神まします宮はたちにはけり

こゝろも高くうたひたへむ

大阪聖堂の成聖を祝ふ詞

今茲明治四十三年七月十二日大阪聖堂工竣りたるを以て吾が尊憲なる大主教の君を始めとして主教の君神品各位貴賓の方々にも御參集の上本日

に飢ゑたるものよ來れ渴きたるものよつけと愛の福音を叫びつゝあるなり嗚呼一の堂にして信望愛の三つの福音を傳ふるものは世に稀に見るところこれ尋常一様の祝典にあらずと云ふ所以なり祈る此の堂の福祉無疆にして至上者の庇護いよ深く厚ならむことを聊蕪辭を述べて祝詞となす

京都正教女學校職員生徒一同

茲に我大阪正教會の聖堂新に成るすなはち本日彼得パウエル祭のゆかりある日をトし其成聖式を行はれ大主教主教閣下内外のやんごとなき方々全國信徒諸兄の來臨を辱しし數ならぬ身のこの壯嚴なるみにはの末に列り得しは寔に妾等千歳の一遇にして何の光榮か之に如くべきもこの聖堂は往にし日露の戦に我が濱寺に俘囚となりし人々の歿せられしを記念せんとて彼國上下の酸められし義捐と大主教首め事に當らるゝ方々の熱心なる盡力によりて成りしものにてその結構の壯輪奐の美道行く人も足を止めて仰望嘆美やまざらしむ思ふにこの堂に入るものは亂れし心を去りて清

祝頌餘音

トして成聖の式をあげさせらる不當なる京都正教女學校の職員生徒等もこの盛典に列することを得たるは欣喜に堪へざるところなり願ふにこの式は尋常一様の祝典と其類を異にしてこれを慶しこれを賀してあまりあるものなり

それこの堂の建てられたるは世のやぶれやすきかりそめの營にあらす百萬の大阪市民中未だ正教の眞光を見る能はずして迷ひの海に漂へるもの幾何かある而して此の堂はこれらのものゝために燈臺となりて心の目を光らせその歸着すべき信念を啓かしむる所なりこれ實に慶すべきの至りならずや

加之世には眞理を渴望しつゝありても其源の那邊にあるを知る事なくして徒に呻吟するもの鮮しとせず而るに此の堂の營まれしによりて始めて其源を認めこれに趨うつきて渴を止むるもの幾人かあるらむこれ亦慶すべきの至ならずや已に人の信念を啓き人の渴を止むるすらこれ大方ならざる欣なるにこれは凡愛の大源泉にして盡きざる活水は常に流れつゝあるなり巍々たる高堂よりは聲明か

き望をおこすに足るべく聖を傳ふ鐘の音は未信の心を引くに餘あらん最と微なる妾等ながら益と救の道にいそしみて堂の建立者の御恵にも副ひ奉らん成聖式にあふ嬉しさの餘りかくなん祝辭とす

明治四十三年七月十二日

大阪正教婦人會總代

イナ 岡 英子

祝辭

嘻我等が待ちたる大阪聖堂の成聖式實に嚴かに終る我等此の喜ばしきを何に例へんこの聖堂の建設せられたる實に大主教閣下の御盡力と内外の最大熱心なる諸兄弟に依て此の地に建てられたり我等何を以て此の大恩に報んか又此の處に列席せられたる大主教閣下を始め主教閣下及び諸神父諸先生の御疲勞一方ならずと察せらる我等此の大恩を思ひ大主教閣下の祝福の下に熱心なる祈禱を捧げ感謝せんとす願はくは諸兄弟等よ益信仰を奮揮せられん事を希願ふ謹んで敬白

降生一千九百十年七月十二日

大阪正教會日曜學校生徒總代

マルク 岡田 成雄



祝 辭

生駒山翠の色の濃に花橘の軒端に匂ひぬる今日しも我が日の本の三都の一なる難波津の清き淀の流の邊りにいと美しく清き神の宮居は建立せられ此に成聖の式を擧るに至れり、されば真心より今日の御祭を幾千代かけて祝ひます君たちの大主教及び主教の君を始め奉り數多の神品貴賓はこゝに集せられこのいと尊きむしろひらかせ給ひ今や嬉び讚美と感謝との聲は堂中に充ち溢れんばかりなりこれ實に主の造り給ひしよき日なりいかで此日を祝ひ奉らざるべき、妾もこの席に連るを得てうれしさを包みあるす一言を呈して心の萬分の一に報い奉らんとす、

此れ主の在す見るべき殿なり地上に於ける天津國なり萬軍の主は常にこゝに在しつゝ我等を守り給ふなり觀よ大空に輝く聖十字架は生駒の峯の尙其よりもいや高く玉ちはふ堂内は花橘よりも美はし實に神の御祭は殿の内外に馨るなり此殿にて祈りすれば香爐の馨りの如く神の臺前に立ち昇るな

り嗚呼天津國は近づけり吾に入るべき靈の衣備りたりやあはれ世の荒波と漂ふ者よ來れ主は聖所より降福し給はん心の渴ける人々は來りて味へよ神は如何に仁慈限りなきを見ん聊か拙なき文を綴りて今日の御式を祝ひ奉るになんかしこ  
降生一千九百十年七月十二日  
エレンナ岡村

祝 辭

父と子と聖神の名に因る

今日は大阪正教會の新築聖堂が落成いたしましたまことに御目出たい日でございます今日は大主教初め主教ならびにことごとくの神父先生等がおいでになつてまことににぎやかであります此の聖堂は諸國の人のために建れた立派な聖堂でありますからこれからは皆さんなかよく一所にこの聖堂にきてよく祈禱をいたし神様の憐れを得ませうアミン

明治四十三年七月十二日  
大阪正教會日曜學校生徒總代 アレキサンドラ 野千白

祝 詞

抑々吾大阪正教會は明治十一年三月二日を以て領洗子三十六名の産聲を發してより爰に三十三の星霜を経て七百七十八人の更生を見るに至りたり然るに其間未だ聖堂の新築なきを以て甚だ遺憾に堪えざりしが全能の主神は遂に尊憲なる吾大主教ニコライ大父の倦まざる勤勉の手を以て敬虔なる露國の同信兄弟等より獻金を募集し昨年四月起工本年七月十二日の聖使徒祭を期して壯嚴なる成聖の大典を擧ぐることに祝福し終へり此の生神女庇護會堂は木造なれども良工の勤勞と監督者の勉勵とに依りて随分堅牢に建立せらる而かも該聖堂の地位は吾國五大河の一なる淀川の水面より高さこと幾んど百尺の處にあり其上七十一尺の鐘樓など巍々として天空を摩するの美觀は確かに浪速の景勝の雄たり自今此聖堂に於ては吾今上皇帝皇后兩陛下より百官有司と正教會の治理者並に諸階級の生者の爲に祈禱を爲し又濱寺及び長柄等の各墓地に埋葬せられし同信者兄弟の冥福を祈ると同時に

殊に此聖堂建立者の壯健救贖の爲に不斷神の寶座の前に獻禱せられんとす

希くは萬民の主は此の聖堂建立に盡力せられし諸主教と悉くの聖物獻納者等に天よりの祝福を授け給はんことを並に今日此悦ばしき成聖式に參集せし吾等一同の上にも屬神の祝福と成聖とを降し給はんことを聊か蕪言を呈して祝意を表すと云爾  
明治四十三年七月十二日  
大阪生神女庇護會 司祭セルゲイ鈴木 敬白

祝 辭

我が日本ノ全國ヨリスレバ東京ノ次ニ位スト雖モ特ニ關西諸邦ニ於テハ首位ヲ占ムル所ノ大阪市ニ新築ヲ企テラレシ至聖生神女庇護ノ聖堂ハ茲ニ竣工ヲ告ゲ我等ノ尊榮ナル「アルヒエビスコプ」ニコライ大師父ニ依テ成聖ノ式典ヲ行ハル謹ンデ按ズルニ聖堂ノ建立ハ其地方ニ神ノ教會ノ存立スル活ケル記念ニシテ全能者ノ光榮ハ之ニ依テ愈々輝キ至上者ノ恩寵ハ之ニ依テ益々衆人ニ灌ガル、ヲ致ス者ナリサレバ聖堂新增ノ一大吉事タルヤ敢テ



論ヲ要セズト雖モ余ガ今斯ノ大阪ニ新ニ一大美觀ヲ呈スルノ聖堂ヲ成聖セラレシ事ニ付テハ尙甚深ナル快感ヲ禁ズル能ハザル者ナリ何トナレバ大阪ハ我ガ肉身上ニテハ第二ノ故郷ニシテ心靈上ニテハ此處ニ光照ノ生命ニ生レシ第一ノ故郷ナリ斯ノ如クナレバ今日はノ盛典ヲ舉行セラル、ハ實ニ感喜ニ堪ヘズ敢テ蕪辭ヲ陳ベテ之ヲ祝シ併セテ此ノ建設ニ付テ特ニ大師父閣下ノ御計慮ヲ感謝シ且ツ萬里ノ山海ヲ阻ツル露國ノ兄弟等ガ之ガ爲ニ多大ノ佑助ヲ賜ヒシ恩眷ヲ記憶セザルヲ得ズ

新しく神の宮居の建てられて

とのひらきする今日をめでたき

降生一千九百十年

明治四十三年七月十二日

雅各荻野頓首敬白

祝詞

我等の元祖アダムエヲ樂園に在り主神の禁戒を犯し其身を樹間に避くるや主神之を喚び「汝は何處に在るや」と之れ實に神が全人類に其反省を要

求せし愛の宣言にして新約に所謂「爾宜しく改悔すべし蓋天國は邇し」の聖訓と符節を合するが如し固より救贖の教は至廣至深なりと雖も要するに「汝は何處に在るや」の問題を解決するに外ならず世は移り變るとも此問題は常に吾人の前に鮮なり蓋是れ人生問題千古の宿案にして聖賢哲師の解決せんと欲して未だ能はざる所而して之を最も明瞭に最も満足に解決を與ふる者は唯天啓のハリストス正教而已翻て試に我が同胞民衆は其肉體的に將精神的に於て果して「何處に在るや」を願ふ酒々として姦惡の濁流に溺れ暗黒の罪海に墮落しつゝ其底止する所を知らず恰も噴火山頭に舞踏を演ずるにも似て岌々乎として夫れ危哉由來大阪の地たるや天恵と地の利を占め商工業の中心にして日に月に隆盛を加ふ唯り人和の基たる宗教道徳に至ては未だ以て缺ぐる所なしと云ふ可らず夫れ宗教の信念全からず徳義の觀念確立せざる商工業は是猶根幹なき草木沙土の樓閣の如く枯凋轉倒を免れず苟も其隆盛を永久に維持し益發展して豈肉共に存終の美を濟んには先づ須らく天啓宗教の信仰の上

に安立せざる可らず然るに今天與の立場たる神の聖殿は落成を告げ爰に聖成式を擧げ普く同胞の爲に特に大阪市民の爲に提供せらる誠敬誠喜措く所を知らず聊か所懐を述べて其慶を相偕にせん事を冀ふと云爾

主降生一千九百十年七月十二日

伯耆米子正教會在任

傳道師ヘートル藤原林次郎

祝詞

本日ノ聖辰ヲトシ開堂セラル、大阪正教會聖堂成聖ノ式典ニ列シ恭シク祝意ヲ表ス希クハ神聖神ノ御聖護ハ永久ニ至ランコトヲ祈ル恐懼再拜

主降生一千九百拾年聖使徒祭

皇朝明治四拾叁年七月拾貳日

信越管區司祭殿西葛四原衛

父及子及聖神ノ名ニ依テナリ阿民

貴會新築聖堂茲ニ落成シ明後日ノ聖使徒祭日ヲ期シ將ニ成聖ノ大典ヲ擧ントス感謝欣懼ノ至リニ堪ヘズ願ハクハ主神ハ永久新聖堂ニ降臨シ其鴻恩

祝頌 餘言

ハ斯堂ヨリ四方ニ霑被セン事ヲ謹テ祝意ヲ表シ

明治四十三年七月十日

靜岡正教會 罪子キヨール 謹

司祭セルギイ鈴木神父貴下

大阪聖母守護會信徒御中

今般御堂落成之處成聖式ヲ祝ス

七月十二日

丹後國與謝郡宮津町字京街道 バホミイ 村 謹

祝成聖式、本日小生出席スベキ處不例ノ爲メ缺席致候

四十三年七月十二日

徳島正教會 司祭フクイ 眞 木

祝

天津神千代ましませと奉つる

みやきよめなす今日を嬉しき

靜岡縣駿東郡片濱村字小取助

傳教者カワイル 市川 茂平

四七



祝電二十九通

成聖式ヲ祝ス 鹿兒島教會  
 同文 長崎教會  
 同 羽後 岩崎教會  
 同 人吉教會  
 同 宮崎教會  
 同 高崎教會  
 同 仙臺教會  
 同 日向 俣肥教會  
 同 脇町教會  
 同 米子教會  
 大聖堂竣工並ニ成聖ノ大典ヲ祝ス  
 土山教會  
 品川教會  
 大津教會  
 京都教會  
 函館教會  
 德島正教青年會  
 東京正教神學校  
 成聖式ヲ祝ス  
 成聖式ヲ祝ス  
 成聖式ヲ祝ス  
 成聖式ヲ祝ス  
 成聖式ヲ祝ス

同文 愛々社  
 同 東京正教青年會  
 同 イオアン 鈴木傳教師  
 同 バエル 津田傳教師  
 同 セラフム 湊修道輔祭  
 同 サワテイ 大川傳教師  
 セリグチノ、ボズドラウリヤユ、プリン  
 ジニヤユ、ク、トルゼストウ  
 敦賀より フェドロフ  
 成聖式ヲ祝ス 長崎 シ ガ  
 同 ダニイル 廣岡傳教師  
 オメデタウゴザイマス エリセフ 東京正教信徒  
 謹賀御成聖式 イアコフ 松 平  
 成聖式ヲ祝ス 橋傳教師

參列員氏名の自署

大阪聖堂成聖ノ大典主教ヲ始トシテ諸司祭ノ參列スル者三十四人今各位ニ其姓名ヲ題セン

トヲ請ヒテ式典ノ記念ト爲ス傳教者諸氏及ビ職ヲ帶ビテ來阪セシ者モ亦後ニ附ス予モ亦其末班ヲ汚ス

明治四十三年七月

保羅中井天生識

編者曰此レヨリ原帖ニハ大主教以下各自署サレタル者ナレドモ、斯ノ印刷セル書ニハ其筆蹟ノマ、顯ハスコトヲ得ザルヲ以テ、姑ク其姓名ノ順序ヲ示スニ過ギズ。

日本のアルヒエビスコフニコライ(原文露文字)  
 京都のニビスコフセルギイ(同上)  
 京都正教會 長司祭西面 三井 道郎  
 白河正教會 司祭提持 小松 稻三  
 仙臺正教會 司祭彼得 笹川 定吉  
 千葉縣 司祭彼得 假野 成章  
 東京正教會 司祭ロマン 千葉 忠朔  
 湧谷正教會 司祭ボリス 山村雄五郎  
 佐沼顯榮會 司祭沃夫 水山 高志  
 東京北部正教會 司祭シメオン 湯川金太郎  
 東京深川正教會 司祭フェオトル 水野 親  
 筑後柳河正教會 司祭ベトル 河野 周造  
 岩手縣盛岡正教會 司祭ベトル 山懸金五郎

祝頌餘音

北海道札幌會 司祭尼透頼 櫻井宜次郎  
 前橋正教會 司祭把偉路 森田 亮  
 大阪生神女庇護會 司祭士求 鈴木 木  
 東京麴町正教會 司祭 澤邊佛太郎  
 函館復活教會 司祭アンドレイ 目時 金吾  
 岩手縣盛正教會 司祭イクナナイ 加藤 主計  
 名古屋正教會 司祭撒特爾 柴山 準行  
 高知正教會 司祭イアコフ 松田 善述  
 北海道北部正教會 司祭ロマン 福井 專  
 高崎正教會 司祭イオアン 小野 歸一  
 鹿兒島正教會 司祭雅各 藤平新太郎  
 豊橋正教會 司祭亞居拉 廣田欣太郎  
 長司祭ベトルブルガコフ(原文露文字)  
 秋田正教會 司祭モイセイ 白岩徳太郎  
 長崎正教會 司祭アントニイ 高井萬龜尾  
 松山正教會 司祭フョマ 武岡啓太郎  
 小田原正教會 司祭提多 中島 市造  
 長野正教會 司祭摩西 葛西 原衛  
 大阪正教會 輔祭彼得 内田政之助  
 聖堂工事監督正教本會副輔祭摩西 河村伊藏



東京本所正教會 副輔祭尼适頼 吉田 雄吉  
 岡崎正教會 傳教者利志利乙 田手 恭助  
 姫路正教會 傳教者ガウリイル 市川 茂平  
 京都正教會 傳教者伊望 磯久 美登  
 半田正教會 傳教者彼得 望月富之助  
 加古川正教會 傳教者雅各 岩田要次郎  
 神戸正教會 傳教者保羅 運澤 鋼一  
 和歌山正教會 傳教者イグサテイ 岩間 與一  
 大阪正教會 傳教者イオアン 薄井 忠三  
 東京品川正教會 副傳教者グリゴリイ内藤三雄  
 松山正教會 副傳教者アキラ 椎名 晟  
 德島正教會 副傳教者ダウイド 淺野 武

正教新報記者 ベトル 石川喜三郎  
 同 長輔祭デミトリイワウスキイ(原文露文字) ベトル 加美長助平  
 京都正教會輔祭 タイト 加納 一藏  
 東京本會詠隊教師 サツワ 齋藤 佐和  
 東京本會詠隊教師 ザハリヤ 淺野 島生  
 東京女子神學校教員 エウフィミヤ 伊東 祐子  
 京都正教女學校教員 ナデジタ 高橋 五子  
 同 オリカ 矢部於理加  
 同 ハリステナ 藤原 不二  
 同 マリヤ 馬場 竹の  
 正教會翻經筆受 パワエル 中井木免庵

跋

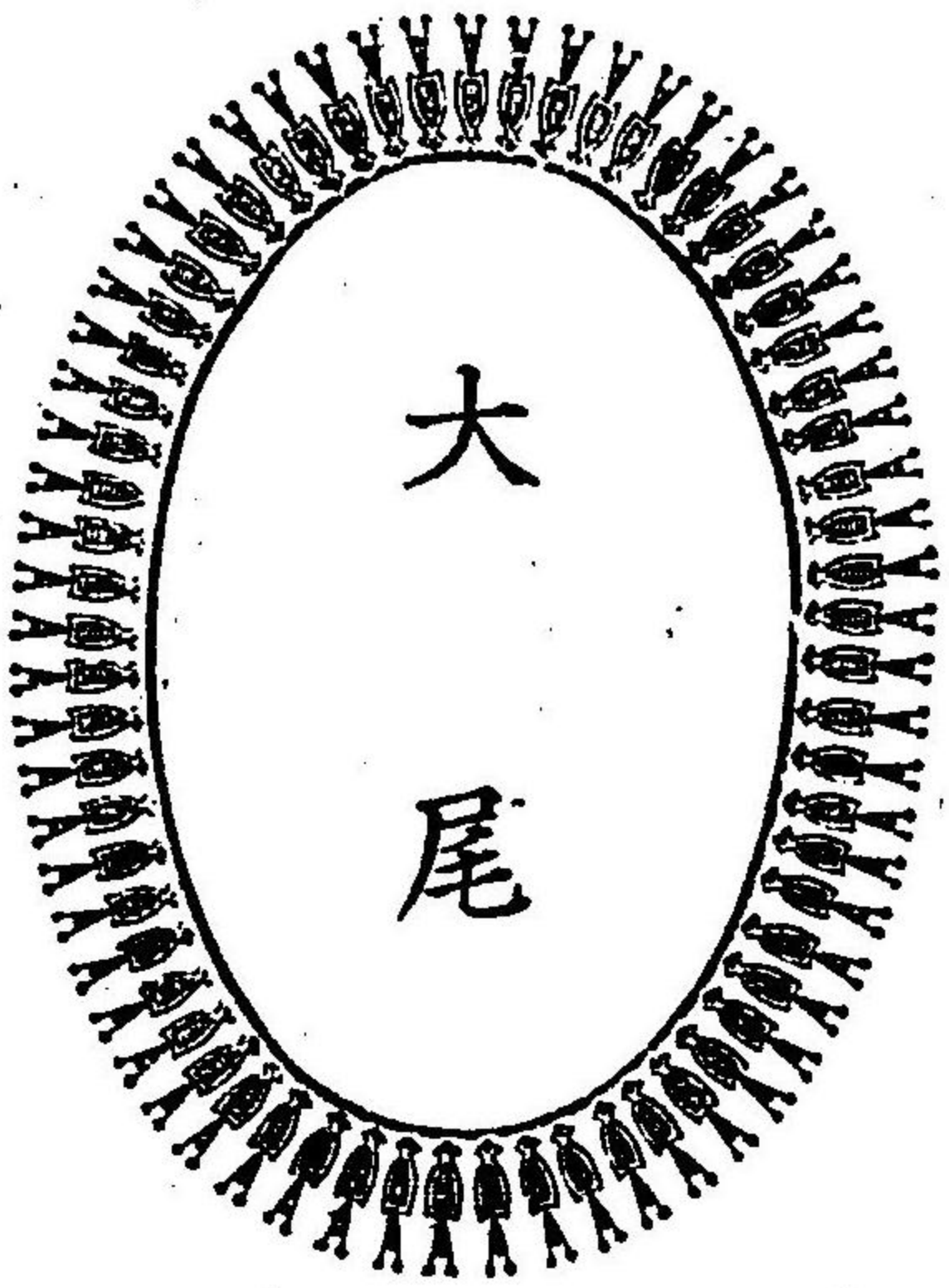
頌禱美讚假聲音而告于神明如香烟升聞至誠必錄于天其文辭本  
 在達意誦詠絕響而遺言存于地者盖芻狗焉耳雖然非文辭存于後  
 則千載之下餘音何由而傳哉大阪聖堂成聖之典諸教會所奉祝詞  
 共三十一通式畢三日大主教主教諸司祭輔祭傳教者衆信徒參集  
 新堂奉呈者更進捧讀讀畢箋翰滿案今而無修緝編次恐散逸不存  
 於是信徒胥謀糊繕成卷祝電及參列者姓名附于後題曰祝頌餘音  
 千載之下覽者猶聞頌禱之聲。

明治庚戌初秋

奠陰保羅識

□ □





明治四十四年七月十日印刷  
同 年八月十五日發行

定價金七拾五錢

發行所

正教會事務所

電話本局二千五百六十九番

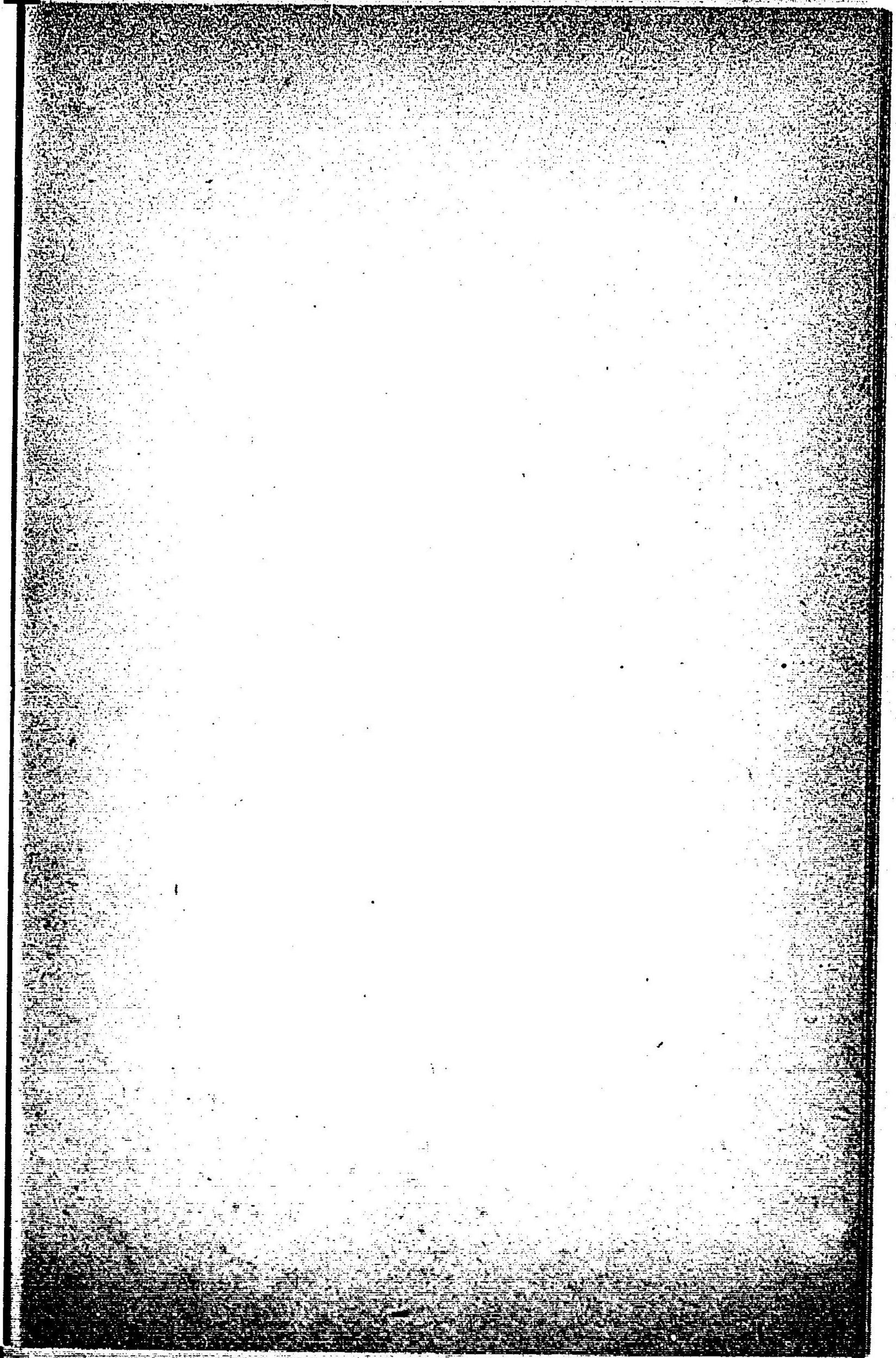
編述兼發行者 東京市神田區駿河臺東紅梅町六番地  
 正教會編輯所  
 印刷者 東京市京橋區桶町五番地  
 小塚 彦三郎  
 製版者 東京市小石川區上富坂上十七番地  
 水谷 寫真場  
 東京市神田區駿河臺東紅梅町六番地

聖堂新刊畫帖及廣告

東京復活本聖堂 全一冊 繪畫多幅 本製 價金一圓十錢 郵稅十二錢  
 東京十字架聖堂 全一冊 繪畫多幅 本製 價金八拾錢 郵稅十錢  
 京都福音聖堂 全一冊 繪畫多幅 本製 價金四十五錢 郵稅六錢  
 聖使徒の傳 全一冊 繪畫多幅 本製 價金二十錢 郵稅二錢  
 安和の宗教 全一冊 布教用 價金五錢 郵稅三錢

右編者所 東京市神田區駿河臺東紅梅町六番地  
 正教會事務所  
 水谷 寫真場

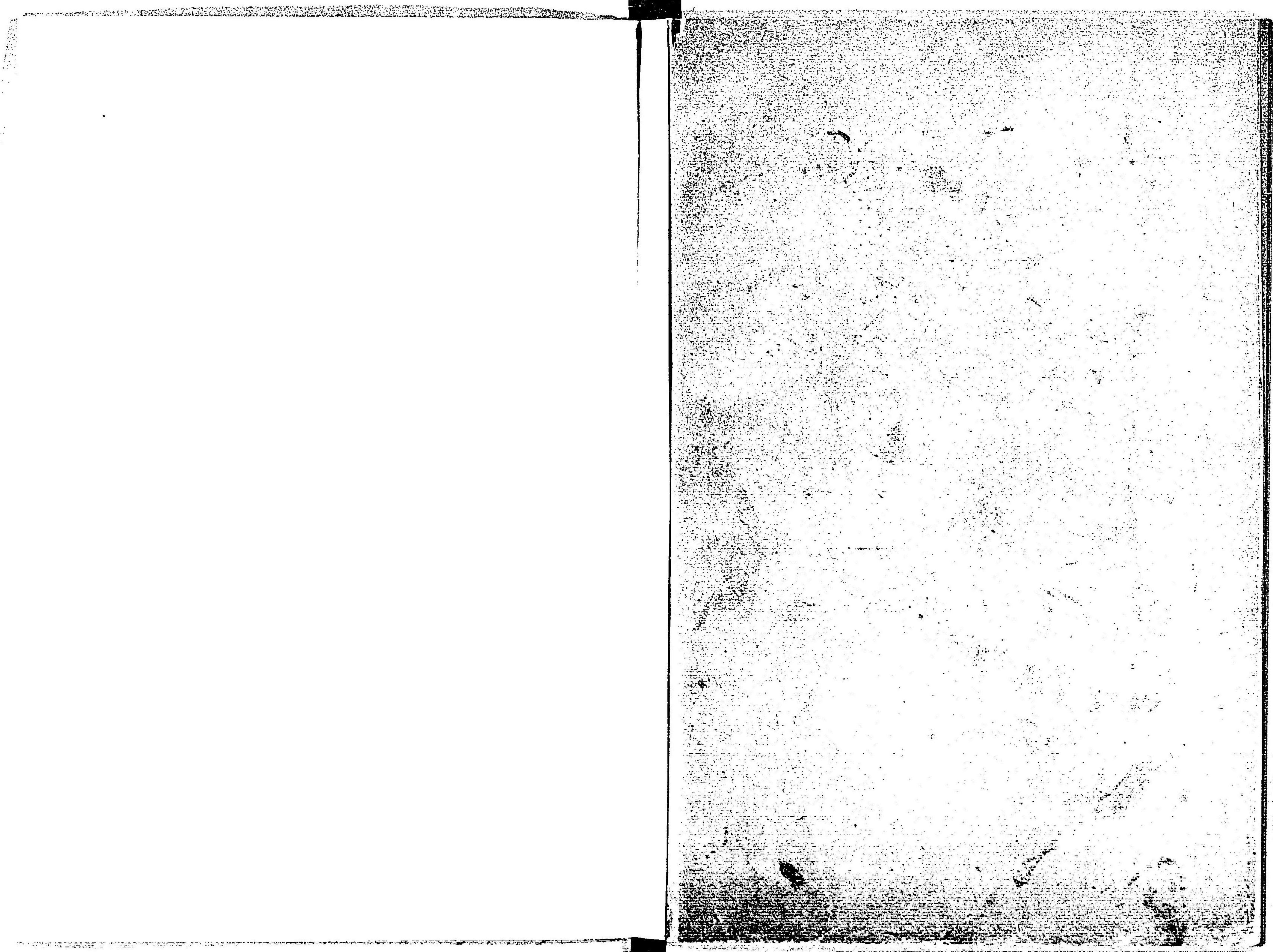




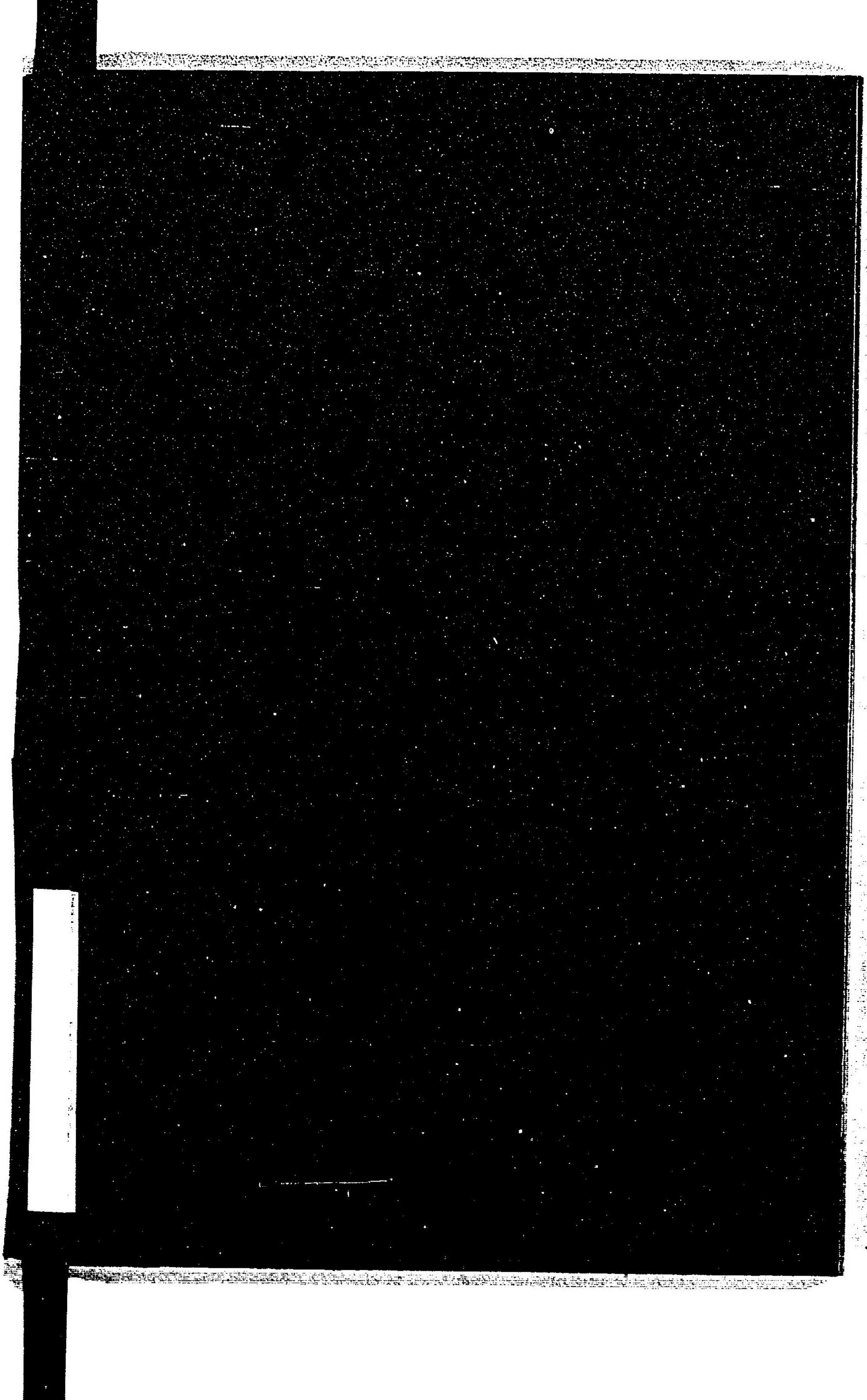


267  
186









Small white label with faint, illegible text.



特49

310

大阪生神女庇護聖堂

国立国会図書館

020286-000-3

特49-310

大阪生神女庇護聖堂

正教本会編輯所／刊

図版

M44

ABI-0092





